

博士論文

現代日本語の「受身・可能・自発・尊敬」表現における

ジャンル間の使用状況の相違に関する研究

—助動詞「(ラ) レル」を軸に—

王 貞貞

広島大学大学院国際協力研究科

2017年9月

現代日本語の「受身・可能・自発・尊敬」表現における  
ジャンル間の使用状況の相違に関する研究  
—助動詞「(ラ) レル」を軸に—

D143945

王 貞貞

広島大学大学院国際協力研究科博士論文

2017年9月

広島大学大学院国際協力研究科

論文名: 現代日本語の「受身・可能・自発・尊敬」表現におけるジャンル間の使用状況の相違に関する研究—助動詞「(ラ)レル」を軸に—

学位の名称: 博士(学術)

学生番号: D143945

氏名: 王 貞貞

2017年 8月 18日

審査委員会

委員長・教授

佐藤 暢治



准教授

深見 兼孝



教授

堀田 泰司



広島大学大学院文学研究科 教授

高永 茂



関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科 教授

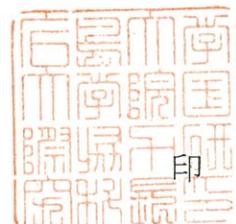
于 康



2017年 9月 1日

研究科長

馬場 卓也



## 目次

図.....	iv
表.....	v
<b>第1章 序論</b> .....	<b>1</b>
1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究の目的.....	3
1.3 研究方法と研究資料.....	4
1.4 本論文の構成.....	8
<b>第2章 先行研究</b> .....	<b>9</b>
2.1 助動詞「(ラ)レル」についての先行研究.....	9
2.2 本論文における(ラ)レル形式の四用法の判別基準.....	10
<b>第3章 受身</b> .....	<b>13</b>
3.1 受身表現にかかわる各術語の定義.....	13
3.1.1 受身文.....	13
3.1.2 受身文の対応する能動文.....	14
3.1.3 受身文の主語.....	15
3.1.4 受身文の動作主.....	15
3.2 受身文の分類についての先行研究および本論文での分類基準.....	16
3.2.1 働きかけや影響の直接性・間接性について.....	17
3.2.2 部分受身と所有受身について.....	18
3.2.3 本論文での分類基準.....	20
3.2.4 迷惑性について.....	23
3.3 各ジャンルにおける受身表現の集計結果およびその分析.....	26
3.3.1 新聞記事.....	26
3.3.2 文学(地の文).....	31
3.3.3 ブログ.....	33
3.3.4 テレビニュース.....	36

3.3.5	テレビドラマ .....	39
3.3.6	トーク番組.....	44
3.4	本章のまとめ .....	47
<b>第4章</b>	<b>可能 .....</b>	<b>49</b>
4.1	可能表現にかかわる各術語の定義.....	49
4.1.1	可能表現の定義 .....	49
4.1.2	可能表現の形式 .....	50
4.2	可能表現の分類についての先行研究および本論文での分類基準 .....	50
4.2.1	可能の意味による分類.....	51
4.2.2	可能の条件による分類.....	55
4.3	各ジャンルにおける可能表現の集計結果およびその分析 .....	58
4.3.1	新聞記事 .....	60
4.3.2	文学（地の文） .....	66
4.3.3	ブログ .....	71
4.3.4	テレビニュース .....	75
4.3.5	テレビドラマ .....	77
4.3.6	トーク番組.....	82
4.3.7	「ウル・エル」及び「デキル」について.....	85
4.4	本章のまとめ .....	87
<b>第5章</b>	<b>自発 .....</b>	<b>88</b>
5.1	自発表現の定義および形式.....	88
5.1.1	自発表現の定義 .....	88
5.1.2	自発表現の形式 .....	90
5.2	各ジャンルにおける自発表現の集計結果およびその分析 .....	91
5.2.1	新聞記事 .....	96
5.2.2	文学（地の文） .....	101
5.2.3	ブログ .....	109
5.2.4	音声言語の3つのジャンル .....	113
5.3	本章のまとめ .....	117

<b>第6章 敬語</b> .....	<b>119</b>
6.1 敬語表現の定義、分類および形式 .....	119
6.1.1 敬語表現の定義および分類 .....	119
6.1.2 尊敬語の動詞の表現形式 .....	121
6.2 各ジャンルにおける敬語表現の集計結果およびその分析 .....	124
6.2.1 新聞記事 .....	125
6.2.2 文学（地の文） .....	131
6.2.3 ブログ .....	137
6.2.4 テレビニュース .....	142
6.2.5 テレビドラマ .....	147
6.2.6 トーク番組 .....	152
6.3 本章のまとめ .....	156
<b>第7章 終章</b> .....	<b>158</b>
7.1 本研究の総合的考察 .....	158
7.2 本研究から日本語教育への橋渡し .....	164
7.3 今後の課題 .....	165
<b>参考文献</b> .....	<b>167</b>
<b>謝 辞</b> .....	<b>173</b>



図 1-1	本論文で使う六つのジャンルの位置づけ.....	5
図 5-1	佐藤・仁科（1997:65）における「判断の根拠の提示の仕方」.....	95
図 6-1	菊地（1997:119）の提唱する「敬語的人称」.....	125
図 7-1	野村（2011:7）における「話し言葉の時代的变化」.....	163

## 表

表 1-1	『総合日語（第二冊 修訂版）』第 24 課での受身文の取り上げ方.....	2
表 1-2	『標準日語初級教程（下冊）』第 24 課での受身文の取り上げ方.....	2
表 1-3	本論文の研究資料.....	6
表 1-4	六つのジャンルにおける助動詞（ラ）レルの四用法の使用率.....	8
表 1-5	可能・自発・敬語のほかの形式も含めた場合の統計データ.....	8
表 3-1	森山（1988:110）における各分類の位置づけと連続性.....	18
表 3-2	各先行研究における「部分受身」「所有受身」の直接性・間接性に関する規定.....	20
表 3-3	各先行研究における受身文の分類ごとの「迷惑性」.....	24
表 3-4	「新聞記事」の受身文 100 文についての統計データ.....	27
表 3-5	「新聞記事」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ.....	29
表 3-6	「新聞記事」における主語・動作主の有生性の統計データ.....	31
表 3-7	「文学（地の文）」の受身文 100 文についての統計データ.....	32
表 3-8	「文学（地の文）」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ.....	32
表 3-9	「文学（地の文）」における主語・動作主の有生性の統計データ.....	33
表 3-10	「ブログ」の受身文 100 文についての統計データ.....	34
表 3-11	「ブログ」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ.....	34
表 3-12	「ブログ」における主語・動作主の有生性の統計データ.....	34
表 3-13	「テレビニュース」の受身文 100 文についての統計データ.....	36
表 3-14	「テレビニュース」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ.....	37
表 3-15	「テレビニュース」における主語・動作主の有生性の統計データ.....	37
表 3-16	「テレビドラマ」の受身文 100 文についての統計データ.....	40
表 3-17	「テレビドラマ」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ.....	40
表 3-18	「テレビドラマ」における主語・動作主の有生性の統計データ.....	40
表 3-19	両ドラマの回ごとに出現する受身文の数.....	42
表 3-20	「トーク番組」の受身文 100 文についての統計データ.....	44
表 3-21	「トーク番組」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ.....	44
表 3-22	「トーク番組」における主語・動作主の有生性の統計データ.....	44

表 4-1	奥田（1986）における可能文に対する考察 .....	52
表 4-2	本論文における「潜在可能・実現可能」とテンスとの対応に関するとりえ方 .....	54
表 4-3	六つのジャンルにおける四種類の可能表現形式の統計データ .....	58
表 4-4	音声言語の 3 つのジャンルにおける受身と可能の用例数.....	59
表 4-5	「新聞記事」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計デ ータ .....	61
表 4-6	「新聞記事」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計デ ータ .....	63
表 4-7	「文学（地の文）」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による 統計データ .....	67
表 4-8	「文学（地の文）」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による 統計データ .....	68
表 4-9	「ブログ」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計デー タ .....	72
表 4-10	「ブログ」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計デー タ .....	73
表 4-11	「テレビニュース」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による 統計データ .....	75
表 4-12	「テレビニュース」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による 統計データ .....	77
表 4-13	「テレビドラマ」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統 計データ .....	79
表 4-14	「テレビドラマ」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統 計データ .....	80
表 4-15	「トーク番組」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計 データ .....	83
表 4-16	「トーク番組」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計 データ .....	84
表 4-17	六つのジャンルにおけるウル・エル形式可能表現の異なり動詞とその数 .85	

表 4-18	六つのジャンルにおけるデキル形式可能表現の数とその割合 .....	86
表 5-1	六つのジャンルにおける二種類の自発表現形式の統計データ .....	92
表 5-2	「新聞記事」における二種類の自発表現形式の統計データ .....	96
表 5-3	「新聞記事」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況 .....	97
表 5-4	「文学（地の文）」における二種類の自発表現形式の統計データ .....	101
表 5-5	「文学（地の文）」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況 .....	107
表 5-6	「ブログ」における二種類の自発表現形式の統計データ .....	109
表 5-7	「ブログ」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況 .....	110
表 5-8	「文学」における感情動詞の出現状況 .....	111
表 5-9	「文学」における想起動詞の出現状況 .....	112
表 5-10	「テレビドラマ」と「トーク番組」における可能動詞形式の自発表現の統計データ .....	113
表 5-11	「テレビドラマ」と「トーク番組」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況 .....	115
表 5-12	六つのジャンルにおける可能動詞形式の自発表現に使われる動詞の内訳 .....	115
表 6-1	統計に使う敬語形式のグループ分け .....	124
表 6-2	六つのジャンルにおける各敬語表現形式の統計データ .....	124
表 6-3	「新聞記事」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ .....	126
表 6-4	「文学（地の文）」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ .....	131
表 6-5	「ブログ」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ .....	138
表 6-6	「テレビニュース」における皇室敬語の補充データ .....	142
表 6-7	「テレビドラマ」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ .....	147
表 6-8	両ドラマにおける敬語表現の内訳 .....	151
表 6-9	「トーク番組」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ .....	152
表 6-10	番組別の各敬語表現形式の統計データ .....	154
表 6-11	番組別の発話者による統計データ .....	154
表 7-1	受身における六つのジャンル間の類似点と相違点 .....	158

表 7-2	可能における六つのジャンル間の類似点と相違点.....	159
表 7-3	自発における六つのジャンル間の類似点と相違点.....	160
表 7-4	敬語における六つのジャンル間の類似点と相違点.....	161
表 7-5	六つのジャンルにおける助動詞（ラ）レルの四用法の使用率.....	162
表 7-6	可能・自発・敬語のほかの形式も含めた場合の統計データ.....	162

## 第1章 序論

本章では、本研究の研究背景、研究目的、研究方法と研究資料、および本論文の構成について述べる。

### 1.1 研究の背景

日本語の助動詞「れる・られる」（以下、「(ラ)レル」と略す）に、受身・可能・自発・尊敬という四つの用法があるのは、周知のとおりである。また、受身を除いた可能・自発・尊敬はいずれもほかの表現形式でも表され、動詞や文脈によって使い分けられているのも、よく知られている。(ラ)レルおよびその各用法に関する理論的・実証的研究はたくさんあるが、文字言語と音声言語<sup>1</sup>の両面からこの四つの用法の使用実態を総括的に考察した研究は、管見の限りまだないようである。

また、筆者自身の日本語学習経験から言えば、助動詞(ラ)レルの受身・可能用法は特に重視されていたが、自発・尊敬の用法はそうとは言えない。しかし、自発はともかくとして、日本で生活していると、尊敬の(ラ)レルも実は日本語母語話者によってたくさん使われているという印象を受ける。つまり学習者の勉強している内容は、母語話者が実際に使っている日本語との間に一定のギャップがあるということである。より自然な日本語を身につけるには、文字言語と音声言語における母語話者の使用実態を把握しなければならない。

(ラ)レルの受身用法が重視されているとは言えるものの、まだ問題点があると言わざるを得ない。受身文は、構文によって直接受身と間接受身とに大別され、また意味によってまともな受身と迷惑受身とに分けられている。そして、細かい下位分類や、直接受身・間接受身と、まともな受身・迷惑受身との間の相応関係については、多様な見方がある。手元にある中国語を母語とする日本語学習者を対象とする2冊の教科書、『総合日語(第二冊 修訂版)』<sup>2</sup>と『標準日語初級教程(下冊)』<sup>3</sup>を確認してみると、それぞれ以下のよ

---

<sup>1</sup> 本論文は「文字言語・音声言語」をそれぞれ、文字を媒介とする言語・音声を媒介とする言語と定義する。加藤ほか編(1989:204)によると、これは「書き言葉・話し言葉」と呼ばれることもあるが、「話しことば」「書きことば」という用語は、それぞれ言語表現に特徴的にあらわれる単語の性格をさすこともあるため、本論文はジャンルの区分に「文字言語・音声言語」を使い、それぞれの性格面を重視して言うときに「書き言葉・話し言葉」を使うことにする。

<sup>2</sup> 北京大学出版社、2010年。『総合日語(修訂版)』シリーズは中国の大学の日本語専攻向けに、

うに分類されている。

『総合日語（第二冊 修訂版）』では、受身文は第24課で取り上げられている。その内容は分類、文型、迷惑性からまとめると、表1-1のようになる。

表 1-1 『総合日語（第二冊 修訂版）』第24課での受身文の取り上げ方

分類	文型	迷惑性
A. 直接 被动句	①N1 (人) が/は N2 (人) に V (ら) れる ②N1 (物・こと) が/は (N2 (人) に) V (ら) れる ③N1 (物・こと) が/は N2 (人) によって V (ら) れる ④N1 (人) が/は (N2 (人) に/から) N3 を V (ら) れる	
B. 物主 被动句	N1 (所有者) が/は N2 に N3 (所有物) を V (ら) れる	较之主动句, 通常明显地表现出受害意识。
C. 间接 被动句	N1 (人) が/は N2 に (N3 を) V (ら) れる ①自动词做谓语的间接被动句 ②他动词做谓语的间接被动句	谓语动词多为自动词, 表示某一事态的发生间接地给另一方 (多为说话人) 带来了不良的影响或损害。

『標準日語初級教程（下冊）』も同じく第24課で受身文を取り上げ、表1-2のように分類している（表中のAは動作主を表し、Bは動作の受け手を表す）。

表 1-2 『標準日語初級教程（下冊）』第24課での受身文の取り上げ方

	主动句	被动句
B 为有生命的物体	A は B を他动词	B は A に他动词+れる/られる
	A は B に C を/と他动词	B は A に C を/と他动词+れる/られる
	A は B に [C と] 自动词	B は A に [C と] 自动词+れる/られる
	A は B の C を他动词	B は A に C を他动词+れる/られる
B 为无生命的物体	A が自动词 (部分自动词)	B は A に自动词+れる/られる (B 为受害者)
	A は B を他动词 (A 为集体名词)	B は A に他动词+れている/られている (一般用被动句)
	A は B を他动词 (无须指出 A)	B が/は他动词+れる/られる (一般用被动句)

そして後の第33課では、単独に「[体言] によって [动词未然形 (ら) れる] 」とい

中日両国の日本語専門家がはじめて共同で編纂した教材である。全部で4冊、50課（第1冊：1 - 15課、第2冊：16 - 30課、第3冊：1 - 10課、第4冊：11 - 20課）から構成されている。

<sup>3</sup> 北京大学出版社、2003年。『標準日本語初級教程』は日本東京外国語大学留学生日本語教育センター著『初級日本語』『中級日本語』（1994年版）に基づいて、中国の大学の日本語専攻一年生のために改編されたものである。上冊1 - 17課と下冊18 - 34課から構成されている。

う文型を取り上げている。

この2冊の日本語教科書では、受身文の取り上げ方がずいぶんと異なっている。しかし、それと同時に、受身文の各下位分類を重要さの区別もなく同一に扱っている点で、両者には類似点もみられる。そこで疑問に思うのは、このように同一に扱ってよいのかということである。さらには、一つの課に、受身文の全分類をこんなにも集中的に、学習者に投げかけてよいのかという疑問もある。

また、可能用法においても、四方田（1991）、張（2001）、望月（2009）、王（2017）など可能表現の誤用についての研究は、可能表現に関してはまだ検討する価値があることを示唆している。たとえば王（2017）は、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文に見られる誤用を調査し、その数、パターンや原因などについて分析している。その結果、可能形式の間の混同というパターンが全体の割ほどを占めていることを明らかにした。なお、「動作を実現する条件・理由」と「動作の実現への言及」という可能構文の意味による誤用統計では、それぞれ「状況可能」と「実現可能」の割合が高いという結果が観察されている。王（2017）は比率の最も高い「過剰」パターンに焦点を当てており、以上の現象について説明や検討を展開していないが、提示された問題点は参考になる。また、母語の干渉という誤用原因も指摘されている（四方田 1991、張（2001）、望月 2009 など）が、これも可能表現の使用現状についての理解と把握を深めることによって、いくぶん解消できると思われる。

繰り返しになるが、以上述べてきた問題と難点を解くには、日本語母語話者が実際にどのように受身・可能・自発・尊敬表現を使っているかを知らなければならない。工藤（1995:165）は、「同一の形式も、異なるテキスト構造のなかでは、異なる意味・機能をもつことになる」と指摘しているが、この四つの文法形式もまた同じ状況に置かれている可能性がある。そこで本論文は、助動詞「(ラ)レル」のこの四つの用法を軸に、現代日本語の文字言語と音声言語の両面から、その使用実態を解明する。

## 1.2 研究の目的

本論文は現代日本語の六つのジャンル<sup>4</sup>を資料に、受身・可能・自発・尊敬という四つの用法を研究対象とし、現代日本語における助動詞（ラ）レルの全体的な使用状況を解き明

<sup>4</sup> 本論文では、村田・山崎（2011:87、注1）に従い、ジャンルという用語を「個人の持つ文体的特徴を超えたところに存在するある特徴パターンを持った文章グループ」と定義する。

かすことを研究目的とする。具体的には、以下の三つの点に分けられる。

- ① 受身・可能・自発・尊敬という四つの用法の各ジャンルにおける使用状況を明らかにする。そのために、各用法ごとに一つの章を設けて、用法自体およびそれにかかわるほかの術語について定義を行い、比較するためのほかの表現形式を確定し（可能・自発・尊敬の場合）、分類方法を定め、いくつかの統計項目を選び、データを集める。そして、数はむろんのこと、意味（たとえば受身での「直接性・間接性」「迷惑・中立」、可能での「潜在可能・実現可能」など）、構文（たとえば「テンス」「肯定形・否定形」「人称」など）などの具体的な面からその使用状況を考察する。
- ② 受身・可能・自発・尊敬という四つの用法の各ジャンル間における使用上の相違を明らかにする。そのために、各用法の章において、ジャンルごとに独特な実例を挙げることによって、各ジャンルの特徴を示し、その特徴および相違の原因についても分析する。
- ③ 上で集計した受身・可能・自発・尊敬のデータを統合し、各ジャンルにおける受身・可能・自発・尊敬という四つの用法の割合を明らかにしたうえで、各ジャンル間の相違を見出し、その原因についても分析する<sup>5</sup>。

### 1.3 研究方法と研究資料

以上の研究目的を達成するために、本論文は現代日本語を対象に、主に「書き言葉性・話し言葉性」と「フォーマル・インフォーマル」（改まりの度合）という二つの面から、連続性をなしていると思われる六つのジャンル——「新聞記事」「文学（地の文）」「ブログ」「テレビニュース」「テレビドラマ」「トーク番組」を選んだ。

まず文字言語のジャンルについて説明する。「新聞記事」は、政治・経済・スポーツ・芸能・国際情勢などを報じる改まった紙媒体として、主として客観的に情報を伝達する役割を担っているため、非常にフォーマルさの高い文字言語のジャンルと言えよう。「ブログ」は、主に個人的体験、見聞、心覚えを記すこと、あるいはある話題について手軽に感想を述べることに使われ、主観的でインフォーマルな表現が多いと予想される。しかし、

<sup>5</sup> ただ、文字言語では「語数」、音声言語では「時間」がそれぞれジャンルのデータ総量の単位となっているため、各用法および総用例数の全体に対する使用率が統一の基準で算定できず、比較ができないのは、すこし残念なことである。

時事問題について論説する論理性の高い文章や、スポーツの試合を記録して評論するような記述性の高い文章も見られることから、話し言葉的な性質を含みつつも、書き言葉的な性質を保っていると考えられる。そして「文学（地の文）」は、叙述性の高い場面描写や、登場人物の心理描写が主であり、書き言葉性が高い一方、「新聞記事」よりは言葉遣いが柔らかいと思われるため、それと「ブログ」の中間に位置づけられるべきジャンルと言えるであろう。

次に、音声言語のジャンルについて説明する。「新聞記事」と同じく客観的情報伝達が求められる「テレビニュース」は、音声言語ではあるが、原稿があるため、非常に文字言語に近い側面をもっているフォーマルな音声言語と言ってよかろう<sup>6</sup>。「テレビドラマ」（本論文では現代社会生活が中心のドラマを使用）は、現代社会の日常的場面における日本人の言葉遣いを反映した好適な素材であるが、あらかじめ定められたシナリオがあるため、書き言葉的要素を多少帯びていると言えよう。一方、「トーク番組」は、台本も決められたセリフもなく、現場でリアルに言葉のやり取りがなされるため、もっとも自然会話に近い音声言語のジャンルとして扱ってよいと考えられる。

この六つのジャンルの位置づけを大まかに図で示せば、図 1-1<sup>7</sup>のようになる。

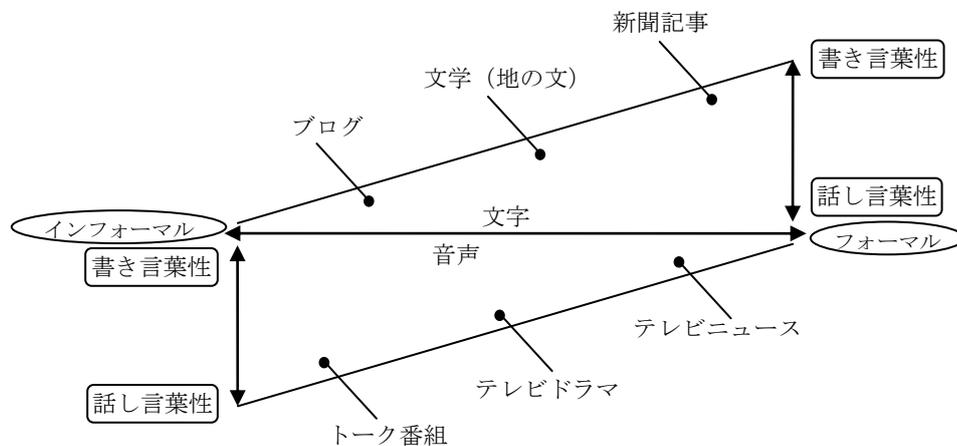


図 1-1 本論文で使う六つのジャンルの位置づけ

<sup>6</sup> 石黒（2014）によると、テレビやラジオのニュースは「完全原稿が用意されており、それを読みあげているにすぎないという点で書き言葉であると考えられる」（115頁）が、「直示性」や「談話構造」などの面において、「話し言葉性を帯びている」（133頁）ものとなる。

<sup>7</sup> この図は、高田（2007:70）の図1を参考に作成したものである。この図1はまた、Von Peter Koch und Wulf Oesterreicher（1985:23）"Sprache der Nähe - Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte."における Fig. 3をもとに、変更が加えられたものである。

本論文はこの六つのジャンルから受身・可能・自発・尊敬用法の各表現形式の用例を抽出し、データの集計と分析を行っていく<sup>8</sup>。具体的には、表 1-3 に示したテキストを研究資料として使っている。

表 1-3 本論文の研究資料

ジャンル		資料の出典
文字 言語	新聞記事	『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のオンライン版「中納言」
	文学(地の文)	同上
	ブログ	同上
音声 言語	テレビ ニュース	YouTubeチャンネル「ANNnewsCH」「FNNnewsCH」「TBS News-i」2015年5月10日 - 16日
	テレビドラマ	『花咲舞が黙ってない』(第1シリーズ)と『ラスト・フレンズ』
	トーク番組	『徹子の部屋』と『テレフォンショッキング』

文字言語の三つのジャンル「新聞記事」「文学(地の文)」「ブログ」は、すべて国立国語研究所コーパス開発センターによって構築された、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のオンライン版「中納言」から取り出したものを使っている。BCCWJのHP<sup>9</sup>での紹介によると、BCCWJは現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築されたコーパスである。新聞、雑誌、書籍、白書、ネット掲示板、ブログ、法律、国会会議録、教科書など幅広いジャンルにまたがり、1970年代から2000年代にかけて、あわせて1億430万語<sup>10</sup>のデータを格納している。本論文は、そのオンライン版「中納言」の「短単位検索」という便利なツールを用い、「新聞記事」では「出版・新聞(コア<sup>11</sup>)、全国紙、2000年代」、「文学」では「特定目的・ベストセラー(非コア)、文学、2000年代」、「ブログ」では「特定目的・ブログ(コア)、2000年代」とそれぞれ検索対象の範囲を設定し、検索を行った。そして、ダウンロードした検索結果の中から、対象データを手作業で絞り込み、研究資料として使っている。

音声言語については、次のとおりである。「テレビニュース」は、動画共有サイトYouTubeにおいて、テレビ朝日が運営するチャンネル「ANNnewsCH」、フジテレビが運営するチ

<sup>8</sup> 各用法の分類基準や統計項目については、それぞれの章に詳細を譲る。

<sup>9</sup> [http://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/) (最終アクセス日 2017年4月1日)

<sup>10</sup> 2017年4月1日現在のデータ。

<sup>11</sup> 「コアデータ」とは、BCCWJの中で高い精度で解析された、全体の約100分の1のデータのことである。BCCWJでは、「新聞」と「ブログ」は「コアデータ」が作られているが、「ベストセラー」はそれが作られていない(2015年7月31日現在)。

チャンネル「FNNnewsCH」、TBS テレビが運営するチャンネル「TBS News-i」から、2015年5月10日から16日にかけてのニュース動画を任意に選び、そこから抽出した対象データを資料に用いている<sup>12</sup>。そして「テレビドラマ」は、職場中心の『花咲舞が黙ってない』（第1シリーズ）<sup>13</sup>と、友達同士の関係が中心の『ラスト・フレンズ』<sup>14</sup>を使用している。また「トーク番組」は、黒柳徹子司会の『徹子の部屋』<sup>15</sup>と、森田一義（タモリ）司会の『テレフォンショッキング』<sup>16</sup>を任意に何回かずつ選び、対象データを抽出して資料に用いている。

分析は後述するが、ここでまず以上の資料から取り出した対象データを概観しておく、表1-4と表1-5のようになる。表1-4は六つのジャンルにおける助動詞（ラ）レルの四つの用法の使用率であり、表1-5は可能・自発・敬語<sup>17</sup>のほかの形式も含めた場合の統計データである。表1-4を見ると、助動詞（ラ）レルはどのジャンルにおいても受身用法が中核的な存在であり、7～9割を占めている。可能はそれに次ぐ第2位を占めるが、割合は非常に低い。自発は全体的にきわめて少ないが、尊敬は使用率の相対的に高いジャンルもある。（ラ）レル形式の四つの用法間に使用上の偏りがうかがえる。

また表1-5からは、他の形式を加えることにより、四種の表現の間に比率の変化が起こり、自発は依然として少ないが、可能と敬語の比率は著しく増えていることが分かる。これらの表現においては、他の形式の存在が（ラ）レル形式の使用の少なさにつながっている可能性を示唆している。

<sup>12</sup> 本論文は主にニュースアナウンサーの発話を考察対象とし、現場記者や取材人などの発話は除外している。

<sup>13</sup> 第1シリーズは、2014年4月16日から6月18日まで、毎週水曜日22:00 - 23:00に、日本テレビ系の「水曜ドラマ」枠で放送された（初回・最終回は22:00 - 23:10に放送）。全10話。

<sup>14</sup> 2008年4月10日から6月19日まで、毎週木曜日22:00 - 22:54に、フジテレビ系列で放送された。全11回。略称は「ラスフレ」。

<sup>15</sup> 1976年2月2日にスタートした、テレビ朝日系列で平日に放送されている長寿トーク番組である。

<sup>16</sup> 『森田一義アワー笑っていいとも!』（フジテレビ系列）内の日替わりゲストトークコーナーであり、番組初回（1982年10月4日・第1回）から最終回（2014年3月31日・第8054回）まで唯一貫して放送されていた長寿コーナーである。

<sup>17</sup> 比較のために謙譲語の2形式も含めているため、ここは「尊敬」ではなく「敬語」という用語になっている。詳しくは第6章を参照されたい。

表 1-4 六つのジャンルにおける助動詞（ラ）レルの四用法の使用率

ジャンル 用法	文字言語						音声言語						合計	
	新聞記事		文学（地の文）		ブログ		テレビニュース		テレビドラマ		トーク番組			
受身	92%	1322	92%	1338	82%	357	96%	215	78%	197	80%	132	90%	3561
可能	5%	77	6%	87	11%	47	3%	7	16%	41	10%	16	7%	275
自発	2%	28	2%	30	2%	10	0%	0	0%	0	0%	0	2%	68
尊敬	1%	9	0%	1	5%	21	1%	3	6%	16	10%	17	2%	67
合計	100%	1436	100%	1456	100%	435	100%	225	100%	254	100%	165	100%	3971

表 1-5 可能・自発・敬語のほかの形式も含めた場合の統計データ

ジャンル 用法	文字言語						音声言語						合計	
	新聞記事		文学（地の文）		ブログ		テレビニュース		テレビドラマ		トーク番組			
受身	72%	1322	64%	1338	41%	357	84%	215	37%	197	35%	132	60%	3561
可能	25%	447	32%	674	48%	414	15%	38	48%	256	33%	125	33%	1954
自発	2%	34	3%	62	1%	12	0%	0	1%	4	1%	2	2%	114
敬語	1%	21	1%	18	10%	84	1%	3	15%	78	32%	123	5%	327
合計	100%	1824	100%	2092	100%	867	100%	256	100%	535	100%	382	100%	5956

#### 1.4 本論文の構成

本論文は、次の7章によって構成されている。

第1章は序論である。本研究の研究背景と研究目的、研究方法と研究資料、および論文の構成について述べる。

第2章は、助動詞「（ラ）レル」についての先行研究を紹介する。とくに従来議論の多い、分類上の難点ともなっている「受身・可能」および「可能・自発」の重なっている部分に関する先行研究を概観したうえで、本研究で使われる分類基準について述べる。

第3章から第6章までは、受身・可能・自発・敬語の順に、用法ごとに「（ラ）レル」形式を中心に各形式間の比較対照研究を行う。

第7章は本論文の結論である。六つのジャンルについて総合的考察を行った上で、本研究の成果に基づいて日本語教育への提言をまとめ、今後の課題について述べる。

## 第2章 先行研究

本章では、助動詞「(ラ)レル」についての先行研究を紹介したうえで、本論文における(ラ)レル形式の四用法の判別基準について述べる。

### 2.1 助動詞「(ラ)レル」についての先行研究

助動詞「(ラ)レル」が受身・可能・自発・尊敬という四つの意味用法を備えていることは、周知のごとくである。「(ラ)レル」を研究するには、主に二つのルートが考えられる。一つは個々の用法を別々に考察するルートであり、もう一つは諸用法を総括的に考察するルートである。前者についての先行研究はあとの各章に譲り、ここではまず「(ラ)レル」の諸用法を全体的に取り扱う研究から考察を進めていきたい。ここにもまた、二つの側面が含まれていると思われる。

一つは諸用法の共通性・一貫性を探り求める試みである。こうした研究の代表例としては、「自発根源説」が挙げられる。「自発根源説」は即ち、「自らそうなる意味からすべてがわかれ出た」(橋本 1969:289)とする用法発生の論理であり、現在は多くの研究者から支持を得ており、一種の定説として了解されているようである。ところが、これと異なったアプローチからこの問題に接するものもある。例えば益岡(2014:48)は、「人為性を背景化」し、「当該事態を「ナル」的に捉える」ところに(ラ)レル諸用法の共通性を見出している。鈴木(2011:67)は、日本語が能格言語から主格対格言語に変化する過程において、(ラ)レル形式は「受身の意味を獲得する一方で、形態の保守性により自発、可能の意味も残存した」と、近現代語における(ラ)レル諸用法の発展経緯、つまりその一貫性を論述している<sup>18</sup>。このほか、尾上(2003)の「出来文」的捉え方も注目に値する。それは即ち、(ラ)レル文の多義性を「事態全体の生起」というスキーマのもとで統一的に捉えるという主張である<sup>19</sup>。これらはいずれもそれなりの解釈力によって妥当性がサポートされている見解とは言えるが、現実の世界における(ラ)レルの使用状況を考察の主

<sup>18</sup> 鈴木(2011)の議論において、尊敬用法は「非態の意味で、しかも後出である」ことから除外されている。

<sup>19</sup> ただし、尾上の「出来文的把握」の体系においては、「(ラ)レル」の意味用法は通常言われている四つではなく、意図成就・自発・可能・受身・発生状況描写・非人称催行・尊敬の七つとなっている。詳しくは尾上(2003:38)を参照されたい。また、尾上(1998a, 1998b, 1999)も参考になりうる。

眼とする本論文にとって、それほど深くかかわる問題でないので、触れる程度にとどめ、詳細は略すことにする。

もう一つは、諸用法間の違いを探り出し、特に判別方法、あるいは区別する指標を探求しようとするものである。本論文にとっては、共通性より、むしろこちらのほうが肝心な問題である。しかし、これが一大難点であるのも、一般的な認識となっている。それは、共通性を持つことは、連続性をもつことを意味するからである。次節では、この判別方法に焦点を当て、いくつかの先行研究を紹介したうえで、本論文でとる判別基準を述べる。ただそのうち、尊敬用法はその異質性から、特にほかの用法と紛れやすいとされないのが普通であるため、本論文もそうした処理法に従い、以下の考察では尊敬用法の判別方法については省略する。

## 2.2 本論文における（ラ）レル形式の四用法の判別基準

まず森田（2007:42）に挙げられている例文から見ていこう（下線は筆者）。

- (a) どうやら機は墜落したものと考えられる。〈自発〉＝思われる
- (b) 調査の結果、機は墜落したものと考えられる。〈可能〉＝考えることができる
- (c) 調査の結果、機は墜落したものと考えられている。〈受身〉＝他者によって考えがなされる

森田は、(a)は「外の世界での事象に対する話者（表現主体＝己）の内なる把握内容の表明」、(b)は「調査の結果」を「考えられる」ことの根拠として示すことによって、「自発→可能への動きが見て取れる」としている。こうした考えから、森田は自発を「自然可能」、可能を「根拠による可能」と規定し、両者に「本質的な差はない」と主張している。そして(c)については、「テイル」を伴うことによって、状況の把握主体は(a)(b)の場合の話者から他者となり、「不特定多数「人々によって／皆に／専門家たちから／…」などの含みの、一般化されたそれら人々による受身的な状態叙述の文」となる。こうした分析から、森田は自発を「内的主観状態」、可能を「内的客観状態」、受身を「外的主観状態」と呼び分け、その本質を捉えている。いくつか要所を押さえているが、判別の基準としては物足りなさが感じられる。

次に寺村（1982）の議論を見ていきたい。寺村（1982:255-262）はまず、「受動的可能

表現」に受身と可能の繋がりを認めている。それは即ち、「XがV-可能形」という文型において、XがV-の表す動作を受けるものである場合の表現を指し、例えば「この茸が食べられる」という文はそれに当たる。こうした受動的可能表現の判定に対して、寺村は「Xが有情物（人、動物）であるかどうかと、動詞が自動詞か他動詞かということによって」という方法を提示している。この受動的可能表現は、理論上は確かに二義的と捉えられるが、実際の判断にあたって、普通は文脈によって容易に判定できるので、実用性の高い方法とは言いがたい。

また自発と可能の判別について、寺村（1982:275-278）は「「～テイル」という形をとれるか否か」という具体的なテストを持ち出し、「とれなければ可能態、とれば自発態と判定する」としている。そしてその理由としては、可能と自発の本質的な違い、つまり「可能態というのは、状態性の表現、自発態というのはできごとの表現」であることにあるとされている。しかし、先述した森田（2007）もそうであるように、テイル形の適用を判定の基準とする主張はほかにもみられるが、判定の結果が寺村（1982）と異なることがほとんどのようである。

例えば森山（1988:132）は、(ラ)レルの自発用法では「始動的な意味が取り上げられ、それ以外の意味は問題にならない」ため、「アスペクト的な制限」としてテイル形にはならず、もしテイル形をとった場合は、「自発の意味から離れ、受け身的な特別な意味でしか解釈できない」と指摘している。寺村（1982）の主張に対し、こちらのほうがより多くの支持を得ているようなので（ほかに堀川（1992:178）<sup>20</sup>、渋谷（2006:58）もある）、本論文もこちらの立場に従うことにする。

森山が提示する自発と可能とを判別するもう一つの方法は、「否定」である。自発は「出来事が発生する」という意味を表すため、「否定にできない」性質を持っており、「あえて無理に否定すれば、むしろ、不可能という意味に近くなる」<sup>21</sup>。この形態上の特徴は、自発と可能とを見分ける一つのテストとして使えると思われる。

<sup>20</sup> 堀川（1992:178, 181）は、テイルを付けた形が自発ではなく受身であることの根拠として、「カラやニヨッテによって感情の主体を表すことができるのはテイルをつけた形（受身）だけである」からと主張している。

<sup>21</sup> ただし、森山（1988:132）は同時に「自発的な自動詞や-eru 自発動詞は、とれない／見えないのように、自由に否定できる」とも指摘している。ほかに、堀川（1992:180）も「否定にすると自発の意味というより、可能（不可能）の意味あいが強くなる」という同様な立場であるが、それを「想起型自発」に限っているところに違いがある。また、森山・渋谷（1988:82）の注3も参考になる。

そして、森山（1988:126-129）は自発と受身<sup>22</sup>についても、次のいくつかの形式に関わるテストを打ち出している。

①「テクル」との共起

「自然的な出来事の出現」という意味をもつ「テクル」が（ラ）レルと共起すると、その意味は「自然発生的にとらえられ、自発の意味に解釈される」。

②格助詞の選択

「ニ、ニヨッテ、カラ」など「もとの動作主体あるいは感情主体を表す」格助詞が（ラ）レルと共起すれば、それが「自発とは言にくい」。

③「ハ」の問題

自発の表現において、感情、感覚、思考の主体を表すには、「ニハ」か「ハ」のみか、「いずれにしろ「ハ」が必要なよう」であり、「「ニ」単独では非常にすわりが悪い」。これに対しまともの受身では、「よほど特別の理由で（対比など）」「動作主+ニ」が取り上げられる場合以外、「ニハ」は不自然である。

（ラ）レルの用法判別に言及のある研究は、上にみてきた具体的なテストを持ち出すもの以外に、多くは文脈によって、あるいは読み手（聞き手）がどう捉えるかによって判断するという立場のようである（小川 1995、川村 2004、渋谷 2005、森田 2007、志波 2009、など）。本論文も上述した判別基準とテストを参照にしつつも、いずれと決めにくい用例がある場合は、基本的に文脈で判断する立場をとる。

---

<sup>22</sup> 森山（1988）において、この議論は「まともの受け身」に限定されている。

## 第3章 受身

本章では、先行研究を紹介したうえで、受身表現にかかわる重要な術語について本論文での定義を行い、分類基準を述べる。そして、分類基準に従って集計した各ジャンルの受身表現のデータをもとに、各ジャンルの特徴と相違を見出し、その原因について分析する。

### 3.1 受身表現にかかわる各術語の定義

本節では、主に日本語記述文法研究会編（2009）、および張（1997）での術語規定を参考に、「受身文」「受身文の対応する能動文」「受身文の主語」「受身文の動作主」について定義を行う。

#### 3.1.1 受身文

ある動きや事態を描き出すとき、その動きの仕手や、事態を引き起こすものを主語として述べる文は能動文と呼ばれるのに対し、その動きの働きかけや、事態の影響を受けるものを主語として述べる文は受身文と呼ばれている。受身文の述語動詞は、受身の助動詞「(ラ)レル」によって作られる。

- (1) 太郎が花子を殴った。
- (2) 花子が太郎に殴られた。

(1) は「殴ル」という動きの仕手「太郎」を主語として、「太郎」の立場から事態をとらえている能動文である。一方、(2) は「殴ル」という動きの受け手「花子」を主語として、「花子」の立場から事態をとらえている受身文である。

本論文は従来の研究と同様に、受身文を扱うとき、述語部分のモダリティは一切捨象することにする。例えば、受身文(3)では、波線の前の部分のみを扱うにとどめる。

- (3) 花子は太郎に殴られたかもしれない。

しかし、実際の使用では、受身の部分が単文の述語部分にあたるという単純な状況だけ

でなく、複文の接続節、とくに連体修飾節となることも少なくない。本論文で使われる資料には、そういった複文の接続節や、連体修飾節となる受身の部分も含まれている。そうした部分を各々異なった呼び方で言及すると、記述がとてむくどくなるため、本論文では全部「受身文」と呼ぶことにする。

### 3.1.2 受身文の対応する能動文

「受身文の対応する能動文」（略して「対応能動文」と呼ぶ）といえ、(1)のように、(2)と同じ事態を描き出し、しかも規則的に相互転換できる能動文のことをさすのが一般的である。しかし、谷守(2000)では、間接受身文に対応する「疑似対応文」という概念が提出されている。それはつまり、間接受身文の主格を能動文の対格(ヲ格)、与格(ニ格)、属格以外の成分に立てて作った、等価の伝達情報量をもつ対応能動文のことである。例えば、谷守は受身文(4)に(5)のような能動文を作り、対応させている。

(4) 弘は妹に無断で砂糖をすくわれた。

(5) 妹が弘に無断で砂糖をすくった。

さらには、受身文(6)に対して、(7)のような能動文を作り、対応させている。

(6) 太郎が雨に降られた。

(7) 雨が太郎の散歩中に降った。(もちろんこの場合、対応の受身文も「太郎が散歩中に雨に降られた」となる。)

本論文は、(7)のような拡大解釈的な「疑似対応文」は考察対象に入れないことにする。ただし、普通にいう「すべての項が規則的に相互転換できるという関係をもつ」、受身文(2)に対する(1)のような能動文の範囲をこえて、より広い意味で「受身文の対応する能動文」という用語を使いたい(たとえば(5)は本論文で言う「対応能動文」の範囲内とする)。それはつまり受身文(6)に対して、(8)のように動きや事態の中心にあたる部分(「雨が降る」こと)さえ同じであれば、「対応能動文」と認めることである。これは、「受身文に対応する能動文」を研究対象としない本論文にとっては、そのように規定したほうが、記述が簡潔になるからである。

(8) 雨が降った。

### 3.1.3 受身文の主語

すでに述べたように、本論文で扱われるデータは、単文レベルのもののみでなく、複文の接続節や、連体修飾節となる受身の部分もある。複文の連体修飾節となっている受身構造の主語、つまりその受身構造で表される動きの働きかけや事態の影響の受け手は多くの場合、被修飾名詞句にあたる。例えば次の(9)では、被修飾名詞句「色紙」は受身構造の主語である。

(9) それでも、下に置かれた色紙に散る色が、花のようになったのを見て喜びを表す。

しかし、連体修飾節になっている受身が、特に意味上でほかの場合と異なった性質をもっていると考えられる<sup>23</sup>ため、本論文は統計上、それは除外することにした。従って本論文で言う受身文の主語は、単文・複文や、文に出ているか否かをとわず、意味上受身構造で表される動きの働きかけや事態の影響の受け手となるものを指す。

### 3.1.4 受身文の動作主

張(1997:4)によれば、言語学でいう「動作主」は二通りの意味をもっている。一つは動詞の要求する格成分の一つとして、意志性をもつ主体のことである。もう一つは、受身文に現れる、対応能動文の主格＝主語にたつ名詞句のことである。張(1997)は次の二つの例文を挙げて、意志性と関係なく、下線部をすべて動作主として認めている。

(10) 息子が先生に怒られた。

(11) 瓦の屋根が雨にうたれている。

<sup>23</sup> 山下(2001:3)は連体修飾節に現れる受身について、その「迷惑性が稀薄になる」と主張している。

ただし、上例の二種類の動作主の振る舞い方が違うことから、張（1997）は前者を「典型的動作主」、後者を「非典型的動作主」と呼び分けている。本論文も基本的に、この立場に従う。

しかし、実際の使用においては、上例のように、受身文の動作主はつねに「ニ」などの動作主マーカーを伴って文に現れるわけではなく、文脈によって自明だったり、とくに言及する必要がなかったりという理由で、文から消えることが多い。本論文では、文中に顕在化していなくても、動きの仕手や事態を引き起こすものをすべて、「受身文の動作主」として述べることにする。

### 3.2 受身文の分類についての先行研究および本論文での分類基準

現代日本語受身文の分類に使われている用語を概観してみると、主として以下のグループが挙げられよう。構文の面からみる「直接受身」・「持ち主の受身」（「所有の受身」とも）・「間接受身」（「第三者の受身」とも）という分類（日本語記述文法研究会編 2009、庵 2012<sup>24</sup>）、意味の面からみる「まともな受身」・「はた迷惑の受身」（三上 1953）、それとほぼ同じ意味の「中立受身文」・「被害受身文」（久野 1983）という分類、能動文との対応関係の面からみる「当事者受動文」<sup>25</sup>「関係者受動文（不利益受動文）」の分類（工藤 1990）、主格の由来の面からみる「斜格昇格型受身」・「属格昇格型受身」・「新規主格型受身」の分類（山内 1997）、叙述の類型の面からみる「属性叙述受動文」・「事象叙述受動文」<sup>26</sup>の分類（益岡 2000）など。

本節では、意味論的な観点から、主に受身文の主語が受ける働きかけや影響の直接性・間接性、および受身文がどのような場合において被害・迷惑の意味を表すのか、という二つの面に目を向け、現代日本語の受身文に対する分類方法についての先行研究を紹介したうえで、本論文でとる分類基準を述べる。

<sup>24</sup> 庵（2012）は「持ち主の受身」を「中間的な受身」と呼んでいる。

<sup>25</sup> 「当事者受動文」はさらに1.「直接受動文」（1.1「直接対象受動文」1.2「相手受動文」）、2.「間接受動文」に下位分類されている（工藤 1990:51-52）。

<sup>26</sup> 「事象叙述受動文」はさらに「受影受動文」と「降格受動文」とに下位分類されている（益岡 2000:55）。

### 3.2.1 働きかけや影響の直接性・間接性について

受身文の主語が、受身動詞によって表される動きの働きかけや、事態の影響を直接的に受けるか、間接的に受けるかに関する研究は数多くある。

例えば、寺村（1982）は、佐久間鼎、三上章の流れを汲んで、日本語の受身を直接受身・間接受身という二種類に分けている。主語が受身動詞によって表される動作の直接影響を受けるといふ意味的特徴、および「XガYニ～サレル」が「YガXヲ（ニ）～スル」のような、規則的に転換できる対応能動表現をもつという構文的特徴をそろえたタイプを「直接受身」と定義している。それとは対照的に、主語の受ける影響が間接的で、対応能動表現をもたないタイプを「間接受身」と呼んでいる<sup>27</sup>。それに、寺村は鈴木（1972a）における（i）直接受身（ii）相手の受身（iii）持主の受身（iv）第三者の受身、という四分類のうち（iii）と（iv）を「特殊な受身」とみなし、それを通じて間接受身の定義をさらに明確に示している。間接受身として認められた場合の「XガYニZヲ～ラレル（←YガZヲ～スル）」<sup>28</sup>構文においては、Zが「Xの何か」（身体部分、肉親・親類・縁者、持ち物、占有している空間、など）である場合が普通である。そのZとXの間の結びつきが弱くなっていくにつれ、間接受身文の表す「迷惑」の度合いも高く<sup>29</sup>なっていく、文自体も「直接的」受身から「間接的」受身へと移っていく。即ち、間接受身の内部には段階性・連続性があるという考えである。

森山（1988）は、こうした考え方と共通点を示したものと思われる。森山（1988）では、「まともの受身」（つまり「直接受身」）と「迷惑受け身」（間接受身）との間に、「部分の受身」と「所有の受身」が位置づけられ、所有の受身が部分の受身という架け橋を通じて、まともの受身につながっていくと考えられている。その連続性は構文上の特徴と結びつけられ、表3-1（森山1988:110）によって分かりやすく示されている。

<sup>27</sup> こうした直接受身・間接受身に関する定義は、多くの研究で使われている。

<sup>28</sup> 以下で言及するX・Y・Zは、すべてこの典型的文型におけるそれをさす。

<sup>29</sup> 寺村は「身体部分、肉親・親類・縁者、持ち物、占有している空間」の順に、迷惑の度合いが「低くなっていく」としているが、これは間違いだと思われる。

表 3-1 森山 (1988:110) における各分類の位置づけと連続性

	まとも	部分	所有	純粋な迷惑
主語名詞の動きへの関与	大←			→小
主語が格成分になっている <sup>30</sup>	○	*	*	*
迷惑の意味を持たなくてよい	○	○	*	*
非情物が動きの主體にくる	○	○	○	*

また、「持ち主の受身」（つまり「所有の受身」）を「中間的な受身」と名付け、直接受身と間接受身の「中間的な性質をもつ受身」（102頁）であると述べていることから、庵（2012）もその連続性を認めていることが分かる。類似した見解は、工藤（1990）、仁田（1991, 1992）、山内（1997）、日本語記述文法研究会編（2009）においても述べられている。

もともと、寺村（1982:249）が「すべての分類、特に下位分類には、分類の境界線に接する地域の、他類との類似性、連続している部分の両面的性格の問題がつきものである」と述べているように、こうして直接受身と間接受身が中間的ものを通じてつながっているのは、当たり前のことと言えよう。本論文も、この連続性を認める立場にある。しかし、データの類分けを簡潔にするため、その中間的なものを直接受身と間接受身のどちらかに入れる必要がある。そして受身の連続的關係の中で、問題となるのは言うまでもなく「部分受身」と「所有受身」であろう。以下は、この二つのタイプについてさらに考察を進めてみる。

### 3.2.2 部分受身と所有受身について

森山（1988:106-107）は部分受身を所有受身の「特別な場合」と考え、「被所有物が主体の部分となっていて、分離不可能 *inalienable* なものである」という点をポイントとみなしている。そして、構文的には、例えば「私は頭を殴られた」が「私は殴られた」にそのまま言い換えられるという特徴をもっているか否かを、「部分受身かどうかのテスト」と考えている。さらに、部分受身と所有受身の中間性・連続性を認めつつも、分類としては、明らかに「間接受身」のほうに振り分けている。この点においては、寺村（1982）も同様である。

また、工藤（1990:56-57）は、ここでいう部分受身と所有受身をまとめて「持ち主受動

<sup>30</sup> 「受身文の主語が対応する能動文の必須格成分になっている」ことを意味する。（筆者注）

文」というタイプに入れている。そして「持ち主受動文」については、「＜間接性＞の点では、Bの受動文<sup>31</sup>と共通する側面をもちつつも、基本的にはA.1の直接受動文と＜行為＝はたらきかけそのものをうける＞点で大きく1つにまとまっていて、能動-受動の対立関係の中におかれている」と述べている。分類上は「間接受動文（持ち主受動文）」と書いているが、その中間的・連続的性質も明確に認めている。

一方、益岡（2000:60）は、「持ち主の受身は典型的な直接受動文と同様に、主体が受ける影響が好ましいものかどうかは基本的に動詞の語彙的意味によって決まる」という理由から、持ち主の受身を「直接受身」に属するものとしている<sup>32</sup>。

ところが、山内（1997:125）は、「物理的に分離可能かどうか」に加え、「有生か無生か」という二つの基準によって、「XガYニZヲ～ラレル」におけるXとZの関係を「部分」（物理的に分離不可能）・「所有物」（物理的に分離可能、Zが無生）・「親族」（物理的に分離可能、Zが有生）に分けている。さらに、上に述べた森山（1988）のテスト（山内はこれを「テストI」と名付けている）のほか、「XガYニZヲ～ラレル」という受身文を、「ZガYニ～ラレルX」と変形しても成り立つか」という「テストII」<sup>33</sup>を加え、受身文の分類をこの二つのテストによって施している。その結果、テストIのみにパスする受身文を「部分の受身」、テストIIのみにパスする受身文を「親族の受身」、テストI・IIのどちらにもパスしない受身文を「所有物の受身」とそれぞれ認定している。そのうち、「部分の受身」と「親族の受身」が直接受身に近い性格を持ち、「所有物の受身」が間接受身に近い性格を持っていると主張している。

こうしたテストで分類を行う方法と異なり、仁田（1992）および張（1997:23-34）においては、受身文「XガYニZヲ～ラレル」に現れる名詞句Zを細かに類分けするという手法がとられている。仁田（1992）において、「持ち主の受身」<sup>34</sup>は、ZがXの「接触場所」・「部分・側面」・「状況のヲ格」といった三つの下位的タイプに分けられ、意味的には、

<sup>31</sup> 工藤（1990）で言う「関係者受動文（不利益受動文）」を指し、ここで言う「第三者受身」に当たる。（筆者注）

<sup>32</sup> 益岡（2000）でいう「持ち主の受身」は、ここの「部分受身」と「所有受身」の両方を含んでいる。また、益岡（2000）では、「直接受身」も「間接受身」も、「受影受動文」という二次分類に属するものとされている。

<sup>33</sup> 同論文山内（1997:129）の注（4）に、この「テストII」で物足りない場合、「ヲ」を「ガ」に変えて、「ZヲYニ～ラレルX」となったら、適格性に差が感じられるかどうかという基準がもう一つ設けられている。

<sup>34</sup> 仁田（1992:347）において、「持ち主の受身」は「持ち主と所有・所属物とは、分離不可能な所有関係にある」と、ここでいう「部分受身」に限定されている。

主語が働きかけや作用を直接的に被っているとされている。それに対し、張（1997）において、ここでいう「部分受身」に相当する B 型は、Z が X の「部分」・「内部世界」・「側面」・「行為」・「瞬時状態」といった五つの類に分けられている。そしてここでいう「所有の受身」に相当する C 型は、Z が X の「持ち物」および「親族」・「準親族」<sup>35</sup>といった二つの類に分けられている。そのうえ、張（1997:49-56）は B 型が直接的受身であり、C 型<sup>36</sup>が間接的受身であることを論証している。

以上をまとめたものが、次の表 3-2 である。

表 3-2 各先行研究における「部分受身」「所有受身」の直接性・間接性に関する規定

	寺村 (1982)	森山 (1988)	工藤 (1990)	仁田 (1992)	張 (1997)	山内 (1997)	益岡 (2000)
部分受身	間接	間接	間接	直接	直接	直接	直接
所有受身	間接	間接	間接	間接 <sup>37</sup>	間接	直接（親族） 間接（所有）	直接

### 3.2.3 本論文での分類基準

上でみてきた先行研究に基づき、本論文でとる分類基準について述べる。結論を先取りしていえば、本論文は以下のような分類方法をとる。（括弧の中は本論文の定義に基づく受身文の「対応能動文」である。）

#### A 「直接受身」

##### A.1 「直接対象受身」

A.1.1 花子は太郎に殺された。（太郎が花子を殺した。）

A.1.2 花子は太郎に褒められた。（太郎が花子を褒めた。）

A.1.3 太郎は犬にかみつかれた。（犬が太郎にかみついた。）

##### A.2 「相手受身」

<sup>35</sup> これらの類の詳しい含みについては、張（1997）を参照されたい。

<sup>36</sup> 論述の便宜上、仁田（1992）の「持ち主の受身」や、張（1997）の B 型と C 型受身などは、以下、本論文の分類に従い、言い換えることにする。

<sup>37</sup> 仁田（1992）は「ぼくはだいたいなもけい飛行機を弟にこわされてしまった。」「私は警官に息子を殴られた。」のような、ここでいう「所有受身」文を<第三者の受身>に属すとし（32 頁）、「<第三者の受身文>のガ格は、もとの動詞の表す動きから間接的な働きかけや作用しか被っていない」と述べている（8 頁）。

A.2.1 太郎は泥棒に財布を盗まれた。 (泥棒が太郎から財布を盗んだ。)

A.2.2 花子は太郎に手紙を渡された。 (太郎が花子に手紙を渡した。)

### A.3 「部分受身」

A.3.1 太郎は知らない男に頭を殴られた。 (知らない男が太郎の頭を殴った。)

A.3.2 花子は太郎に顔に墨をつけられた。 (太郎が花子の顔に墨をつけた。)

A.3.3 花子はお父さんに頭を撫でられた。 (お父さんが花子の頭を撫でた。)

### B 「間接受身」

#### B.1 「所有受身」

B.1.1 花子は太郎に自転車を壊された。 (太郎が花子の自転車を壊した。)

B.1.2 太郎は通り魔に弟を殺された。 (通り魔が太郎の弟を殺した。)

B.1.3 太郎は救助隊に弟を救われた。 (救助隊が太郎の弟を救った。)

#### B.2 「第三者受身」

B.2.1 花子は太郎に死なれた。 (太郎が死んだ。)

B.2.2 花子は太郎に酒を飲まれた。 (太郎が酒を飲んだ。)

まず、部分受身と所有受身の判定基準について説明する。ここでは、詳しい判定基準を記述している山内 (1997) ならびに仁田 (1992) と張 (1997) に絞る。山内 (1997) でのテスト I・II は、「X が Y に Z ラ〜ラレル」型の受身文をもれなくカバーしているところが魅力的である。しかし、そのテスト結果や、そこから導き出された論述に、どうしても納得のいかないところがある<sup>38</sup>ため、本論文ではあくまで参考にとどめることにする。一方、仁田 (1992) および張 (1997) はかなり具体的な細分を施し、しかも大量の例文を挙げての説明方法をとっている。これは、実際にデータを分類するとき、とても頼りになるものと思われる。従って本論文は、山内 (1997) でのテスト I・II を参考にしながら、主に仁田 (1992) および張 (1997) での規定を、部分受身・所有受身の判定基準に用いたい。

<sup>38</sup> 例えば、山内 (1997:127) には、「太郎は暴漢に指を折られた」という文について、「動作が加えられる部分が比較的小さいことなどから、動作の影響が X にまで及んでいない」という論述がある。しかし、「指が折れた」ことによる影響が、本人に及んでいないという見解には、賛成しがたいと言わざるをえない。また、そのテストの結果、「私は床屋に髪を切られた」文や、「お婆さんは孫に肩をもまれた」文が「所有物の受身」に判断されるというのも、同意しがたい。また于 (2009:4) も、山内 (1997) におけるテストは有効性が限られており、そのテストの結果に対する判断もかなり主観的な部分があり、客観性に欠けていると指摘している。

次に、直接性・間接性について。A.1、A.2の直接性や、B.2の間接性は、すでに通説となっているため、ここでは論じない。A.3とB.1について、張（1997:49-56）は「受動文における対象変化他動詞のテイル形が結果持続というアスペクト的意味を実現する」ことと、「希望・意志表現ないし命令表現が成立する」という二つの根拠により、A.3「部分受身」が直接的受身であると主張している。そして、B.1「所有受身」文の主語が受動者と言えないので、働きかけの受け方が間接的であることを論証している。また仁田（1992:9）も、XはYやZと「同一のレベルで直接的な関係を取り結びながら、一つの動きの形成に関与している」ということから、「持ち主の受身」（ここでいう「部分受身」）の直接性を論証している。そうした論証が妥当なものと考え、本論文はそれに従うことにしたわけである<sup>39</sup>。

ただ、ここで一言つけ加えたいことがある。それは仁田（1992）や張（1997）の分類において見落とされているとでも言える、次のような受身文におけるZとXの関係である。

(12) 山田は教授に論文を認められた。

この「論文」に類似したものとして、そのほかに「業績、作品、提案」などが挙げられる。これらのZは一見、主語Xから独立した持ち物であるかのように思われる。しかしよく考えると、実際それはXの抽象的な知的活動の結果が、印刷されたりすることによって具象化されたものに過ぎない。特に評価相関の述語動詞（認める、褒める、貶す、批判する、否定するなど）と共起した場合、Xの「観点・議論・主張」といった類とさほど性質の変わらない、Xから切り離すことのできない精神・思想活動の一部と考えられる。従って本論文は、これらのZとXの関係に基づく受身を「部分受身」と認定する。

以上の議論に基づき、本論文は「受身文の主語が受ける働きかけや影響の直接性・間接性」という意味論的な観点から、受身文をまず大きくA「直接受身」、B「間接受身」という2つに分ける。そして、以下の定義に基づいて、さらにAをA.1「直接対象受身」、A.2「相手受身」、A.3「部分受身」に、BをB.1「所有受身」、B.2「第三者受身」に下位分類する<sup>40</sup>。

<sup>39</sup> 詳しい論証は張（1997）と仁田（1992）を参照されたい。

<sup>40</sup> 「直接対象受身」「相手受身」の定義に挙げられている例は、庵ほか（2000:18-19）を参考にしている。

直接対象受身：受身文の主語が、受身動詞で表された動きや影響を直接受けるものである場合、それを「直接対象受身」と呼ぶ。たとえば対応能動文において、「殺ス」など対象に変化を与え影響が強く及ぶ場合と、「愛スル」など一部の感情動詞の場合にヲ格で表されるものや、「触ル」など影響の及び方が弱い動詞や「話シカケル」など一つの方向性が強調される場合にニ格で表されるものはすべて、「直接対象」にあたる。

相手受身：受身文の主語が、受身動詞で表された動きや影響の向かう相手である場合、それを「相手受身」と呼ぶ。たとえば対応能動文において、「アゲル」「見セル」などほかに動作対象がある場合にニ格で表されるものは、「相手」にあたる。

部分受身：「XガYニZヲ〜ラレル」型の受身文において、受身文の主語Xが、上述した判定基準によって、Zと「全体 vs.部分」の意味関係と判定された場合、それを「部分受身」と呼ぶ。たとえばA.3に挙げられた例文における「太郎 vs.頭」「花子 vs.顔」「花子 vs.頭」の意味関係がそうである。

所有受身：「XガYニZヲ〜ラレル」型の受身文において、受身文の主語Xが、上述した判定基準によって、Zと「所有者 vs.所有物」の意味関係と判定された場合、それを「所有受身」と呼ぶ。たとえばB.1に挙げられた例文における「花子 vs.自転車」「太郎 vs.弟」の意味関係がそうである。

第三者受身：受身文の主語が、受身動詞で表された動きや動作の参加者でない場合、それを「第三者受身」と呼ぶ。たとえばB.2に挙げられた例文において、「花子」はいずれも「太郎が死んだ」「太郎が酒を飲んだ」という動きに直接参加していないので、「第三者受身」にあたる。

### 3.2.4 迷惑性について

本節の最後に、以上提示した本論文での分類基準に基づき、受身にかかわるもう一つの重要な概念「迷惑性」について考察する。ここでいう「迷惑性」は、張（1997:57）に準じ、次のように規定しておく。すなわち、受身動詞の意味に関わらず、当該受身構文が主語にとって「好ましくない、嬉しくない、困った、嫌だ、迷惑だ」とかいう意味合いがあれば、その受身構文が迷惑性をもつと考え、そうでない場合は、迷惑性について中立的であると考えられる。

受身文が迷惑の意味を生じるか否かという問題は、従来「直接受身・部分受身・所有受

身・第三者受身」といった分類と対応するような視点から研究されることが多い。各先行研究の結論を、本論文での分類基準にあわせてまとめると、表 3-3 のとおりになる（△は当該構文が迷惑性について中立的であることを表し、○はそれが迷惑性をもつことを表す）。

表 3-3 各先行研究における受身文の分類ごとの「迷惑性」

	A.1 直接対象受身	A.2 相手受身	A.3 部分受身	B.1 所有受身	B.2 第三者受身
寺村 (1982)	△	△	○	○	○
森山 (1988)	△	△	△	○	○
工藤 (1990)	△	△	△	△	○
張 (1997)	△	△	△	△	○
益岡 (2000) <sup>41</sup>	△	△	△	△	○
日本記述文法研究会編 (2009)	△	△	△	△	○

この表に見られるように、A.1、A.2 が迷惑性について中立的であり、B.2 が迷惑性をもつという見解は、各研究で共通しているが、A.3 と B.1 の迷惑性については、意見がまとまっていない。しかし、前掲の例文を見て分かるように、部分受身と所有受身には、A.3.1（太郎は知らない男に頭を殴られた）や B.1.1（花子は太郎に自転車を壊された）、B.1.2（太郎は通り魔に弟を殺された）のような迷惑性を表す例もあれば、A.3.3（花子はお父さんに頭を撫でられた）と B.1.3（太郎は救助隊に弟を救われた）のように、動きや事態が主語にとって完全に迷惑が感じられないか（頭を撫でられた）、逆にむしろ感謝すべき、好ましいものである（弟を救われた）という例もある。すなわち、部分受身と所有受身の迷惑性は、構文的なものではなく、基本的に受身動詞の語彙的意味によって決まるのである（益岡 2000:60、張 1997:57）。本論文は以上の理由により、工藤 (1990) や張 (1997) などの主張に従うことにする。

「語彙的被害」について、ここでもう一つ興味深い研究を提示しておきたい。田中 (1997:60) <sup>42</sup>は次の文を例にとり、異論を唱えている。

<sup>41</sup> 注 32 で既に述べたことだが、益岡 (2000) では、「直接受身」も「間接受身」も、「受影受動文」という二次分類に属するものとされている。さらに、「持ち主の受身」は「直接受身」に含まれるものとされている。

<sup>42</sup> これは日本言語学会第 115 回大会 (1997 年 10 月、京都大学) にて、田中祐司氏が口頭発表した予稿集に従っている。残念ながら、論文にされていないようである。

(13) 太郎は花子に髪を切られた。

(14) 太郎は花子に箸を使われた。

本論文の分類基準によれば、部分受身に属する(13)や所有受身に属する(14)は、動詞「切ル」や「使ウ」にもともと被害の意味が含まれていないので、迷惑性に中立のはずだが、ここではどうしても被害性を帯びてきてしまう。田中はさらに、教育的配慮から自分の子供をやたらに褒めない、また、他人にもそうしてほしくないと思っている人物を設定し、その人物によって、所有受身文(15)は十分迷惑性があると解釈することが可能と指摘している。

(15) 太郎は見知らぬ男に子供を褒められた。

田中(1997:62-64)はJacobsen(1992)によって提出された、日本語の受身文で記述される事態はすべて主語の視点から見て「自然発生的な出来事(spontaneous occurrence)」と解釈される、という観点に基づき、次のように主張している。すべての受身文は、急に身に降りかかった「自然発生的な出来事」に、主語が一方的に巻き込まれる状況を表す。そこから迷惑や被害の意味が出るか否かは、その事態を世間の常識に照らし合わせて解釈した結果である。これは、次の二つの例文の迷惑性を比べてみれば一層明白になるのであろう(例文は田中(1997:63)の(15) aとbより)。

(16) 花子は映画館で恋人に手を握られた。

(17) 花子は映画館で見知らぬ男に手を握られた。

この問題について、吉田(2010:91)も似たような見解を示し、「迷惑・被害になるか、あるいは歓迎・受益になるかは話者の心理如何によって決定される。「叱られる」「言われる」が、受容者に少しでも圧迫や強制と感じられれば、それはマイナスの方向に傾く。逆に、叱られたり、いわれたりしたことに好意・恩恵を感じればプラスに転じる」と指摘している。また徳永(1998:463)も語用論的立場から、「受身の接辞「-られ」の意味素性は「主語の指示対象のコントロール権ゼロ」であるということであり、受身文それ自体は直接受身文であれ間接受身文であれ「中立」とか「迷惑・被害」の意味を持たない。そ

これらの解釈はコンテキストを与えられなければ明らかにならない」と主張している。こうした受身文の迷惑性に対する全般的、総合的解釈法は、かなり妥当性が高いと思う。そこで本論文は、以上の基準と語用論的解釈に従い、データの分類・分析を行っていききたい。

### 3.3 各ジャンルにおける受身表現の集計結果およびその分析

本節は、前文に述べた「新聞記事」「文学（地の文）」「ブログ」「テレビニュース」「テレビドラマ」「トーク番組」という六つのジャンルから抽出した受身文を資料に、「主節・接続節」「自動詞・他動詞」「直接受身・間接受身」「有情受身・非情受身」「有情動作主・非情動作主」「意味」<sup>43</sup>という六つの面から統計を行う。その結果としてのデータに基づき、ジャンルごとに受身文の構文上・意味上の特徴、およびその特徴の背後に潜んでいる原因について考察し、最後に総合的なまとめを行う。

分析に入る前に、データの集計方法について説明しておく。本論文で受身文の数を集計するとき、文の数ではなく、受身動詞の数を数えている。例えば「乗用車を運転していた梅原大希容疑者の息から、アルコールが検出され、「酒気帯び運転」の疑いで現行犯逮捕されました。」という文の場合、受身文の数を一つではなく、二つと数えることにしている。これは、同じ文に現れ、主語が同じだとしても（上例の場合、主語も違うけれど）、直接・間接や意味が異なる場合があり、別々に集計する必要があると考えるからである。それに、主文、従属文、連体修飾節<sup>44</sup>をとわず、全て統計の対象に入れてある。

#### 3.3.1 新聞記事

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から抽出した「新聞記事」の受身文100文についての統計データは、表3-4のとおりである（合計100文なので、表中の数字はそのままパーセンテージになる。以下同）。

<sup>43</sup> 本論文は主に受身文が迷惑性をもつか、それとも迷惑性について中立的なのかを統計しているが、それは前後の文脈から筆者本人の主観的判断によるものである。

<sup>44</sup> 前文ですでに述べたように、本論文は統計上、受身構造が連体修飾節になっているとき、被修飾語が受身構造の主語でない場合に限る。

表 3-4 「新聞記事」の受身文 100 文についての統計データ

	I		II受身動詞		III意味		IV主語				V動作主				合計
	主節	接続節	他動詞	自動詞	中立	迷惑	+	(+)	-	(-)	+	(+)	-	(-)	
直接受身	57	42	98	1	95	4	15	9	71	4	13	73	10	3	99
間接受身	1	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1
合計	58	42	99	1	96	4	15	10	71	4	13	74	10	3	100
	100		100		100		25		75		87		13		100
							100				100				

まずこの表で使われている用語および記号について、实例でもって説明しておく（各例文の下線部）。

グループ I は、受身動詞が文の主節に現れる（例（18））か、接続節に現れる（例（19））かを表す<sup>45</sup>。

(18) 福島県須賀川市で、十一日朝から行方不明になっていた、十一歳の小6女子が同県白河市の白河署に保護された。（読売新聞、2003/9/15）

(19) 新潟県村上市で、今月2日から行方不明になっていた十五歳の中3女子が、同県金井町（佐渡島）の民家で同県警に発見され、無事保護された。（読売新聞、2003/9/15）

グループ II は、受身文に使われている述語動詞が他動詞である（例（20））か、自動詞である（例（21））かを表す。

(20) 化学専攻は昨年、文部科学省の「二十一世紀COE（センター・オブ・エクセレンス）プログラム」に選ばれた。（毎日新聞、2003/2/25）

(21) ジャワ原人は百万年近く孤立した環境で独自の進化を遂げたが、現代人に取って代わられ、数万年前にほぼ絶滅したらしい。（読売新聞、2003/2/28）

グループ III は、受身文に迷惑性がある（例（22））か、それとも中立的である（例（23））

<sup>45</sup> 日本語では、複文において文末の述語を中心とした節は主節と呼ばれ、主節以外の節は接続節と呼ばれている。しかし、本論文はそこに重きを置いていないため、統計の都合上、受身の単文も主節のデータに入れることにした。そして紙面の都合上、主節や接続節に現れる受身は統計にとどめ、詳しい考察は割愛する。

かを表す<sup>46</sup>。

(22) 週刊文春の記事で名誉を傷つけられたとして、自民党の山崎拓幹事長が発行元の文芸春秋などを相手取り、損害賠償と謝罪広告の掲載を求めた訴訟で、東京地裁は山崎幹事長の請求を棄却する判決を言い渡した。(読売新聞、2003/9/15)

(23) 緒方貞子・前国連難民高等弁務官は二十三日、ドイツ政府から「大功劳十字星章付大綬章」を贈られた。(朝日新聞、2001/4/24)

グループIVとグループVは、受身文の主語・動作主の有生性を表す。「+」はそれが有情物<+animate>、「-」はそれが非情物<-animate>であることを示す。さらに、主語の場合、それが「ガ」や「ハ」<sup>47</sup>など(省略された場合もある)の格をとり、主語をなすものは、「+/-」として集計する。しかし、文に出てきてはいるが主格を取っていないもの、あるいは文に現れず前後の文脈から推定されるものは、「(+)/(-)」として集計する。例えば、(23)の主語「緒方貞子・前国連難民高等弁務官」は主格「ハ」をとっているため、「+」として集計される。ところが(24)では、「現行犯逮捕されました」という受身構造の主語「梅原大希容疑者」は、同一文内に現れてはいるが、主格をとっていないため、「+」でなく「(+)」として集計されることになる。また(25)でも、「重用されない」のが「薬剤師」であることは文脈から分かるが、それが主格をとって受身動詞と同一の文に現れていないため、同じく「(+)」として集計される。

(24) 乗用車を運転していた梅原大希容疑者の息から、アルコールが検出され、「酒気帯び運転」の疑いで現行犯逮捕されました。(ANN ニュース、2015/5/11)

(25) 薬剤師の能力や意識に疑問が持たれている。だから、医療現場で重用されな

<sup>46</sup> 本節でいう「迷惑性」は受身文のそれを指し、つまり受身動詞で表される動きや事態が受身文の主語にとって「好ましくない、嬉しくない、困った、嫌だ、迷惑だ」とかいう意味合いがあれば、その受身文が迷惑性をもつと考え、そうでない場合は、当該受身文が迷惑性について中立的であると考える。これは3.2.4節でいう受身構文の「迷惑性」と若干異なっていることを注意されたい。

<sup>47</sup> 「ガ」と「ハ」は文法上異なる機能をもっているが、本論文は「意味上受身構造で表される動きの働きかけや事態の影響の受け手となるもの」を主語と定義しており、そしてそれが「ガ」格と「ハ」格のいずれかをとるのが一般的であるため、両者を同じ扱いにすることにしたわけである。

い。(読売新聞、2004/2/22)

そして、動作主の場合、それが「ニ」「カラ」「ニヨッテ」などの動作主マーカを伴って同一文内に現れないかぎり、「(+)/(-)」として集計される。例えば(24)(25)はともに動作主「(+）」、(26)は動作主「+」、(27)は動作主「-」として集計される。

(26) 孤独な美の作り手たちもみな、数少ない理解者に支えられていた。(朝日新聞、2002/3/8)

(27) 離着陸の騒音が市民を悩ませ、反米デモでは多数の死傷者が出るなど、穏やかだった農業と交易の町は「戦時下」の緊張に包まれていた。(朝日新聞、2001/10/24)

続いて分析に入る。「新聞記事」において、主節と接続節に現れている受身の数は58対42で、ほぼ半々である。しかし、直接 vs. 間接、他動詞 vs. 自動詞、中立 vs. 迷惑といった三分野は、いずれも片方が圧倒的な優勢をもっている態勢を呈している。直接受身は99%で圧倒的に多く、各下位分類の割合(表3-5)をみても、「直接対象受身」が92%という高い使用頻度を示しており、相手受身、部分受身や間接受身はわずかしかが使われていないことが分かる。

表3-5 「新聞記事」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ

直接受身	直接対象受身	92	99
	相手受身	5	
	部分受身	2	
間接受身	所有受身	1	1
	第三者受身	0	
合計		100	

また、直接・間接にかかわらず、受身文に使われる述語動詞は、他動詞が99%と非常に高い割合を占めている。そして、ただ1つの自動詞受身文(例(28) = (21))は少し特殊で、説明しておく必要がある。

(28) ジャワ原人は百万年近く孤立した環境で独自の進化を遂げたが、現代人に取

って代わられ、数万年前にほぼ絶滅したらしい。(読売新聞、2003/2/28)

辞書によると、「取ッて代ワル」は自動詞として認定されており、典型的文型は「A が B に取ッて代ワル」である。自動詞が受身文の述語動詞に使われると、それが必ず間接受身<sup>48</sup>になると思われがちであるが、「取ッて代ワラレル」のように直接対象受身になるものも少なくない。鈴木(1972a:280)の指摘のとおり、「もとになる動詞があい手<sup>49</sup>を要求するものであれば、その自他の別はとわれない」。その例として、ほかに「抱キツク」「挨拶スル」「触ル」「絶交スル」などが挙げられる。

グループⅢの意味分野においても、迷惑性について中立的な受身文は96文もあり、迷惑性を有する受身文は4文(例(22)(29))しかない。新聞記事に求められる客観性は、こうした中立的意味の受身文が多いことに自然とつながっているのであろう。

(29) 元カメルーン代表FWで神戸のパトリック・エムボマ(三十四)の現役引退が決まった。十六日、神戸が発表した。右ももの肉離れなど相次ぐけがに悩まされ引退を決めた。(「迷惑」、朝日新聞、2005/5/17)

さらに主語の有生性の面からみると、100文のうち、75文が非情物受身という非常に偏った使い方の傾向が見てとれる。動作主のほうは、87%が有情物であるが、そのうち8割以上(74/87)が文から消えている。また主語と動作主の組み合わせ(表3-6)をみると、特に目立つのは主語「-」・動作主「(+）」、すなわち「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」という型であろう。これは、(30)(31)のように、事実報道や、ある出来事に関する世論のあり方を伝えることが主たる役割となっている新聞記事の性格によるものと考えられる。こうした事実や出来事に対する世間の関心は、ふつう事実や出来事自体に向けられており、動作主が誰であるかは、情報として価値が低いか、文脈から自明であるか、あるいはそれが不特定多数や人一般であるかといった理由により、多くの場合背景化されて、明示されないことになる。

<sup>48</sup> たとえば熊(2013:9)では「間接(自動詞)受身文」と書かれている。

<sup>49</sup> 鈴木(1972a:280)は本論文と異なり、こうした文を相手受身として扱っている。(筆者注)

表 3-6 「新聞記事」における主語・動作主の有生性の統計データ

主語 \ 動作主	動作主				合計 (主語)	
	+	(+)	-	(-)		
+	7	6	2	0	15	25
(+)	1	6	3	0	10	
-	4	59	5	3	71	75
(-)	1	3	0	0	4	
合計 (動作主)	13	74	10	3	100	
	87		13			

(30) 以前は軍民共用で1本ずつ使用し、カラチ往復が週3便あったが、駐留後から停止された。(主語「-」、動作主「(+）」、朝日新聞、2001/10/24)

(31) 北米向けの不振で前期業績は急悪化したが、今期は急回復が予想されている。(主語「-」、動作主「(+）」、産経新聞、2002/6/7)

以上のデータと分析から、「新聞記事」については次のことが結論として言えよう。①主節と接続節に現れる受身の数はほぼ半々である。②直接受身(特に直接対象受身)、他動詞による受身が圧倒的に多い。③中立的受身が96%も占めており、ここに新聞報道に重んじられた客観性が反映されている。④主語は顕在の非情物(非情物が75%、そのうち95%(71/75)が顕在)、動作主は非顕在の有情物(有情物が87%、そのうち85%(74/87)が非顕在)がそれぞれ主である。⑤「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身が59%も占めており、客観的な事実報道を主たる役割とする新聞記事の特徴を示している。

### 3.3.2 文学(地の文)

「新聞記事」の統計データと比べると、まず気づくのは迷感受身と有情物主語が著しく増えていることであろう。文学では、登場人物の心理描写や、特定の個人の立場から物事を叙述するのが多いため、有情物主語が一気に多くなり(49文)、これはさらに迷惑の意味合いが出やすくなる(42文)ことにつながっていく。

表 3-7 「文学（地の文）」の受身文 100 文についての統計データ

	I		II受身動詞		III意味		IV主語				V動作主				合計
	主節	接続節	他動詞	自動詞	中立	迷惑	+	(+)	-	(-)	+	(+)	-	(-)	
直接受身	48	47	95	0	58	37	21	23	47	4	9	64	17	5	95
間接受身	2	3	2	3	0	5	0	5	0	0	3	1	1	0	5
合計	50	50	97	3	58	42	21	28	47	4	12	65	18	5	100
	100		100		100		49		51		77		23		100
							100				100				

表 3-8 「文学（地の文）」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ

直接受身	直接対象受身	79	95
	相手受身	10	
	部分受身	6	
間接受身	所有受身	2	5
	第三者受身	3	
合計		100	

また、非情物動作主も一定の数で増加している。そのなかで、特に特徴的なのは、次のような自然現象、登場人物の心理・生理的变化や状態についての描写である。張(1997:199)はこれらの表現を「文学的表現」と呼び、「文学的効果を作り出す」ことが、日本語受身の文体的機能の一つであると見なしている。

(32) 夕日に赤く染まっていた海は、いつしか、夜の帳に包まれていた。<sup>50</sup> (『新・人間革命』)

(33) 瞳は、悠の今どきめずらしい純で真直ぐな気持ちに強く惹かれた。(『恋バナ』)

(34) 唐突に激しい自責の念に襲われた。(『ダ・ヴィンチ・コード』)

そして、主語「-」・動作主「(+)」型の受身文は依然として多いが(表 3-9)、新聞記事のような事実報道ではなく、(35) (36) のような場面の情景描写や、(37) のような物語の時代背景に関する叙述が多い。

(35) お化けビルには一切の明かりが設置されていないので、夜目では、昼間来たときのように、あの骸骨のような鉄骨を見上げながら近づいてゆくことができ

<sup>50</sup> このような自然現象の描出は、今回の統計では少なかったが、他の論文では挙げられている実例も多いし、文学作品でよく使われる手法であると思われる。

ず、ただ道なりに進んで行くしかない。（『模倣犯』）

(36) 港までの道は、舗装もされておらず、車が走ると、もうもうと土ぼこりが上がった。（『新・人間革命』）

(37) 奄美大島は、中世には琉球王朝の勢力・文化圏に入っていたが、十七世紀初めの、島津家久の琉球征服以来、薩摩藩の支配下に置かれた。（『新・人間革命』）

表 3-9 「文学（地の文）」における主語・動作主の有生性の統計データ

主語 \ 動作主	動作主				合計（主語）	
	+	(+)	-	(-)		
+	4	8	8	1	21	49
(+)	6	13	6	3	28	
-	2	40	4	1	47	51
(-)	0	4	0	0	4	
合計（動作主）	12	65	18	5	100	
	77		23			

以上のデータと分析から、「文学（地の文）」については次のことが結論として言えよう。①主節と接続節に現れる受身の数はちょうど半々である。②直接受身（特に直接対象受身）、他動詞による受身が圧倒的に多い。③登場人物の心理描写や、特定の個人の立場から物事を叙述する需要から、有情物主語が一気に多くなり（49%）、迷惑受身も多くなっている（42%）。④主語は有情物と非情物がほぼ半分ずつであるが、有情物の場合、それが半ば文に現れ、半ば文から消えている。それに対し、非情物の場合、それがほとんど文に現れている（92%、47/51）。一方、動作主は、非顕在の有情物が依然として主である（有情物が77%、そのうち84%（65/77）が非顕在）。しかし、自然現象、登場人物の心理・生理的变化や状態などについての描写で、「夜の帳、純で真直ぐな気持ち、自責の念」のような非情物が動作主として使われていることから、非情物動作主も一定の数で増加している（23%）。⑤「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身は依然として多い（40%）が、「新聞記事」と違い、場面の情景描写や物語の時代背景に関する叙述に用いられることが多い。

### 3.3.3 ブログ

「ブログ」は、個人的で主観的な内容が中心と思われ、より話し言葉的性質が強いと予

想していた。ところが、「文学（地の文）」よりも迷感受身や有情物主語の比率が低いというのは、少し意外な結果であった。しかし、よく考えてみると、公開のブログをネットで書く人は、多少他人にアピールすることを想定していると考えられる。だとすれば、逆に「嬉しくない、迷惑だ、嫌だ」とかいう気持ちをあからさまに表出するのを避け、表現を和らげる傾向が強くなるのではないだろうか。類似した現象は、後の「テレビドラマ」と「トーク番組」においても観察されている。

表 3-10 「ブログ」の受身文 100 文についての統計データ

	I		II受身動詞		III意味		IV主語				V動作主				合計
	主節	接続節	他動詞	自動詞	中立	迷惑	+	(+)	-	(-)	+	(+)	-	(-)	
直接受身	49	46	94	1	73	22	6	32	50	7	11	64	11	9	95
間接受身	2	3	1	4	0	5	0	5	0	0	0	4	1	0	5
合計	51	49	95	5	73	27	6	37	50	7	11	68	12	9	100
	100		100		100		43		57		79		21		
							100				100				

表 3-11 「ブログ」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ

直接受身	直接対象受身	79	95
	相手受身	14	
	部分受身	2	
間接受身	所有受身	0	5
	第三者受身	5	
合計		100	

表 3-12 「ブログ」における主語・動作主の有生性の統計データ

主語 \ 動作主	+	(+)	-	(-)	合計 (主語)	
	+	1	3	2	0	6
(+)	8	21	6	2	37	
-	2	39	2	7	50	57
(-)	0	5	2	0	7	
合計 (動作主)	11	68	12	9	100	
	79		21			

また、「ブログ」に含まれている下位ジャンルを確認してみると、日常生活系の「生活と文化」「趣味とスポーツ」「エンターテインメント」「出会い」から、専門性の高い「科学」「健康と医学」「芸術と人文」「政治」「ビジネスと経済」「地域」「学校と教育」にわたり、非常に幅広い主旨の分野が包括されている。これらの分野は、必ずしもすべて今回の資料に入っているわけではないが、まとめて「ブログ」と称されるものの、(38)

や(39)のように軽い気持ちで個人の経験を記すものもあれば、(40)のように好みのゲームについて評論するものや、(41)のように学校の試験問題まで出ているものもある。専門性の高い分野のブログにおいては、専門用語が増えてくると共に、言葉遣いも専門性が増し、内容自体も説明性や論述性の高いほうに傾き、それで中立受身も、非情物受身も増えてくるのではないかと考えられる。

(38) 今日の1つの問題とチャレンジは、仕事に行く車だ。先週の金曜日はこれに  
やられた。一番ひどかった。(健康と医学)

(39) 蚊にやられた一っ！(Yahoo!サービス)

(40) 現在、一番簡単な難易度(NORMAL?)の4面をクリアした所ですが、  
本作は前作に比べると大分『マイルドな難易度設定』になっており、比較的遊  
びやすく調整されているようですね。(Yahoo!サービス)

(41) 問題三十八、弥生時代に人が死ぬとどのように葬られたか。解答三十八、こ  
の時代は、集落の近くの共同墓地に葬られた。棺は、主に甕棺(かめかん)、  
壺棺(つぼかん)などの土棺が用いられたが、木棺や石棺も用いられ、手足を  
伸ばして葬る伸展葬が普及した。(学校と教育)

そのほかに、主語「(+)」・動作主「(+)」(有情物主語非顕在・有情物動作主非  
顕在)型の受身文も少しながら、「文学(地の文)」より数が多い。なお、「文学(地の  
文)」では(42)のように三人称の語り手が登場人物の身に起こった事柄を述べる文が多  
数である(一人称主語9文、三人称主語40文)のに対し、「ブログ」では(43)(44)  
のように一人称をとる文が多い(一人称主語34文、二人称主語2文、三人称主語7文)。  
これは、「ブログ」の話し言葉に近い性質の面を見せていると思われる。

(42) 伸一の父親は、戦前、京城(現在のソウル)にいたことがあった。徴兵を受  
け派遣されたのである。(主語三人称「(+)」・動作主「(+)」、『新・  
人間革命』)

(43) 今回はちゃんと確認して、色でなかったから洗濯機にいれたのに。かるく怒  
られた…というか、「またかよ…」溜息、みたいな。(主語一人称「(+)」・  
動作主「(+)」、Yahoo!サービス)

(44) 昨晚夕食終わってから『ケーキあるけど』と云わたのだけど、飲んで食事した後、翌朝食べる事にしました♪（主語一人称「(+)」・動作主「(+)」、生活と文化)

以上のデータと分析から、「ブログ」については次のことが結論として言えよう。①主節と接続節に現れる受身の数はほぼ半々である。②直接受身（特に直接対象受身）、他動詞による受身が圧倒的に多い。③ネット上の公開の場におけるマイナス情緒の表出を避ける傾向にあることから、迷惑受身（27%）は「新聞記事」より多いが、「文学（地の文）」より少ない。④主語は有情物と非情物がほぼ半分ずつであるが、有情物の場合、それがほとんど文から消えている（86%、37/43）のに対し、非情物の場合、それがほとんど文に現れている（88%、50/57）。また、「文学（地の文）」では三人称主語文が主流であるのと異なり、「ブログ」では一人称主語文が大多数であり、話し言葉に近い性質の面を見せていると思われる。一方、動作主のほうは、非頭在の有情物が依然として中心である（有情物が79%、そのうち86%（68/79）が非頭在）。⑤「ブログ」に専門性の高い分野が含まれており、説明性や論述性の高い文章も少なくないため、「非情物主語頭在・有情物動作主非頭在」型受身がなお4割ほど存在している。一方、「有情物主語非頭在・有情物動作主非頭在」型の受身文が増えている（21%）。

### 3.3.4 テレビニュース

「テレビニュース」においては、主にアナウンサーの発話に注目し、現場から配信された記者や取材された人などの発話は考察対象から外してある。

表 3-13 「テレビニュース」の受身文 100 文についての統計データ

	I		II受身動詞		III意味		IV主語				V動作主				合計
	主節	接続節	他動詞	自動詞	中立	迷惑	+	(+)	-	(-)	+	(+)	-	(-)	
直接受身	56	44	100	0	70	30	28	4	68	0	4	83	10	3	100
間接受身	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	56	44	100	0	70	30	28	4	68	0	4	83	10	3	100
	100		100		100		32		68		87		13		
	100														
	100														

表 3-14 「テレビニュース」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ

直接 受身	直接対象受身	99	100
	相手受身	1	
	部分受身	0	
間接 受身	所有受身	0	0
	第三者受身	0	
合計		100	

表 3-15 「テレビニュース」における主語・動作主の有生性の統計データ

主語 \ 動作主	動作主				合計 (主語)	
	+	(+)	-	(-)		
+	1	20	4	3	28	32
(+)	1	2	1	0	4	
-	2	61	5	0	68	68
(-)	0	0	0	0	0	
合計 (動作主)	4	83	10	3	100	
	87		13			

「新聞記事」と同様に、「テレビニュース」では主語「-」・動作主「(+）」、すなわち「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型の受身文が際立って多く、61%の高い割合を占めている。ここからニジャンルの類似性、つまり客観的事実の報道という役割を担っていることがうかがわれる。しかし一方、有情物主語の受身文は「新聞記事」より数が増えている。これは犯罪事件や交通事故など、人々の生活に密接した関係をもつ社会的出来事に関する報道が多いためと考えられる。これらの報道は、(45) (46) のように「容疑者が逮捕された」(8回)、「人が車にはねられた」(5回)、「けが人が病院に運ばれた」(4回、また「搬送された」が1回)といった構造をとるのが一般的であり、その主語はいずれも有情物の人間である。容疑者を逮捕したのは勿論警察であり、そして、交通事故なら被害者に、けが人の搬送なら搬送された人に関心が向けられるのが自然反応であろう。となると、動作主が省略されるのは自然な結果である。また、事件の進展をリアルタイムに注目し、報道は随時追加されるため、類似した内容が一日のうち何回も出てしまう。本論文は2015年5月10日から16日にかけてのニュースに絞っているので、その影響が一層出やすくなり、有情物主語の受身文もそれなりに多くなったと考えられる。なおまた、「病院に運ばれる」以外、これらの出来事はすべて主語にとって被害や迷惑となっており、客観的事実報道でありつつも迷惑受身が用いられる原因の一つと言えよう。

(45) 妻の腹などを蹴り、けがをさせたとして 72歳の夫が逮捕されました。(ANN ニュース、2015/5/10)

- (46) 2日午後、北海道・函館市のスーパーに車が突っ込み、女性2人がはねられ、1人が死亡した。(FNN ニュース、2015/5/13)

また、非情物主語受身文のなかでも、迷惑性をもっていると判定できる文がある。これは、その出来事の背後にマイナスな影響を受ける有情の「潜在的受影者」<sup>51</sup>があると考えられる場合である。例えば(47)のような犯罪事件の報道でよく用いられる「疑いが持たれている」構文では、その疑いの対象、すなわち「事件の容疑者」が陰に潜んでいることが容易に感じ取れるため、迷惑の意味合いが強く感じられる。(48)(49)も同じ理由により、迷惑受身文と判定した。これらの受身文に迷惑性がはっきりと感じられるのは、多くの場合、受身動詞の語彙的意味によるところが大きいと思われる。こうした性格をもつ受身文は、テレビドラマの中で直接人の口から発せられると、その迷惑性が一層明らかに感じ取れる(例(50))。

- (47) 警察によると、女子学生は、宮城県内の高校に通っていた3年前の5月から6月ごろ、同級生の男子生徒(19)と、中学時代の同級生の女子生徒(19)のドリンクに、劇薬の硫酸タリウムを入れて飲ませ、殺害しようとした殺人未遂の疑いが持たれている。(FNN ニュース、2015/5/16)
- (48) 神奈川・横浜市内の病院の患者など、およそ4万8,000件の個人情報が盗まれたことがわかった。(FNN ニュース、2015/5/16)
- (49) 橋下市長は15日夜、BSフジの「PRIME NEWS」に出演し、いわゆる「大阪都構想」の住民投票で、構想が否決された場合は、12月の任期満了に合わせて、市長を辞める考えを示し、国政への転身も否定して、政界から引退する考えを重ねて示した。(FNN ニュース、2015/5/16)
- (50) 抗議文が送られて来たんだよ。(「テレビドラマ」、『花咲舞が黙ってない』第2話)

最後に、「テレビニュース」のデータを収集しているうちに気づいたことについて、一言触れておきたい。「新聞」よりも情報伝達の迅速さ・簡潔さを重視していることと、明確に行為主体を示す必要があることが原因であろう、「テレビニュース」では、「誰が、

<sup>51</sup> 「潜在的受影者」は益岡(1991:111)によって提出された概念である。

何をする・した」という能動構文が多く見られ、中には普通受身文が使われることの多い(53)のような文もある。

(51) ただ気象庁は、地下のマグマの動きの変化を示すデータがないことから、一時的な火山活動の高まりだと見ています。箱根町はこの週末、大涌谷周辺への立入を全面的に禁止して、規制を続けるかどうか状況を見ながら、夕方にも判断する予定です。(ANN ニュース、2015/5/11)

(52) 警察によりますと、午前5時45分ごろ、北九州市小倉北区の11階建てマンションのエントランスの上で、このマンションに住む小学3年の男の子が死亡しているのを警察官が見つけました。男の子は昨日の夜から行方が分からなくなり、一緒に住んでいる祖母が捜索願を出し、警察が男の子の行方を捜していたということです。マンションの屋上には、人が入った形跡があり、警察が男の子が死亡した経緯を調べています。(ANN ニュース、2015/5/11)

(53) 東北地方を中心に広い範囲で揺れを観測しました。東北新幹線は運転を再開していますが、ダイヤの乱れが続いています。(TBS ニュース、2015/5/13)

以上のデータと分析から、「テレビニュース」については次のことが結論として言えよう。①主節に現れる受身のほうが少し多いが、大した差はない。②間接受身や自動詞による受身がまったく現れないという極端の偏りが出現し、直接受身でも相手受身が1文あるほかは、全部直接対象受身である。③中立的受身が7割も占めているが、犯罪事件・交通事故などの社会的出来事に関する報道が多いため、迷惑受身は「新聞記事」より多い。④「新聞記事」と同様に、主語は顕在の非情物(非情物が68%、全て顕在)、動作主は非顕在の有情物(有情物が87%、そのうち95%(83/87)が非顕在)がそれぞれ主である。⑤「新聞記事」と同じく「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身が大多数(61%)であるが、犯罪事件・交通事故などの被害者に関心が向けられがちであるため、「有情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身文も一定の数(20%)で出現している。

### 3.3.5 テレビドラマ

表3-16は『花咲舞が黙ってない』(第1シリーズ、以下は『花咲』と略す)と『ラスト・フレンズ』(以下は『ラスフレ』と略す)から50文ずつ引き出し、集計した結果で

ある。この表をみてまず気づくのは、迷惑性を有する受身が著しく増え、6割を超えていることであろう。それと同時に、有情物主語の数が逆転して、8割超となっていることも非常に目立っている。「テレビドラマ」における会話は、登場人物が自分自身や他人に起こった出来事について説明したり、意見を交わしたり、感想や評価を述べたりするのが中心となっているため、自然と有情物主語が多くなっている。そして、「テレビドラマ」には、起伏に富んだストーリーによって視聴者の心をつかみ、視聴率を高める必要がある。迷惑性をもつ受身文の多用により、人物間の対立関係が明確に描き出され、衝突や矛盾が強化され、物語が一層面白くなる効果もたらされる。迷惑受身が多いのは、こうした理由による可能性が考えられる。

表 3-16 「テレビドラマ」の受身文 100 文についての統計データ

	I		II受身動詞		III意味		IV主語				V動作主				合計
	主節	接続節	他動詞	自動詞	中立	迷惑	+	(+)	-	(-)	+	(+)	-	(-)	
直接受身	40	51	88	3	33	58	30	48	11	2	35	55	1	0	91
間接受身	1	8	3	6	1	8	4	4	1	0	4	5	0	0	9
合計	41	59	91	9	34	66	34	52	12	2	39	60	1		100
	100		100		100		86		14		99		1		100
							100				100				

表 3-17 「テレビドラマ」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ

直接受身	直接対象受身	58	91
	相手受身	32	
	部分受身	1	
間接受身	所有受身	1	9
	第三者受身	8	
合計		100	

表 3-18 「テレビドラマ」における主語・動作主の有生性の統計データ

主語 \ 動作主	動作主				合計 (主語)	
	+	(+)	-	(-)		
+	12	22	0	0	34	86
(+)	23	28	1	0	52	
-	4	8	0	0	12	14
(-)	0	2	0	0	2	
合計 (動作主)	39	60	1	0	100	
	99		1			

また、主語の顕在や非顕在をとわず、有情物主語文の内訳を確認してみると、全部で 86 文ある中で、一人称・二人称・三人称主語受身文はそれぞれ 52、10、24 文ある。ここか

ら、話し言葉における受身文は、話し手が自分自身に生じた事柄について語るのに最も多く使われていることが分かる。日本語では、一・二人称主語が文に現れないのが普通であると言われているが、ここも一人称主語受身文のうち 38 文 (73%)、二人称主語受身文のうち 6 文 (60%) がそうである。

本論文が資料に使っている二つのテレビドラマは、『花咲』は銀行という職場が主たる舞台で、同僚関係が中心となっているのに対し、『ラスフレ』は日常生活における友達同士の関係が物語の中心となっている。こうした相違は、受身文の使い方にも反映している。両ドラマの有情受身文を別々に考察すると、一人称・二人称・三人称主語受身文の順に、『花咲』では 19、4、19 文と、『ラスフレ』では 33、6、5 文とある。つまり職場での会話に使われる受身文は、(54) (55) のように話し手が仕事上で関わりのある第三者について事情を説明したり、意見を述べたりすることが多い。一方、親しい友達同士の会話において、主人公は主に両者間に限定されており、たとえ第三者に言及しても、受身文が用いられることは少ない。

(54) 勤続年数の一番長かった田中さんは、最初に目を付けられて、転勤を示唆されたそうです。(『花咲』第1話)

(55) 杉下さん、処分されないで済んでよかったですね。(『花咲』第2話)

「テレビドラマ」でもう一つ目立つ特徴は、相手受身が多いことであろう。前述したジャンルではだいたい 10 文前後しかないが、「テレビドラマ」では 32 文も現れている。ここで特筆すべきは、この 32 文の相手受身文のうち、半分以上 (17 文) は他動詞「言う」で作られていることである<sup>52</sup>。「言ワレル」受身は、「新聞記事」で 1 回 (直接対象受身)、「文学 (地の文)」で 2 回 (相手受身)、「ブログ」で 6 回 (3 回が相手受身)、「テレビニュース」で 0 回出現している。ここから、書き言葉ではあまり使われないが、日常の話し言葉では、「言ワレル」受身はある発話内容を聞き手に伝えるのに多く使われていることが分かる。先取りして言えば、この特徴は、後で分析する「トーク番組」においてより顕著になっている。この点は、テキストジャンルの話し言葉性を判定する際の一つの根拠になりうるのではないだろうか。

<sup>52</sup> 「テレビドラマ」において、「言ワレル」受身は全部で 19 文ある。

(56) 産休を取ろうとしていた石井さんは、「だから女はだめなんだ、周りの迷惑を考えろ。戻る場所なんかない。」と言われて、退職。（『花咲』第1話）

(57) お母さんにも、誰にも言うなって言われたし。（『ラスフレ』第1話）

もう一つ興味深いことは、毎回の放送時間がさほど変わらないのに、両ドラマの回ごとに出現する受身文の数が大きな差を示していることである（表 3-19<sup>53</sup>）。この結果には、両ドラマにおけるセリフの密度も関係していると思われるが、改まり度が比較的に高い職場において、受身文がより頻繁に使用されていることも大いに関わっているだろう。

表 3-19 両ドラマの回ごとに出現する受身文の数

	第1話	第2話	第3話	第4話	第5話	合計
『花咲』	37	23	26	21	28	135
『ラスフレ』	10	7	9	14	11	51

この節の最後に、「テレビドラマ」におけるいくつか特殊な文について、少し検討を加えたい。まず (58) を見られたい。この文は、「私が溜可に嘘をついてることはタケル君に了知されている」という意味を表しており、もともと自動詞である「分カル」は、ここで他動詞として使われていると言えよう。それゆえ、本論文ではこの文を直接対象受身と判定した<sup>54</sup>。

(58) 分かってるんでしょ、私が溜可に嘘をついてること。タケル君には分かれてる気がするんだ。（『ラスト・フレンズ』第5話）

また、日本語間接受身文の迷惑性を議論するとき、よく問題にされる「風に吹かれる」という文があるが、「テレビドラマ」では、それが1回現れている。

<sup>53</sup> 総合的な状況を示すため、この表の数字は、被修飾語が受身構造の主語となっている連体修飾節も、使役受身も含めたものである。また、『ラスフレ』は受身文数が『花咲』より著しく少ないため、前5話のほか、最後の2話も統計した。その結果、第10話に1文、第11話に12文あった。

<sup>54</sup> 『明鏡国語辞典』では、「分カル」という項目に、「「君は誰が犯人か[物事の本質]を分かっていない」のように、俗に他動詞としても使う」と記述されている。この文もその一例と言ってよかろう。

(59) この苦しさ、この胸の痛み、全部風に吹かれて、なくなればいい。(『ラスフレ』第2話)

この文は登場人物の発話でなく、傍白という形でその内心のつぶやきが語られたものである。主人公は、自分の苦しさや胸の痛みが、まるで目に見えた実物に化し、風に吹き飛ばされてなくなることを願っている。この意味で言えば、主語「苦しさ・胸の痛み」が「風」から受ける働きかけはいかにも直接的であり、その結果、物理的变化さえ起こっている。しかも迷惑どころか、この文に受益の意味さえ感じ取れる。

山下(2001:2-3)は「迷惑受け身のプロトタイプ」について考察し、「風ニ吹カレル」受身は、単文かつ独立文の形で使われないと指摘している。そのうえ、「主文ではなく従属文に受け身が現れることで、迷惑性が稀薄になるどころか恩恵性が含意されることもあり、「また連体修飾節に現れる受け身も迷惑性が稀薄になる」と主張している。これは妥当な主張と思われる。

上の二点を合わせると、「風ニ吹カレル」受身は、「吹ク」が自動詞であるにもかかわらず、主語が受ける働きかけや影響がかなり直接的であるとともに、基本的に従属文に現れることによって、迷惑性が甚だ稀薄になり、まして恩恵の意味合いさえ生じるという特殊な受身と言ってよかろう。

以上のデータと分析から、「テレビドラマ」については次のことが結論として言えよう。  
 ①主節と接続節に現れる受身の数はほぼ半々である。②直接受身、他動詞による受身が圧倒的に多い。直接対象受身は依然として第一位であるが、特に「言ワレル」受身の多用により、相手受身の数が著しく増えている。③物語を面白くするためと思われるが、迷惑受身が大幅に増え、6割を超えている。④有情物主語は86%を占めており、そのうち72%が一人称・二人称であり、しかも一人称主語の73%、二人称主語の60%が非顕在であり、話し言葉の特徴を示している。また、別々にみれば、改まり度の低い『ラスフレ』では一人称が大多数(75%)であるが、改まり度のより高い『花咲』では三人称の割合もかなり高い(45%)。そして動作主は、99%が有情物という非常に偏った使い方がみられ、そのうち60%(60/99)が非顕在である。⑤「有情物主語・有情物動作主」は85%を占めており、そのうち主語の60%(51/85)、動作主の59%(50/85)が非顕在である。

3.3.6 トーク番組<sup>55</sup>

「テレビドラマ」と同様に、「トーク番組」でも、有情物主語の受身文は全体の8割を超えている。その86文の中で、一人称・二人称・三人称主語受身文がそれぞれ57文・14文・15文あり、三人称主語文が「テレビドラマ」よりも少ない。そして、主語が文から消えている割合も「テレビドラマ」より大幅に高いが、一人称・二人称主語文が83% (71/86) も占めているなら、それも当然のことであろう。

表 3-20 「トーク番組」の受身文 100 文についての統計データ

	I		II受身動詞		III意味		IV主語				V動作主				合計
	主節	接続節	他動詞	自動詞	中立	迷惑	+	(+)	-	(-)	+	(+)	-	(-)	
直接受身	48	47	94	1	53	42	16	65	7	7	19	72	0	4	95
間接受身	3	2	1	4	0	5	0	5	0	0	0	5	0	0	5
合計	51	49	95	5	53	47	16	70	7	7	19	77	0	4	100
	100		100		100		86		14		96		4		100
							100				100				

表 3-21 「トーク番組」における直接・間接受身の各下位分類の統計データ

直接受身	直接対象受身	51	95
	相手受身	44	
	部分受身	0	
間接受身	所有受身	0	5
	第三者受身	5	
合計		100	

表 3-22 「トーク番組」における主語・動作主の有生性の統計データ

主語 \ 動作主	+	(+)	-	(-)	合計 (主語)	
+	5	11	0	0	16	86
(+)	14	56	0	0	70	
-	0	6	0	1	7	14
(-)	0	4	0	3	7	
合計 (動作主)	19	77	0	4	100	
	96		4			

また、既に言及したことだが、「トーク番組」では相手受身文は「テレビドラマ」よりも多く、44文もある。特に「言ワレル」受身は39文という非常に高い使用頻度を見せており、そのうち29文が相手受身である。「テレビドラマ」では、会話が単調にならない

<sup>55</sup> 以下では『徹子の部屋』を『徹子』と略し、『テレフォンショッキング』を『テレフォン』と略す。

ため、豊富な言語表現や言葉遣いが要求される。これに対し、「トーク番組」は一定の事前準備があったとしても、基本的に会話双方が頭に浮かんでくる情報をつなぎ合わせ、組み立てながら話していくのが普通であり、よって言い直しや繰り返しなども多く、言葉遣いも単純化する傾向にある。「トーク番組」での動詞「言う」の使用頻度が「テレビドラマ」のそれより大幅に高いのは、こうした可能性が考えられよう。

奥津(1983:69)は、「「言われる」という形の受身は古今を通じて多いようだが、中立的受身の代表的なものであろう」と述べているが、今回の統計で「言ワレル」受身の多い「テレビドラマ」では、中立的受身が10文、迷惑受身が9文、そして「トーク番組」では、中立的受身が22文、迷惑受身が17文と、両方ともほぼ半分ずつの比率を示し、「言ワレル」受身が迷惑受身にも多用されていることが分かった。

許(2004:171-172)は、「言ワレル」受身が多用される理由を三つの点から考えている。まず一番目の理由は、「言う」は「人間の言語活動を表す最も代表的な動詞であり」、「使われる場面は特定の状況を要求」せず、「不特定な人間の言語活動を表すことも可能である」点である。二番目の理由は、「言う」は「対人的な伝達の性格が強い」ため、「日常生活で話し手と聞き手の関係を表すのに頻繁に使われていると思われる」。そして三番目の理由は、「文句ヲ言ワレル」「悪口ヲ言ワレル」「非難サレル」等の意味を含蓄的に表現しようとするとき、「文句ヲ」「悪口ヲ」が省略され、「言ワレル」文が使われることも多い点である。次の例のように、一、二番目の場合、「言ワレル」内容によって不快や迷惑を感じることもあるし、三番目の場合はまさに迷惑受身であるので、「言ワレル」受身に迷惑性をもつものが多いことも解釈できよう。

- (60) 暇な時間すごく多かったので、結構親父に「ちょっとお前来い」って言われて、紀尾井ホールとかでやるオペラの持ち道具とかをやってたんです。(中立、『徹子』、小栗旬)
- (61) でも、寺山さんには僕は、「お前は演奏には向いてるけど、俺の舞台には必要ないから」って言われて、出してくれなかったんです。(迷惑、『徹子』、三上博史)
- (62) 自分ばかり言われるのは嫌だしもう、ほんとに。(迷惑、『テレフォン』、マツコ・デラックス)

迷惑受身をみると、それが「テレビドラマ」より少ないことに気がつく。これは前述した「ブログ」が「文学（地の文）」より迷惑受身文が少ないのと類似した理由によると思われる。つまりテレビ番組という公開の場所で出演する際、たとえ司会者とゲストが仲の親しい関係であっても、言葉遣いに気をつけなければならない。それゆえ、本来なら「不快、迷惑、嫌だ」と感じたことについても、そうした気持ちを控え目に柔らかく語るのが一般的であり、迷惑性の強い受身表現もそれなりに自然と減少していくのではないかと思われる。

本節の最後に、間接受身の典型例としてよく挙げられる「怒ラレル」受身について少し考察したい。今回の統計で、「怒ラレル」受身は「トーク番組」で3回出現したほか、「テレビドラマ」で1回、「ブログ」で1回出現している。これらの例は、大体(63) (64)のように話し手が自分自身の経験を語ったもので、主語も動作主も現れないのがほとんどであるが、(65)のように第三者の身に起こった出来事について話し、それで主語も動作主も現れてくる例も見られた。

- (63) 「ぶらぶらさせるな、ぶらぶらさせるな」って、そう怒られた。まあ、何となく記憶にあるという感じですね。（『徹子の部屋』、小栗旬）
- (64) 練習の夢がよく見ました、怒られる夢とか。（『テレフォンショッキング』、田中理恵）
- (65) やけに花咲だけがお客さんから怒られてるなどは思っていたんですが。（『花咲舞が黙ってない』、第3話）

これらの例における「Aガ怒ル」という出来事は、いずれも怒る主体Aが自分で黙って怒りを抱えているだけでなく、特定の対象（つまり受身文の主語）に対して咎めの言葉をかけている。これは他動詞「叱ル」と同じ用法となり、動作の受け手は相手とも直接対象とも言えよう。『明鏡国語辞典』は「怒ル」項目に、「自動詞」のほか「他動詞」の用法をも記入しており、そして「他動詞」の〔語法〕アイテムに「受身で使うことが多い」と明記している。ここから、「怒ル」は受身用法を中心に、「他動詞」としても認められていく可能性がうかがえよう。

以上のデータと分析から、「トーク番組」については次のことが結論として言えよう。  
①主節と接続節に現れる受身の数はほぼ半々である。②直接受身、他動詞による受身が圧

倒的に多い。特に「言ワレル」受身は「テレビドラマ」よりも多用されているため、相手受身の数はさらに増加した。③「ブログ」と同様に、公開の場所でのマイナス情緒の表出を避ける傾向にあることから、迷惑受身は「テレビドラマ」(66%)より少ない(47%)。④有情物主語は86%を占めており、そのうち83%が一人称・二人称であり、しかも一人称主語の82%、二人称主語の93%が非顕在であり、「テレビドラマ」より話し言葉の特徴をさらに顕著に示している。そして動作主のほうは、「テレビドラマ」と同じく96%が有情物という非常に偏った使い方がみられ、そのうち80%(77/96)が非顕在である。⑤「有情物主語・有情物動作主」は86%を占め、そのうち主語の81%(70/86)、動作主の78%(67/86)が非顕在であり、「テレビドラマ」よりも省略が著しいことが分かった。

### 3.4 本章のまとめ

上でみてきた六つのジャンルにおける受身文の特徴をまとめると、次のようになる。

①どのジャンルも、主節と接続節に現れる受身文はほぼ半々である。

②どのジャンルも、直接受身・他動詞による受身が圧倒的に多い。特に「テレビニュース」は極端であり、間接受身や自動詞による受身はまったく現れていない。また、「新聞記事」「文学(地の文)」「ブログ」「テレビニュース」のいずれにおいても、直接受身の下位分類「直接対象受身」が他の下位分類よりはるかに多いが、「テレビドラマ」と「トーク番組」においては、「言ワレル」受身などの多用によって、「相手受身」が著しく増え、全体の三、四割ほどを占めている。

③迷惑性については、中立的な受身が迷惑性をもつ受身より多く用いられている。特に「新聞記事」では、中立的受身が9割以上を占めており、最も偏ったジャンルである。「テレビドラマ」は迷惑受身の割合が最も高いジャンルであり、それはストーリーの衝突や矛盾を強化し、物語を面白くするためと考えられる。全体的に有情物主語の増加につれて、迷惑受身も増加する傾向がみられたが、「ブログ」と「トーク番組」は公開の個人発言であるため、マイナスな情緒が控えられ、迷惑受身はそれほど使われていない。

④主語の有生性からみれば、「新聞記事」と「テレビニュース」は非有情物主語が有情物主語よりはるかに多く、客観的事実の報道の特徴を示している。「テレビドラマ」と「トーク番組」はこれと正反対で、特に「トーク番組」は一、二人称主語文が有情物主語文の83%も占めており、著しく話し言葉の性質を見せている。「文学(地の文)」と「ブログ」は両者の間に大した差はなく、中間的な性質がうかがわれる。そして、主語が有情物の場

合に非顕在が多く、非情物の場合に顕在が多い傾向も見られた。また動作主の有生性からみれば、どのジャンルにおいても有情物動作主のほうが圧倒的に多く、しかもそれが文に現れないのが大多数である。もともと受身文は、動作主より動作の受け手に関心を持ち、視点を動作主から逸らす必要から生まれたので、こうした結果も当たり前であろう。

⑤「新聞記事」「文学（地の文）」「ブログ」「テレビニュース」では、いずれも「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身が第一位となっている。それぞれが特色をもっているが、この構造は大体記述・説明・描写に用いられている。一方、「テレビドラマ」と「トーク番組」では、「有情物主語・有情物動作主」型受身が8割以上を占めており、主語も動作主も非顕在のほうがはるかに多い。

## 第4章 可能

本章では、先行研究を紹介したうえで、可能表現にかかわる重要な術語について本論文での定義を行い、本論文で扱う可能表現の形式を定め、分類基準を述べる。そして、分類基準に従って集計した各ジャンルの可能表現のデータをもとに、各ジャンルの特徴と相違を見出し、その原因について分析する。

### 4.1 可能表現にかかわる各術語の定義

本節では、可能表現にまつわる先行研究を紹介したうえで、「可能表現」およびその形式、分類について定義を行う。

#### 4.1.1 可能表現の定義

まずは先行研究における「可能表現」（それぞれ異なる用語を使用しているが）についての定義をいくつか見ておこう。

松村編（1971:124）は可能を「「有情物（人またはその他の動物）が動詞によって表わされる動作をする可能性を有する」の意を表わす」と定義しており、寺村（1982:269）は「可能態」という用語を用い、それが表している中心的な意味を「何々しようと思えば、その実現についてさまたげるものはない」と述べている。

また、日本語記述文法研究会編（2009:277）は可能構文を「対応する能動文の主体（能動主体）が意志的な動作を行おうとするとき、その動作の実現が可能か不可能かを表すものである」と定義している。

渋谷（1993a:1, 9）は可能表現を「人間その他の有情物（ときに非情物）が、ある動作（状態）を実現することが可能・不可能であることあるいはあったことを表す表現形式類を、その形式・意味・構文その他の特徴について総合的にとらえ」たものと述べている。そして、それが「常に話し手が期待する（待ち望む）動作、より正確には、動作主体が期待している（待ち望んでいる）であろうと話し手が考える動作でなければならない」ということから、「可能」の語用論的意味の重きを「話し手の期待」に置いている。

以上の定義から、「可能表現」の中心的意味を「ある動作・状態の実現の可能性を表わすもの」とまとめておくことができるであろう。

#### 4.1.2 可能表現の形式

上のように定義した「可能」の意味を表わすために、いくつかの文法的な表現形式が使われている。

渋谷（1993a:6）は可能表現の形式として、次の四つを挙げている。

- (A) 可能動詞：書ケル・見レル
- (B) 動詞未然形＋助動詞（レル）・ラレル：（書カレル）・見ラレル
- (C) デキル
  - ・名詞＋デキル：勉強デキル
  - ・名詞＋ガ＋デキル：勉強ガデキル
  - ・動詞連体形＋コトガデキル：勉強スルコトガデキル
- (D) 動詞連用形＋ウル・エル：勉強シウル・シエル

渋谷はさらに、(B)の「書カレル」を括弧に入れている理由として、それが「今ではあまり用いられなくなっているため」、また(A)の「見レル」を括弧に入っていないのは、それが「現在では一般的になっている」ためと述べている。こうした細かい部分に対する処理はともかくとして、この四つの形式を代表的な可能表現形式として扱っている研究は、ほかにもいくつか挙げられる（神田 1961、金子 1980、渋谷 1993b、中島 2007、小木曾 2009 など<sup>56</sup>）。本論文もこれらの研究に従い、考察対象とするものをこの四つの可能表現形式に絞っておく。

#### 4.2 可能表現の分類についての先行研究および本論文での分類基準

本節は主として「可能の意味」と「可能の条件」という二つの面から、可能表現の分類に関する先行研究を考察したうえで、本論文における分類基準を述べる。

<sup>56</sup> さらに、奥田（1986:186-187）は、「可能動詞を述語にもつ文」および「することができるというかたちを述語にする文」は、日本語において可能を表す文として「みのがすことのできない、土台的なもの」と見なしている。また鈴木（1972a:279）は、「わかる」も「可能動詞」として見なしている。しかし本論文は、「可能動詞」を「五段活用動詞語幹＋eru」によって作られたものに限定し、そして、「見レル」のようないわゆる「ら抜き言葉」もまだ「可能動詞」として広く認められていないようなので、「一段活用動詞語幹＋rareru」のゆれとして扱っておく。

#### 4.2.1 可能の意味による分類

可能の意味による分類については、まだ意見がまとまっていないようである。まず渋谷（1993a, 2005）と奥田（1986）の研究からみていこう。

渋谷（1993a:14）は「ある動作が実現することを含意するか否か」によって、可能表現を「実現系 (actual) の可能」（「動作の実現 (非実現) を含意する」）と「潜在系 (potential) の可能」（「動作の実現 (非実現) を含意しない」）に二分している。そして、渋谷（2005:33）においては、さらに次のように具体的に定義している。（下線は筆者）

**実現可能:** 行為の実現の有無も含んで述べるもの。動作の発動が予定されているか（未来）、実際に発動されている（過去・現在）。「（スケートをしながら）今日は体調がいいからこんなにすいすいすべれるよ」「きのうようやくそこに行けた」など。

**潜在可能:** 行為の実現の可・不可について、その行為を行う力や条件がそろっているかどうかだけを述べるもの。動作の発動は、確実に行われるものとしては予定（過去の場合、実現）されていない。「きょうは気分がいいからいくらでも泳げるよ。2時間ぐらい泳いでみせようか」「そのときそこに行けたのに行かなかった」など。

しかし、上の定義における「含意しない」「予定（過去の場合、実現）されていない」という判断基準は把握しやすいのに対し、「含意する」「予定されている」という言い方はかなり曖昧で判断しづらい面があると言わざるをえない。例えば「今出発すれば6時の電車に乗れる」という文は、確かに「実際に今出発して6時の電車に乗る」ことの実現を含意している。それでも、話し手は単にその時間上の可能性を述べておいて、実はそれを行動に移そうとしておらず、続けて「けど、今日はもう疲れているからやめよう」とその実現を完全に打ち消す可能性も十分想定できる。もう一つの証拠として、これらの文の文末に「だろう、かもしれない」など可能性や蓋然性を表わすモダリティをつけ加えても、文の意味はほとんど変わらないことが挙げられる。というわけで、「実現可能」を認定する場合、ただ「含意する」だけでは妥当性が薄いと思われる。また、「動作の発動が予定されている」という言い方についても同様なことが言えよう。すなわち、たとえある動作の発動が未来に予定されているとしても、それが途中でなんらかの事情に妨げられ、結局発動されなくなることも想像に難くない。この場合は、すでに「実現」の意味素性が失わ

れてしまっていることになるであろう<sup>57</sup>。

一方、奥田（1986:188）<sup>58</sup>は渋谷（1993a）の言う「潜在可能」「実現可能」をそれぞれ「可能」「実現」と呼び、そして「実現」の意味を「具体的な動作が過去の特定の時間にアクチュアルなものへ移行する」と、「可能」の意味を「ある動作・状態の実現が可能である」と定義している<sup>59</sup>。奥田はさらに「非過去形・過去形」と「肯定・否定」との組み合わせからなる四つのパターンについて詳しく考察している。それを表にすると、次のようになる。

表 4-1 奥田（1986）における可能文に対する考察

	非過去形+肯定形	非過去形+否定形	過去形+肯定形	過去形+否定形
することができる	可能（一般的に）	不可能	実現（多くの場合） 可能	非実現・不実行 不可能
可能動詞	可能（一般的に） 実現	非実現・不実行 （多くの場合）	同上	同上

奥田（1986:201）において、表中の「不実行」は「非実現」の二次的・補助的意味であるように記述されているが、本論文の「潜在・実現可能」の立場からすると、やはり区別すべきものとする。つまり、「期待して、意図的につとめる動作・状態が実現しない」「非実現」（207頁）と、「そうすることを控えさせる、不都合な事情があって、あえて実行しない」「不実行」（206頁）とは、「動作・行為を実践に移った（移っている）か否か」ではっきりと異なっており、前者は「実現可能」の類に属するが、後者はあくまでも「潜在可能」の範囲にとどまっているということである。

こうした「実現」と「可能」の区別が截然としたものではなく、「不特定人称」、「動作・状態の反復」や「時間的規定性の欠落」などにより、「実現」から「可能」へ移行する場合も多くある<sup>60</sup>と記述しているが、全体的にいえば、奥田（1986:208）は「現在のか

<sup>57</sup> こうした未来に関わる「実現可能」が「潜在可能」と区別しがたくなることについては、渋谷（1993a:24）自身も奥田（1986:205）もすでに指摘している。

<sup>58</sup> 奥田（1986）は「することができる」という形を述語にする文と、可能動詞を述語にもつ文という二種類の可能表現の文を中心に検討している。

<sup>59</sup> 奥田（1986）は「可能」について明確な定義を下していないが、その「能力可能」と「条件可能」（これについてはまた後述する）についての記述から、このような定義にまとめられる。

<sup>60</sup> 「することができた」を論じる部分（奥田 1986:193-202）では、それが反復的な動作・状態を表す場合、「実現」でも「可能」でもあり、区別できなくなるとしている。しかし、筆者の考えでは、「反復的な動作・状態」が過去のテンスをとる場合、そのアクチュアル性はかなり高く、過去（の一定の時間帯）において、ある動作・状態が反復的に実現されていたことを意味する。

たちでは可能を表現し、過去のかたちでは実現を表現していて、対立物への相互移行は特殊化である」という一般的立場をとっている<sup>61</sup>。

しかし、こうした奥田の意見と異なり、渋谷(1993a:19)は「どちらの可能についても、過去を表すものと現在あるいは未来を表すものがある」と主張している。考察対象を可能動詞に絞っている鈴木(1972b:278-279)<sup>62</sup>もこれと同様な見解を示している。

このようにみえてくると、問題の焦点は「非過去形」の可能文が「実現可能」を表わすか否かにあると言えよう。「非過去形」をとる可能文の述語は、「現在」か「未来」の動作・状態を表わすという二つの場合がある。「現在」を表わす場合、それが今(目の前に)実現している(いない)動作・状態をさすことが可能である<sup>63</sup>が、「未来」を表わす場合、すでに述べたように、たとえそれが「実現」の読みを含んだとしても、あくまでも「可能性」にとどまっているため、「実現可能」と認定する妥当性が薄いと思われる。ゆえに本論文は、「非過去形」をとる述語で作られる可能文について、それが「今(目の前に)実現している(いない)動作・状態」を表わす場合は「実現可能」と認めるが、それが未来における動作・状態を表わす場合は、肯定や否定をとわず、あくまでもその実現(非実現)の「可能性」を述べているだけで、「潜在可能」として扱われるべきものであるという立場をとることにする。まとめていえば、本論文で言う「実現可能」は、「実際にある動作が発動された(ている)・状態が実現された(ている)」という要素が主たる判断基準と

---

これはまた、「過去(の一定の時間帯)においてそのような出来事が実際にあった」という含みを導き出す。たとえば奥田が挙げている次の例文では、「三吉がその小路をとおりぬけて、家までもどった」ことが実際に起こっていたとは読みとれよう。ここの「できた」を「できていた」に置き換えると、「反復的な動作」という意味はさらに強まるであろう。

「三吉は土蔵のあいだにある、ほそい小路のひとつを、もときた方へひきかえしていった。かれはこういう小路だけをとおりにぬけて、家までもどることができた。」(家)

本論文はこうした文に「実現から可能への移行が起こっている」という特性がそなわっていることを認めつつも、それを「実現可能」として認めることにする。

<sup>61</sup> 奥田(1986)は同頁(208頁)において、非過去形や過去形と関係なく、「むしろ、動作・状態が人あるいは物にそなわっている、ポテンシャルな特性としてとらえられているときには、可能表現の文は可能あるいは不可能を表現しているし、いちいちの、具体的な現象として動作・状態がとらえられているときには、実現あるいは非実現を表現していると、規定するほうがより本質的である」かもしれないとも指摘している。

<sup>62</sup> ただ鈴木(1972b)は、「現在未来形」はふつう「可能」を表すときに現在、「実現」を表すときに未来を指すとしている。

<sup>63</sup> (肯定形)「(スケートをしながら)今日は体調がいいからこんなにすいすいすべれるよ。」(渋谷2005:33)(否定形)①「(ペンを握って書こうとしながら)このペン、なかなか書けないな。」②「小説をかいているそうだね。」「むずかしくて、かけないわ。才能がないのかもしれない。」(奥田1986:206)

なっている<sup>64</sup>。本論文における「潜在可能・実現可能」とテンスとの対応に関するとはえ方は、表 4-2 のとおりである。

表 4-2 本論文における「潜在可能・実現可能」とテンスとの対応に関するとはえ方

テンス 可能の意味	過去形	非過去形	
		現在	未来
潜在可能	○	○	○
実現可能	○ <sup>65</sup>	○ <sup>66</sup>	×

高（2011:53）は本論文と類似したとはえ方から、「潜在可能」と「実現可能」をそれぞれ次のように定義している。本論文も基本的にこの定義に従う。

**潜在可能**：動作主の動作・状態が現実実現するか否か（実現したか否か）は問題にせず、単に潜在的に存在する実現の可能性だけを言い表す可能表現

**実現可能**：動作主が意図を持って<sup>67</sup>実現を試みた事態の結果が現実界の特定の時間に具体的な姿で表わされる可能表現

こうした二分法と異なる観点もある。井島（1991:160-161）は「潜在可能」に対し、「実現可能」は「補助的・付加的な機能」であると位置づけている。さらに尾上（1999:90-92）

<sup>64</sup> これは林（2007:36-37）における「事象のあり方の三パターン——《成立》、《未成立》、《未生起》」でいうと、《成立》および《未成立》の二パターンにあたる。詳細は林（2007）を参照されたい。

<sup>65</sup> 「実現可能」を扱う論文には、過去形のみを取り上げているものもあり、例えば林（2007）や大場（2012）がそうである。また尾上（1998b）もそれを「意図成就」と名づけ、「やってみたらできた」という現実界成立と規定しており、川村（2004）もこの「意図成就」という捉え方に従っている。ただし、林（2007）や大場（2012）が肯定・否定の両方を含めているのに対し、尾上（1998b）と川村（2004）の言う「意図成就」はもっぱら肯定に限定している。

<sup>66</sup> 非過去形をとる実現可能は、「（英語で話している太郎を見ながら）さすがにあいつはいつも自慢するだけあってちゃんと英語で話しているね」（渋谷 1993a:17）のようにテイル形をとる場合がある。また、「できないできないと言ってたのにちゃんとできるじゃないか」という文は、「テイルを付けても意味はそれほど変わらない」と渋谷（1993a:25）が指摘しているように、ル形とテイル形の実現可能は、類似した性質をそなえていると言えよう。「実現系可能のテイル形」については、渋谷（1993a:16-18）を参照されたい。

<sup>67</sup> 林（2007:34）では、「実現可能文は、主体の意図的行為や期待する行為のみならず、全く予期しないというような、主体の意図の外での偶発的な行為の実現を表わす場合もある」と指摘している。大場（2012）もこうした意見に賛成しており、本論文もそれが妥当であると考えている。詳細は林（2007）や大場（2012）を参照されたい。（注は筆者による）

は「その事態が実現するだけの許容性の有無」を「可能」にとって最も本質的な意味の側面であると指摘し、「結果的成就を正面に出して表現する「意図成就」（つまりここでいう「実現可能」：筆者注）とは、遠く離れた二つの用法だと見る」べきと主張している。この指摘の妥当性を認める一方で、渋谷（2005:33）は「実現可能」が「潜在可能」と「同じ形式によって表され、また歴史的にも起源と派生の関係にある」という理由により、両者を同じく「可能」として取り扱うことにしている。また、「実現可能」を「可能」の一分類とする研究が多い（松村編 1971、鈴木 1972a, 1972b、川村 2004、林 2007、日本語記述文法研究会編 2009、高 2011、大場 2012 など）ことから、本論文もこれらの研究に従っておく。

#### 4.2.2 可能の条件による分類

日本語記述文法研究会編（2009: 280）は可能構文を、「その動作を実現することが可能・不可能である条件・理由によって、大きく、能力可能と状況可能」という二つに分けている。その上で、「能力可能は能動主体の能力に理由があるものであり、状況可能は能動主体の能力以外に理由があるものである」と定義し、次のような例を挙げている。

(66) 僕はインド料理なんて作れない。（能力可能）

(67) 日本では材料がそろわないから、インド料理は作れない。（状況可能）

こうした「能力可能」と「状況可能」の二分法を採用している研究はかなり多く、ほかにも奥田（1986:188）（「能力可能」と「条件可能」）、井島（1991:157）（「内因可能」と「外因可能」）、尾上（1998b:93）、川村（2004:117）などが挙げられる。

また、渋谷（1993a, 2005）はこの「動作主体にそなわっている能力」による可能表現をさらに「心情可能」・「能力可能」（狭義）・「内的条件可能」という三つのタイプに仕分け、それぞれ次のように規定している（渋谷 2005:34、下線は筆者）。

**心情可能**：主体内部に永続的に存在する心情的・性格的な条件によって可能・不可能であることを述べるもの。一人称主語が典型であり、三人称の場合は感情移入があるときにこのタイプとなる。「夜中にお墓に行くなんてこわくてできない」など。

**能力可能**：主体内部にほぼ永続的に存在する能力的な条件によって可能・不可能であることを客観的に述べるもの。「100メートル10秒では走れない」など。

**内的条件可能**：主体内部の、病気や気分などの一時的な条件によって可能・不可能であることを述べるもの。「今日は気分が悪くて行けない」など。

以上の四分類のほか、渋谷（1993a:29-30）は「実現可能」にもう一つ「条件を無視して単に実現の有無（結果）だけを問題にする用法がある」と主張し、それを「結果可能」と名づけ、次のような例を挙げている。確かにそのとおりであるとは思われるが、こうした「結果可能」は実際の使用上でかなり場面が限られており、「可能」の体系において周辺のものと捉えたほうが適切であろう。

(68) (鉄棒で、今までできなかったわざをはじめて成功させて) できた!

(69) (今まで泳げなかったのが泳げるようになって) 泳げた!

また、ここでもう一つ考察を加えるべきものとして、問題とされる非情物の属性を表わす可能文がある（例文は森田 1977:477 より、下線は筆者）。

(70) この起重機は六トンまで (物が) 上げられる。

(71) D51 は 貨車六十両も牽引できる機関車だった。

森田（1977:477）はこのような「機械・道具類における性能・許容能力」による可能表現も人間の能力によるそれと同一に扱っている<sup>68</sup>。しかし、中井・呂（2014:7-9）が指摘しているとおおり、「有情物の能力と異なり、機械の性能の具現は機械それ自身によって制御できないため」、両者を別物として扱ったほうが適切であると考えられる。中井・呂はこの種類の可能表現を「属性可能」と名づけ、その属性には、「事物の本来の性質」「機械などの性能」「事物に対する評価・事物の価値」といった三種類があるとしている。それぞれの例として、次のようなものを挙げている（例文は中井・呂 2014 より）。

<sup>68</sup> 渋谷（1993a:36）は明確には述べていないが、例文に対する類分けの注釈から、森田（1977）と同じ捉え方をしていることが分かる。

- (72) 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が 20 度を少し下回ってようやく咲くことができる。(性質)
- (73) この車は時速 100 キロで走ることができる。(性能)
- (74) この茸は毒がないから食べられる。(評価)
- (75) このペンはすらすらと書ける。(評価)

事実このように非情物を問題とし、その属性や評価を表わす可能文が一定の数で使われていることから、「属性可能」を一つの下位分類として立てるのは正当であると思う。また、その非情物の性質や性能が、行為・状態の実現が可能か否かの条件となっている点からすれば、これも可能の条件による分類の一つとして捉えられよう。

最後に金子(1980:70-72)によって打ち出された「認識の可能」について触れたい。それはつまり「みこみの存否についてのべる可能」、また換言すれば「可能性」を表わす可能表現である。金子によると、この「認識の可能」を表現できる可能表現形式は「動詞連用形+ウル・エル」形式に限っており、ほかの可能表現形式で言い換えることはできない。たとえば次例がそうである。

- (76) 美が自分を護るために、人の目をたぶらかすということはありうることである。三島由紀夫「金閣寺」(新潮文庫・1972) (金子 1980:72)

井島(1991:177)も金子の「認識の可能」に言及し、それが表わす「可能性」と「可能」の相違について、「命題の中か外か、それとともに〈意志〉が関わるか関わらず客観的にみているか」と述べている。すなわち、金子のいう「認識の可能」はすでに「可能」の中心的意味からずれてしまい、たとえそれを「可能」の一種類と認めても、周辺的なものとしてしか位置づけられないであろう。

本論文は現代日本語の六つのジャンルにおける可能表現の特徴を見出すことを狙っているため、ただ「能力可能」(広義)と「状況可能」に大まかに分類するよりは、さらなる細かい類分けを行ったほうが、より分析に役立つ。例えば文学やドラマなど登場人物の内面描写、個人の心理や気持ちを描く表現が多いと思われるジャンルでは、「心情可能」が多く出てくると予想される。従って本論文は主に「心情可能」・「能力可能」(狭義)・「内的条件可能」・「状況可能」・「属性可能」という五つの分類を立て、そして「結果

可能」および「認識の可能」を周辺のなものと位置づけ、統計と分析を進めていくことにする。

### 4.3 各ジャンルにおける可能表現の集計結果およびその分析

まず六つのジャンルにおける四種類の可能表現形式の統計データを示した表 4-3 から、全体的な感覚をつかんでみよう。(単位：%、括弧 ( ) の中は用例数。パーセンテージの計算において、各データの足し算による結果が小計や合計の値と一致しない場合があるが、これは小数の四捨五入からくるもので、計算が間違っているわけではない。以下同。)

表 4-3 六つのジャンルにおける四種類の可能表現形式の統計データ

ジャンル 可能形式	文字言語			音声言語		
	新聞	文学(地の文)	ブログ	テレビニュース	テレビドラマ	トーク番組
(ラ) レル	17 (77)	13 (87)	11 (47)	18 (7)	16 (41)	13 (16)
可能動詞	41 (185)	39 (266)	49 (203)	26 (10)	55 (141)	59 (74)
デキル	40 (180)	46 (312)	38 (157)	50 (19)	27 (68)	27 (34)
ウル・エル	1 (5)	1 (9)	2 (7)	5 (2)	2 (6)	1 (1)
合計	100 (447)	100 (674)	100 (414)	100 (38)	100 (256)	100 (125)

表 4-3 から、各ジャンルにおいて、(ラ) レル形式の割合はそれほど差がないことが容易に読みとれる。高い場合でも「テレビニュース」のように 18%しか占めておらず、それに次ぐ「新聞」も 17%しか占めていない。また「ウル・エル」形式も同じく、各ジャンルの間で大きな差がついておらず、使用率が非常に低い可能表現形式であることが一目瞭然であろう。

それに比べて、「可能動詞」と「デキル」の両形式では、ジャンル間の割合においてばらつきがかなり目立つ。まず「可能動詞」の割合をみれば、「トーク番組」と「テレビドラマ」がそれぞれ 59%と 55%の割合で、いずれも半分を超えている。それに対し、「テレビニュース」では「可能動詞」は 26%しかなく、最も少ない。そして「デキル」のデータに目を向けると、「可能動詞」と傾向が正反対であることに気づく。すなわち今度は「テレビニュース」が 50%と最も高く、「トーク番組」と「テレビドラマ」がともに 27%で最下位となっている。実は「デキル」形式に含まれている三つのタイプのそれぞれのデータをみれば、また各ジャンルの間に相違があることが分かるが、これは分析とあわせて後述する。

また、他のジャンルと比べ、「テレビニュース」における可能表現の数の少なさが気になるかもしれない。表 4-4 に示されている受身と可能の用例数が示すように、「テレビニュース」においてはもともと可能表現の使用は少ないのである。この少なさ自体が、「テレビニュース」の一つの大きな特徴と言えよう。

表 4-4 音声言語の3つのジャンルにおける受身と可能の用例数

ジャンル	合計時間	受身の数	可能の数
テレビニュース	1:57:30	215	38
テレビドラマ	11:28:00	199	255
トーク番組	5:00:27	129	123

本論に入る前に、分析に関わる重要な統計項目のテンス形式について、その統計方針を説明しておきたい。工藤（1995:10-11）は、「会話文と地の文とでは、テンス形式の使用のされ方が全く異なるものである」と指摘している。会話文では、「発話時」を基準とした絶対的テンスの使用が基本的であるのに対し、小説では、語り手の「語り時」を基準とした絶対的テンスの「過去」が基本でありつつも、物語の中の出来事時を基準とした相対的テンスの使用や、臨場感をもたらすなどの文学的効果を図り、非過去形が使われることもよくある。ここで、過去の時制が基本となるのは、小説は普通「実際のことであれ、架空のことであれ、すでに起きた過去の出来事として作者によって整理され、構成されて描かれたものである」（守屋 1992:98）からである。しかし同時に、相対的テンスの使用や臨場感を高めようとする時などは、そうした過去の出来事を描写するにも、非過去形が使われるという現象が生まれる。そこで、これら特殊的存在としての「非過去形」のテンスを、実際は過去のことを描いているから「過去」として捉えるか、非過去形をとっているから「現在／未来」として捉えるかが、問題になってくる。本論文は、それを「現在／未来」として捉える立場をとる。これは、二点の理由による。一つは、「非過去形で過去を表す」と扱えば、文法上混乱を招いてしまうからである。もう一つは、非過去形が「現在／未来」を表すというテンス的機能をもっているからこそ、それを過去の出来事を描く文脈で使うことによって、「登場人物の視点から描いた臨場感」が作り出せると考えられるからである。ゆえに本論文は、こういう非過去形の表すテンスを依然「現在／未来」として扱うことにする。

以上は単文や複文の主節の文末に位置する述語のテンスについてであるが、複文における接続節の述語のテンスについては、通常主文の出来事時を基準とした相対的テンスとな

っているため、主文述語のテンスによって判断することになる。なお、「認メラレズ、考エラレ」のように連用中止形となっており、テンスを持たない形式も少ないながら現れているが、それも主文や文脈のテンスで決める。例えば(77)では、「受ケラレズ」という可能表現のテンスは、「非過去」として集計している。

(77) 切り替えのはぎまで、必要な時期にワクチン接種が受けられず、免疫を持っていない子供が増えることを懸念する小児科医も多い。(毎日新聞、2005/11/9)

このようにテンス形式をもたない用例も存在しているため、実際の統計において、「過去形・非過去形」というテンス形式に比べて、「過去・非過去」というテンスのほうがより包括的であると考え、本論文は用語として後者を使うことにしている。もっとも、通常可能表現の研究に「過去形・非過去形」という用語が用いられているが、実際の分析に関わる要素は、やはりそれが表すテンスであろう。

以下ではジャンル毎に、おもに意味と条件という二つの面から、可能表現の特徴を探ってみる。可能文の数が100を超える場合、本論文はそのうちから任意に100文を選び、統計を行うことにしている。傾向を出すためには、それで十分と考えるからである。

#### 4.3.1 新聞記事

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)から抽出した「新聞記事」における4形式の可能表現についての統計データは、表4-5のとおりである(括弧( )、[]の中は用例数で、その外はパーセンテージ。「小計」に示されているパーセンテージは可能形式ごとの総用例数に対するものであり、また「合計」に示されているそれは4形式を合算した総用例数に対するものである。以下同)。

表 4-5 「新聞記事」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計データ

統計項目 可能 表現形式	I								II		III		合計
	潜在可能				実現可能				非過去	過去	肯定	否定	
	非過去		過去		非過去		過去						
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定					
(ラ) レル	66 (51)	17 (13)	0	0	3 (2)	5 (4)	4 (3)	5 (4)	91 (70)	9 (7)	73 (56)	27 (21)	
小計	83 (64)		0		8 (6)		9 (7)		100 (77)		100 (77)		
	83 (64)				17 (13)								
	100 (77)												
可能動詞	54 (54)	21 (21)	0	1 (1)	1 (1)	12 (12)	1 (1)	10 (10)	88 (88)	12 (12)	56 (56)	44 (44)	
小計	75 (75)		1 (1)		13 (13)		11 (11)		100 (100)		100 (100)		
	76 (76)				24 (24)								
	100 (100)												
デキル	50 (50)	23 (23)	0	2 (2)	4 (4)	5 (5)	9 (9)	7 (7)	82 (82)	18 (18)	63 (63)	37 (37)	
小計	73 (73)		2 (2)		9 (9)		16 (16)		100 (100)		100 (100)		
	75 (75)				25 (25)								
	100 (100)												
ウル・エル	40 (2)	40 (2)	20 (1)	0	0	0	0	0	80 (4)	20 (1)	60 (3)	40 (2)	
小計	80 (4)		20 (1)		0		0		100 (5)		100 (5)		
	100 (5)				0								
	100 (5)												
合計	56 [157]	21 [59]	0 [1]	1 [3]	2 [7]	7 [21]	5 [13]	7 [21]	87 [244]	13 [38]	63 [178]	37 [104]	
	77 [216]		1 [4]		10 [28]		12 [34]		100 [282]		100 [282]		
	78 [220]				22 [62]								
	100 [282]												

まずこの表の構成について説明しておく。横の構成として、まずは四つの表現形式の統計データおよびその小計をそれぞれ示し、最後に四形式の合計を示す。そして縦の構成は、I「潜在可能・実現可能」、II「非過去・過去」、III「肯定・否定」という三つのグループからなっている。Iは各表現形式をまず潜在可能か実現可能かに大別したうえで、テンスの面、そして肯定・否定の面からさらに下位分類したデータを示している。これは、表4-1と表4-2からみられる潜在・実現可能とテンスや肯定・否定の間の相関性を考慮した結果である。また、他の統計項目との関わりを排除し、それ自体の状況を把握するために、IIとIIIでは単独にテンスや肯定・否定の面から集計したデータを示している。

次に分析に入る。表4-5の(ラ)レル形式のデータをみると、いくつか大きな傾向が見て取れる。潜在可能 vs. 実現可能、非過去 vs. 過去、肯定 vs. 否定の3つのグループにおいて、いずれも片方が完全たる優位に立っている。潜在可能は約8割と高い比率を占めており、非過去も肯定もそれぞれ9割、7割以上と割合が非常に高い。

潜在可能が多いのは、まず実現可能自体の性質が関係していると考えられる。4.1.1節で定義しているように、実現可能は普通動作主の意図や期待のもとで行われた動作や行為を表すため、自然と動作主の意図や期待といった主観的なものが前面に出てしまう。この性質は新聞記事の客観性に向かず、用例数の少なさにつながっていると思われる。このほか、「見ラレル」「考エラレル」などの多用も大きく影響している。動詞の出現頻度でい

うと、「見ル」が23回で最も高く、それに次いで「考エル」も6回現れ、あわせて全用例の38% (29/77) も占めている。これらの可能文がすべて潜在可能・非過去テンス・肯定形であり、この3つのグループにおける顕著な偏りをもたらす一因となっていると考えられる。

また、肯定表現が否定表現を大いに上回っているのも、「見ラレル」「考エラレル」などの肯定表現の多用のほかにも、新しい科学研究(例(78))や技術(例(79))、サービス(例(80))の出現によって、これまでできなかったことができるようになったことを示す社会報道が肯定の可能表現を多く使っていることに、その一因があると考えられる(可能動詞(例(81))とデキル形式(例(82))も一例ずつ挙げておく)。

(78) 人類の最高齢記録は百二十二歳だが、「遺伝子操作で百五十歳まで生きられる」など、一線の研究者が最先端の研究をわかりやすく語っている。(読売新聞、2001/5/20)

(79) PLCが実用化されれば(中略)電力自由化に伴い料金引き下げなど競争が激化している電力会社にとっても、既存の電灯線を利用でき、新規投資なく通信事業を進められる。(毎日新聞、2005/1/7)

(80) ネットベンチャーの「カカコム」(本社・東京)は二十三日から通話区分別の料金比較をネット上で開始。市内、県内市外、県外、国際の通話4区分ごとに、同社が調べた「最も安い電話会社と料金を無料で調べられる」というのが売りだ。(毎日新聞、2001/8/24)

(81) 利用する電話会社を選べる「マイライン」は、各社の料金体系が複雑で、どこが得か分からない、という不満が根強い。#そこで、条件に応じて「お得な会社を教えましょう」というサービスがインターネット上で盛んになってきた。(毎日新聞、2001/8/24)

(82) ヤマハは、世界で初めてHDD(ハードディスクドライブ)を搭載したオーディオCDレコーダーを9月二十五日発売する。音楽CDのデータをHDDに録音し、自由に曲を選んで編集できる。#編集後、そのデータをCD-R/RWに書き込むことができる。#HDDには最大三十時間録音できる。(読売新聞、2001/8/24)

テンスの面では、「非過去」が91%を占めているのに対し、「過去」は9%しか現れていない。「新聞記事」では、(ラ)レル可能表現は過去のテンスでの使用が少ないことは一目瞭然であろう。これには、前述した「～ト見ラレル」「考エラレル」の多用、新しい科学研究や技術などについての社会報道のほか、(83) (84) のように事実について分析するときに使われる例も多く見られる。それに、過去テンスの可能表現は全て実現可能であり、非過去テンスの可能表現の9割(64/70)も潜在可能であることから、テンスと潜在・実現可能との強い相関性を示唆していると言えよう。

(83) 東京ビルはこのうち二万二千平方メートルを譲り受け、所有地の容積率(敷地面積に対する建物の延べ床面積の割合)に上乘せした。容積率が高いほど大規模なビルが建てられるからだ。(読売新聞、2004/12/22)

(84) 彼女がなぜあんなに自由なのか。それは「嫁」でなく実の両親と同居する「娘」だからです。気兼ねなく生きられる。嫁として生きねばならない現実の女性たちの生活はあんなに自由ではなかった。(毎日新聞、2005/5/20)

表 4-6 「新聞記事」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計データ

可能の条件 可能表現形式	心情可能	能力可能	内的条件 可能	状況可能	属性可能	結果可能	認識の 可能	小計
(ラ)レル	5 (4)	13 (10)	1 (1)	74 (57)	6 (5)	0	0	100 (77)
可能動詞	7 (7)	23 (23)	1 (1)	56 (56)	10 (10)	3 (3)	0	100 (100)
デキル	4 (4)	20 (20)	0	67 (67)	4 (4)	5 (5)	0	100 (100)
ウル・エル	0	0	0	40 (2)	0	0	60 (3)	100 (5)
合計	5 [15]	19 [53]	1 [2]	65 [182]	7 [19]	3 [8]	1 [3]	100 [282]

「可能の条件」による統計データである表 4-6 をみると、(ラ)レル形式においては、状況可能が多いことが一目で分かってしまう。さらにその用例に出てくる動詞を調べると、「見ラレル」文のほとんど(22例、状況可能の39%)、それに「考エラレル」文のすべて(6例、状況可能の11%)が状況可能となっている。そしてもう一つ注目すべきなのは、「見ラレル」の22文は全て「～ト見ラレル」構文をとっており、しかも2文以外は全部主文末をとっていることである。

(85) 保守票の流動化は全国規模の現象とみられ、秋田の結果は、自民党員にも組

織離れが進んでいる兆候ととらえることも可能だ。(毎日新聞、2001/4/16)

(86) 給油中に引火した事故と見られるが、元大統領の拘束が発表された後だけに、

「テロか」との見方が広がり、米軍が一带を封鎖した。(読売新聞、2003/12/15)

(87) 政党や政治団体が昨年集めた政治資金の総額は千三百五十億円で、前年より

十三・四%減少した。千百六十七億円だった千九百八十四年以来の低水準。景気低迷や大型選挙がなかったことが要因とみられる。(読売新聞、2003/9/15)

一方、「考エル」は6文あるが、そのうち5文が「～ガ/モ考エラレル」構文をとっており、「～ト考エラレル」は1文しかない。

(88) うかつに個人情報を送ると、ある日突然、ネットショッピングによる高額の請求が舞い込むといったことが考えられる。(毎日新聞、2004/6/9)

(89) この頃は細密描写による洋画に近い表現のものだったと考えられる。(産経新聞、2003/3/12)

また、可能動詞においては、「言エル」がこれと似たような特徴を持っている。状況可能が56文あるうち、その3割(17/56)が「言エル」文であり、しかも2文以外はすべて「～ト言エル」構文をとっている。

(90) 海山町の住民投票の結果には直前に発生した中部電力浜岡原子力発電所の配管破断事故という予想外の事態の影響があったとされるが、再び原子力への信頼が大きく揺らいだことは間違いない。#今後の原子力開発は自由化問題との絡みからも一段と厳しさを増したと言えよう。(読売新聞、2001/12/28)

(91) 一方、民主党は改選数を上回る三十議席を勝敗ラインに置いたが、「与野党逆転」をうたっていたことを考えると、目標を下方修正したとも言える。(毎日新聞、2001/7/11)

これらの「見ラレル、考エラレル、言エル」可能文<sup>69</sup>は、一定の根拠により、その引用節に述べられている認識や判断を導き出すことができるという意味を表す。そうした「根

<sup>69</sup> 「～ト見ラレル」「～ト考エラレル」構文については、「第5章 自発」の部分で再び検討する。

「扱」は勿論のこと、認識主体の外部にあるものであるため、可能の条件の面では、すべて「状況可能」にあたることになる。なお、これらの「見ラレル、考エラレル、言エル」は単に一種の認識・判断の可能性を述べており、行為の実現には関係ないため、「潜在可能」にあてはまる。

その一方で、こうした「～ト見ラレル」文を「推定的判断」を表す文とみなし、それが「話し手の証拠に基づく推論」というモダリティ表現であるとしている研究もある(志波 2013:122)。確かにそのように考えたほうがより適切であろう。これらの文において、「動作の実現の可能性」というニュアンスが極めて薄れており、もはや「可能」の範疇からはみ出していると言える。志波(2009:9)はさらにこうした「～ト見ラレル」文は、報道文テキスト<sup>70</sup>で多く用いられると指摘している。また小矢野(1980:23)では、「考エル、感ジル、認メル、見ル」など思考や感覚に関する動詞の(ラ)レル形について、「対象格が「～と」という引用の形式となって表現される際には」、それが「話手や書手が自分の判断や感じを断定することを避け、判断や感じの内容を一つの可能性として婉曲的に示すことによって、判断や感じに対する話手や書手の責任を回避する表現法」であり、「思考動詞や知覚動詞に特有の用法として位置づけることができる」という意見もある<sup>71</sup>。妥当性の高い意見であると思う。

各形式のデータを比べてみれば、上述した傾向は、(ラ)レル形式に限らず、各可能形式<sup>72</sup>共通のものと言えよう<sup>73</sup>。現代日本語において、各活用型の動詞の可能形式がほぼ定着している<sup>74</sup>ことを考え合わせると、これも当然の帰結と言ってよかろう。即ち、使用する動詞が決まれば、その可能形式もほぼ決定されてしまい、あるジャンルにおける各形式の割合は、主に動詞の選択に左右されており、可能形式自体の性質に大きく影響されている

<sup>70</sup> 志波(2009:1)は、「報道文テキスト」とは特に「実際に起きた(起きる)出来事を事実として伝える文体」と述べている。

<sup>71</sup> 「～ト言エル」についても、「論説文などの論理的文章で多用され」(山岡 2003:26)、判断表現としては「ト考エラレル」や「ト思ワレル」よりも根拠提示率が高く、客観性が求められる(佐藤・仁科 1997:66)との指摘がある。

<sup>72</sup> 各ジャンルでウル・エル形式の数は少なすぎるため、統計データは出すが、分析はすべて最後の部分で触れる程度にとどめることにする。

<sup>73</sup> 可能動詞で否定形が多いことについては、複合動詞「一切レル」のようなほとんど否定形で使われる動詞の存在を除けば、特に目立った原因はない。

<sup>74</sup> 小木曾(2009)が行った活用型別の可能表現形式調査には、「カ変・上一・下一はラレル、サ変はデキル、五段活用は可能動詞が、それぞれ、ほぼ80%以上を占めている。現代語においては、複数の可能表現形式をとりうるとはいっても、一つの標準的形式が圧倒的な位置を占めていることがわかる」という報告がある。

とは言いがたい。例えば、同じ文において、2つの異なった可能形式が使われる例もみられ、これは文脈上の需要に応じて動詞が選ばれたあと、その可能形式も自動的に限定されてしまうからと考えられる。

(92) 指定を受けると、土地を売れず、移転費用を工面できない可能性もある。(朝日新聞、2001/06/24)

こうしてみると、可能の意味の面では「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」が、可能の条件の面では「状況可能」が多用されるのは、形式に関係なく、可能という表現法自体の特徴であると言って差し支えないであろう。

以上のデータと分析から、「新聞記事」については次のようなことが結論として言えよう。①全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を呈している。具体的に(ラ)レル形式をみると、②可能の意味の面では、「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」が圧倒的に多い。③可能の条件の面では、「状況可能」が大多数である。④潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンスの間に強い相関性が見られる。⑤実現可能では特に主流のパターンはないが、潜在可能では「非過去+肯定」のパターンが主流となっている。

#### 4.3.2 文学(地の文)

「新聞記事」の統計データと比べると、表4-7を見てまず目に飛び込むのは、(ラ)レル形式の3つのグループにおいて、それぞれ実現可能(54%、「新聞記事」では17%)、過去テンス(49%、「新聞記事」では9%)、否定形(67%、「新聞記事」では27%)が著しく増えていることであろう。すでに述べたように、文学(特に小説)は主に過去においてすでに起こった出来事を語っているため、過去テンスが多く用いられるのはごく当たり前のことである。そしてこれに連動し、実際に起こった出来事を可能表現で表すと、もちろん実現可能になってしまい(例(93)(94))、その増加も必然的な結果とは言えよう。

(93) ラングドンは話が核心に向かうのを感じたが、自分が聞くべきではないとも思った。だから外へ出たのだった。いま、礼拝堂の尖塔を見あげながら、ラン

グドンは謎を解決できないむなしさから逃れられずにいた。(『ダ・ヴィンチ・コード』)

(94) 仕事もそこそこ忙しかった。それでものんびりかまえていられたのは、グレンハイツ石川の管理室は、午後九時まで開いていると知っていたからだ。  
(『誰か』)

そして、非過去テンスと過去テンスの割合はほぼ同じであるが、非過去テンスで潜在可能が多数(8割、35/44)になっているのとは正反対に、過去テンスでは実現可能が主流(9割弱、38/43)である。「新聞記事」と同様な相関性が確認できる。

表 4-7 「文学(地の文)」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計データ

統計項目 可能 表現形式	I								II		III		合計
	潜在可能				実現可能				非過去	過去	肯定	否定	
	非過去		過去		非過去		過去						
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定					
(ラ) レル	24 (21)	16 (14)	1 (1)	5 (4)	1 (1)	9 (8)	7 (6)	37 (32)	51 (44)	49 (43)	33 (29)	67 (58)	
小計	40 (35)		6 (5)		10 (9)		44 (38)		100 (87)		100 (87)		13 [87]
	46 (40)				54 (47)								
	100 (87)												
可能動詞	40 (40)	22 (22)	2 (2)	2 (2)	4 (4)	6 (6)	8 (8)	16 (16)	72 (72)	28 (28)	54 (54)	46 (46)	
小計	62 (62)		4 (4)		10 (10)		24 (24)		100 (100)		100 (100)		39 [266]
	66 (66)				34 (34)								
	100 (100)												
デキル	25 (25)	31 (31)	0	2 (2)	1 (1)	14 (14)	11 (11)	16 (16)	71 (71)	29 (29)	37 (37)	63 (63)	
小計	56 (56)		2 (2)		15 (15)		27 (27)		100 (100)		100 (100)		46 [312]
	58 (58)				42 (42)								
	100 (100)												
ウル・エル	44 (4)	44 (4)	0	0	0	0	11 (1)	0	89 (8)	11 (1)	56 (5)	44 (4)	
小計	89 (8)		0		0		11 (1)		100 (9)		100 (9)		1 [9]
	89 (8)				11 (1)								
	100 (9)												
合計	30 [90]	24 [71]	1 [3]	3 [8]	2 [6]	9 [28]	9 [26]	22 [64]	66 [195]	34 [101]	42 [125]	58 [171]	100 [674]
	54 [161]		4 [11]		11 [34]		30 [90]		100 [296]		100 [296]		
	58 [172]				42 [124]								
100 [296]													

また、否定形が多いという点は、可能の条件とあわせて分析したほうが分かりやすい。

表 4-8 「文学（地の文）」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計データ

可能の条件 可能 表現形式	心情可能	能力可能	内的条件 可能	状況可能	属性可能	結果可能	認識の 可能	小計
(ラ) レル	40 (35)	15 (13)	2 (2)	39 (34)	3 (3)	0	0	100 (87)
可能動詞	18 (18)	20 (20)	3 (3)	53 (53)	2 (2)	4 (4)	0	100 (100)
デキル	12 (12)	45 (45)	2 (2)	39 (39)	1 (1)	1 (1)	0	100 (100)
ウル・エル	0	0	0	33 (3)	0	0	67 (6)	100 (9)
合計	22 [65]	26 [78]	2 [7]	44 [129]	2 [6]	2 [5]	2 [6]	100 [296]

「可能の条件」による統計データである表 4-8 をみると、状況可能は依然として多い (39%) が、心情可能の増加も非常に目立っている。「新聞記事」で 5% しかないのに対し、「文学（地の文）」ではそれが 40% まで伸びている。文学では、登場人物の心理や感情などについての内面描写が多いため、それが可能表現で描き出されると、当然心情可能の類になりやすいのであろう。

さらに心情可能に使われている動詞をみると、35 文のうち出現回数の多い順に、「信ジル」が 13 回、「忘レル」が 3 回、「耐エル」が 3 回の頻度で (合計 19 回、心情可能の半分以上、全体の 2 割台を占めている) 現れており、しかもすべて否定形をとっているのは特徴的である。次例から読み取れるように、「信ジラレナイ」や「忘レラレナイ」といういま現在の心境<sup>75</sup>が起こっているのは、主体の内的能力に関係なく、気持ち的にそうになっているためと思われる。そもそも「信ジル」や「忘レル」のようなことは、人間にそういう能力が備わっているか否かで、できるか否かが決定されるのではなく、そこに極めて感情的で、理性や知力によってコントロールしようともできないところがある。また、「耐エル」などもともと人間の心境を描く動詞が可能表現に使われると、「心情可能」になるのが一般的であるというのは、容易に納得できよう。これらの動詞が過去形を取る場合は、もちろん過去ある時点の心情を表す「実現可能」(および「心情可能」)にあたる。こうした心理動詞による可能表現は、先行研究で例文にとって扱っているものがあまり見当たらないようであるが、実は少なからず使われている。

- (95) 「学校からのリストに、今年はドレスローブを準備することって書いてあったわー正装用のローブをね」 「悪い冗談だよ」ロンは信じられないという口

<sup>75</sup> 動詞の可能形は基本的に状態を表すため、非過去形のスル形式で現在を表すというテンス上の性質をもっている (庵功雄他 (2001:69, 176) を参照)。

調だ。「こんなもの、ぜえったい着ないから」（『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』）

- (96) しばらくのあいだぎくしゃくと進んで、やっとワタルにも確信が湧いてきた。このままどンドン歩いて、向こう岸まで渡りきってしまえばそれでいいのだ。地上の嘆きの沼では、恐ろしい幻覚に襲われた。忘れようにも忘れられない。（『ブレイブ・ストーリー』）

- (97) ピーターパンみたいに、時間がたっても、年を取らずにずっと男の子のまま  
でいるなんて。 いやだ。そんなの悲しくて、たえられない。（『青空のむこう』）

もう少し掘り下げてみる。実現可能の定義に、「実現を試みた事態の結果が現実界の特定の時間に具体的な姿で表わされる」という記述があるが、心情可能の場合、その実現する試みという含意は極めて薄れている。例えば典型例の「信ジラレナイ」「忘レラレナイ」という表現には、つとめて信じよう・忘れようとする主体の努力は前面に出ておらず、ただその直感的な気持ちが生じているという結果に重きが置かれていると捉えられよう。動作性の高い動詞では、普通主体の意識的な動作の発動なしには動作が起こらないのと違い、心理・感情を表す動詞では、主体がその心理・感情の発生に対するコントロールの度合いが低いのが一般的であり、従って意識的な努力という意味合いも薄くなってしまうと理解してよかろう。心理・感情動詞の実現可能表現は、そういう心理・感情が「実現した・している」というより、「実際にあった・（いま現在）ある」といったほうが適切であろう。

また、非過去形で主体の今現在の状態を表す文は、その前後の文脈において、非過去形と過去形の混在がよく見られる。これはいわば出来事時に視点を置き、臨場感効果をもたらすという文学の特徴的な手法であろう。

- (98) 私は他のどこかにいて、どこかから自分の姿を見ているような気がした。何も信じられない。何も感じられない。私が生きている事を実感出来るのは、痛みを感じている時だけだ。シバさんがコンビニの袋を持って帰ってきた。（『蛇にピアス』）

一方、同じ「忘レラレナイ」でも、状況によって心情可能ではなく、属性可能となる場

合もある。たとえば(99)では、「陰鬱で、一度きいたら」などの限定的修飾語と共に使われることによって、問題にされるのは主体の心情ではなく、そのメロディーの固有的性質となる。このように、意味上偏りの強い動詞でも、文脈的条件によって、その偏りが弱まり、別の方向へと意味領域を伸ばし得る。言い換えれば、可能表現がどんな意味を表すかを考えるには、語彙自体の意味合い以外に、文脈からの影響も無視できない。逆にそれがどんな可能形式をとるかは、それほど大きな影響を及ぼしていないとみられる。この点は、たとえば(99)の「忘れられないメロディー」を「忘れることのできないメロディー」に入れ替えても、それほど意味の差が感じられないことから分かる。

(99) どことなく陰鬱で、しかも一度きいたら忘れられないメロディーである。妙に気になる歌だった。(『運命の足音』)

さらに、普通は一定の根拠に基づいた判断を表す「考エル」も、文脈によって「能力可能」を表す場合もある。(100)は、ハリーが一瞬の隙を利用して、頭を回転させ、逃げることを案じることができたことを表している。ここでは、ハリーの思考力に重きが置かれており、結局逃げることに成功したかどうかにかかわらず、主体の思考力による可能を表す「能力可能」に該当する。ところが、それが否定形をとると、当時の事態における動作主体の思考力の一時的低下による不可能を表すものとなり(例(101))、「内的条件可能」に当てはまる。

(100) ほんの一瞬の隙があった。その隙にハリーは逃げることを考えられたかもしれない。しかし、草ぼうぼうの墓場に立ち上がったとき、ハリーの傷ついた足がぐらついた。(『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』)

(101) 乗り越えなさい！ もう一人のワタルの足が、沼の面を蹴った。何も考えられなかった。勇者の剣の柄に手を触れることさえできない。(『ブレイブ・ストーリー』)

可能動詞でもう一つ言及すべきことは、100文のうち3割も占めている動詞「言エル」(32文)の存在である。「新聞記事」では、「言エル」は全部で18例あり、そのうち17例が状況可能(2文以外がすべて「判断+ト言エル」構文)であり、1文が心情可能であ

る。それに対し、「文学（地の文）」では、状況可能の「言エル」文は依然として多いが（21文、そのうち17文が「判断＋ト言エル」構文）、心情可能の数も増えて、10文現れている（もう1文は能力可能）。そして心情可能では同じ「～ト言エル」構文であっても、引用の部分に現れるのは判断ではなく、感想や発話などであり、相違点を見せている。その一方で、状況可能の「判断＋ト言エル」文の多用が、可能動詞の肯定形の多さにつながっているという点は、「新聞記事」と似ていると言える。

以上のデータと分析から、「文学（地の文）」については次のようなことが結論として言えよう。①全体的に、可能の意味や可能の条件において、形式間でずれが出たが、似ている部分は依然と多い。具体的に（ラ）レル形式をみると、②可能の意味の面では、「実現可能」「過去テンス」の数が大幅に増えつつも、「潜在可能」「非過去テンス」は依然として約半分を占めている。「信ジラレナイ」「忘レラレナイ」など表現の多用によって、「否定形」が7割近くに増加している。③可能の条件の面では、「状況可能」が依然として多いが、「信ジル」「忘レル」「耐エル」など主体の心境を描く動詞の多用によって、「心情可能」も40%まで伸びている。④「新聞記事」と同様に、潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンスの間に強い相関性が見られる。⑤実現可能では「過去＋否定」のパターンが多く、潜在可能では依然として「非過去＋肯定」のパターンが半分以上（21/40）であり、鮮明な対立を示している。

### 4.3.3 ブログ

「ブログ」のデータの処理を進めていると、非常に幅広い趣旨やスタイルの文章が含まれているという印象を受けた。とても個人的なことを話し言葉に近い口調や用語で書かれたものもあれば（例（102））、新聞記事のように時事について評論するものもある（例（103））。

（102）今日は買出しにお遣いにと名古屋の街を歩き回った。＃どうしてもその場を  
離れられなかった・・・から分かっていたけど衝動買いをした＃（生活と文化）

（103）統一共産党もすでに、マデシ政党の要求は受け入れられないという姿勢を  
 明らかにしているが、連邦制度を作り上げるうえで、この問題は最も大きな議  
 論の対象となりそうだ。（政治）

しかし、表 4-9 における (ラ) レル形式の集計結果をみると、「新聞記事」ほど偏りが激しくはないが、同じ傾向にあることが分かる。すなわち、「実現可能」「過去テンス」「否定形」に対して、「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」のほうが明らかに優勢であり、それぞれ 64%、77%、57%とかなりの高率である。

表 4-9 「ブログ」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計データ

統計項目 可能 表現形式	I								II		III		合計
	潜在可能				実現可能				非過去	過去	肯定	否定	
	非過去		過去		非過去		過去						
肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定						
(ラ) レル	45 (21)	17 (8)	0	2 (1)	4 (2)	11 (5)	9 (4)	13 (6)	77 (36)	23 (11)	57 (27)	43 (20)	
小計	62 (29)		2 (1)		15 (7)		21 (10)		100 (47)		100 (47)		11 [47]
	64 (30)				36 (17)								
	100 (47)												
可能動詞	47 (47)	18 (18)	0	1 (1)	6 (6)	6 (6)	13 (13)	9 (9)	77 (77)	23 (23)	66 (66)	34 (34)	
小計	65 (65)		1 (1)		12 (12)		22 (22)		100 (100)		100 (100)		49 [203]
	66 (66)				34 (34)								
	100 (100)												
デキル	39 (39)	22 (22)	2 (2)	0	1 (1)	6 (6)	25 (25)	5 (5)	68 (68)	32 (32)	67 (67)	33 (33)	
小計	61 (61)		2 (2)		7 (7)		30 (30)		100 (100)		100 (100)		38 [157]
	63 (63)				37 (37)								
	100 (100)												
ウル・エル	0	100 (7)	0	0	0	0	0	0	100 (7)	0	0	100 (7)	
小計	100 (7)		0		0		0		100 (7)		100 (7)		2 [7]
	100 (7)				0								
	100 (7)												
合計	42 [107]	22 [55]	1 [2]	1 [2]	4 [9]	7 [17]	17 [42]	8 [20]	74 [188]	26 [66]	63 [160]	37 [94]	100 [414]
	64 [162]		2 [4]		10 [26]		24 [62]		100 [254]		100 [254]		
	65 [166]				35 [88]								
100 [254]													

また、「ブログ」でも動詞「見ル」が 11 回（総数の 2 割以上）出ているが、その用いられ方は「新聞記事」と異なった様相を呈している。「新聞記事」ではそれがほとんど「～ト見ラレル」構文をとっているが、「ブログ」ではそうした構文は一例もなく、すべて「(～ハ/ガ/ヲ/○(無助詞)) 見ラレル」構文となっている。

(104) 本当は私、障害者手帳があるので映画は千円で観られるのですが。(Yahoo! サービス)

(105) 綺麗な映像でもう一度観たいっす><またそう遠くない時期に亀のドラマ見られるといいな。(エンターテインメント)

一方で、「～ト考エラレル」や「判断+ト言エル」文も少ないながら、それぞれ 2 文と

6文使われており、「ブログ」では、推定や判断の内容を一つの可能性として提示するには、「～ト見ラレル」より、「～ト考エラレル」や「～ト言エル」のほうが好まれるように感じられる。

(106) ヨンセンのゴールが取り消されたり、玉田がPKはずしたり。それがなければ五分の展開になっていたと考えられます。(趣味とスポーツ)

(107) このような背景のためか、埼玉県の県民意識は、それほど強くないといえます。(Yahoo!サービス)

表 4-10 「ブログ」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計データ

可能の条件 可能 表現形式	心情可能	能力可能	内的条件 可能	状況可能	属性可能	結果可能	認識の 可能	小計
(ラ)レル	15 (7)	11 (5)	2 (1)	68 (32)	4 (2)	0	0	100 (47)
可能動詞	6 (6)	19 (19)	3 (3)	55 (55)	12 (12)	5 (5)	0	100 (100)
デキル	17 (17)	15 (15)	2 (2)	54 (54)	8 (8)	4 (4)	0	100 (100)
ウル・エル	14 (1)	0	0	0	0	0	86 (6)	100 (7)
合計	12 [31]	15 [39]	2 [6]	56 [141]	9 [22]	4 [9]	2 [6]	100 [254]

「可能の条件」による統計データである表 4-10 をみても、やはり「新聞記事」と同じ傾向にあると言える。つまり状況可能が主流で、心情可能と能力可能も一定の数で出現している。状況可能で使用率が上位となっているのは、前述した「見ラレル」(11例)と「考エラレル」(3例)、それに可能動詞における「言エル」であり、それ以外は特に目立つ特徴はない。

ただ、可能の条件の判断が難しい例文もある。例えば次例の「生キテイラレル」というのは、体を鍛えて健康を保つこと、つまり自分の努力・コントロールで生きのびることを実現させることもあれば、事故・災害などに遭わず、外的状況の確保(運の良さ)によって生きていくことが実現することもある。だが、ここは七夕の願い事であることを考慮に入れば、やはり自力で保証できず、他力に頼っての実現を図ろうとしていると理解できるため、本論文ではこれを「状況可能」と判断した。つまり、判断が難しい場合が存在する事実を踏まえつつも、文脈によってどちら寄りかを判断し、分類しているわけである。

(108) 今日は七夕ですね。皆様は願い事されました??私は毎年恒例!イオンに

飾られていた笹に願い事を飾りましたよ！（\*^ー^）ニコッ今年ももちろん「ジャイアンツ日本一！」。o (≧▽≦) /それを見ていた息子が、「ボクも書くううー！」と。。。息子の願い事は。。。「ずっといきていられますように。」。。。 (爆) 大事なことだけど、ちょっと笑ってしまった (^▽^\*) (Yahoo!サービス)

共起する時間副詞によって、可能表現の意味が変わりうることについても少し触れておく。たとえば、前述した主体の過去あるいは現在の心情を表すのに多く使われる実現可能の「忘レラレナイ」は、次のように「一生」という遠い未来にわたる時間表現を伴うことによって、「忘レラレル」かどうかは人生の最期が来るまで実現しないため、潜在可能になってしまう。

(109) 頂きまくりで嬉しい限りです。（^v^）#このご恩は一生忘れられませんよ、ええ。#本当に有り難う御座います、何時も何時も！！ (Yahoo!サービス)

最後に、可能文の述語部分について、もう一つ触れておきたい点がある。(110)では、可能文の述語部分は「食べられる」というより、「安心して食べられる」がひとまとまりとなっており、そういった安らぎの気分の実現を表していると捉えたほうが適切であろう。また(111)も同様に、ただ「問題を処理できる」ことを望んでいるだけではなく、「責任のある態度で」というのも不可欠な前提とされており、それがなければ可能文の意味が不完全なものになってしまう。

(110) 麺・だし・天ぷらといたってフツーですが安心して食べられます。(Yahoo!サービス)

(111) 一方、ユネスコに対しては、「責任のある態度で問題を処理できると信じている」と述べるにとどめています。(TBS ニュース、2015/5/15)

以上のデータと分析から、「ブログ」については次のようなことが結論として言えよう。  
①全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を呈している。具体的に(ラ)レル形式をみると、②可能の意味の面では、「潜在可能」「非

過去テンス」「肯定形」が大多数を占めている。③可能の条件の面では、「状況可能」が過半数である。④潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンスの間の相関性は依然として見られる。⑤実現可能では「過去+否定」のパターンが比較的によく、潜在可能では「非過去+肯定」のパターンが主流となっている。

#### 4.3.4 テレビニュース

既に述べたように、音声言語の3つのジャンルにおいて、「テレビニュース」のデータ量は極めて少ない。それゆえ、1文、2文の増減でパーセンテージが大きく変動するので、パーセンテージに基づいた分析はせず、大まかに傾向を述べるのにとどめる。

表 4-11 「テレビニュース」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計データ

統計項目 可能 表現形式	I								II		III		合計
	潜在可能				実現可能				非過去	過去	肯定	否定	
	非過去		過去		非過去		過去						
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定					
(ラ) レル	100 (7)	0	0	0	0	0	0	0	100 (7)	0	100 (7)	0	18 [7]
小計	100 (7)		0		0		0		100 (7)		100 (7)		
	100 (7)												
可能動詞	10 (1)	30 (3)	0 (0)	10 (1)	0 (0)	30 (3)	0 (0)	20 (2)	70 (7)	30 (3)	10 (1)	90 (9)	26 [10]
小計	40 (4)		10 (1)		30 (3)		20 (2)		100 (10)		100 (10)		
	50 (5)				50 (5)								
	100 (10)												
デキル	79 (15)	5 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (1)	11 (2)	84 (16)	16 (3)	84 (16)	16 (3)	50 [19]
小計	84 (16)		0 (0)		0 (0)		16 (3)		100 (19)		100 (19)		
	84 (16)				16 (3)								
	100 (19)												
ウル・エル	0	100 (2)	0	0	0	0	0	0	100 (2)	0	0	100 (2)	5 [2]
小計	100 (2)		0		0		0		100 (2)		100 (2)		
	100 (2)				0								
	100 (2)												
合計	61 [23]	16 [6]	0 [0]	3 [1]	0 [0]	8 [3]	3 [1]	11 [4]	84 [32]	16 [6]	63 [24]	37 [14]	100 [38]
小計	76 [29]		3 [1]		8 [3]		13 [5]		100 [38]		100 [38]		
	79 [30]				21 [8]								
	100 [38]												

まず (ラ) レル形式で特徴的なのは、7文のうち、5文が「～ト見ラレル」構文をとっていることである。「～ト見ラレル」構文の多用は、「新聞記事」と似ているところであるが、「考エラレル」が1例も出ていないことから、前者のほうがより客観的事実の報道に向いていると思われる。

(112) 気象庁によりますと、この地震は東日本大震災の余震とみられるということ  
とです。(ANN ニュース、2015/5/13)

(113) 千葉地検は、篠田容疑者が未公表の情報によって不正に利益を得ていたと  
みて、調べを進めるものとみられます。(TBS ニュース、2015/5/15)

前述したように、こうした「～ト見ラレル」文を推定や判断を表すモダリティ化した表現法ととらえれば、その判断の確実さの違いによって、文の性質も多少異なってくるものと考えられる。即ち、「テレビニュース」の報道では、一つの事件や出来事について、「まだ初期的な根拠しか把握しておらず、後で新しい根拠が出てくればまた変わってしまうかもしれないが、とりあえず現時点ではこのような判断が出せる」というように、判断の確実さが低い場合、「～ト見ラレル」文に「可能性を言っている」というニュアンスが強くなり、文全体が「可能寄り」であると言えよう。またそれと逆に、すでに完全な証拠を把握しており、ただ断定を避け、表現を和らげる考慮から「～ト見ラレル」文で判断を表明する場合、「可能性」のニュアンスが極めて薄れ、文全体が「受身寄り」になるのである<sup>76</sup>。

次に、肯定・否定の面からみれば、(ラ)レル形式ですべてが肯定形であるのが目立つ。デキル形式も同様に肯定形が主流であるが、可能動詞では、否定が主流であり、唯一の肯定形でも、「持ち込めるかどうか」という疑問に近い形式をとっており、完全な肯定ではない。しかし、他のジャンルでこれと正反対の結果も出ていることを考慮すれば、これは単なる偶然である可能性がある。

さらにテンスの面からみると、可能動詞では過去と非過去が半々である以外、他の3形式はともに非過去のほうが多い。事実伝達を主要な役割とするニュースにおいて、過去の出来事は、普通単なる事実として報道され、特に理由がない限り、わざわざ可能表現を用いるまでもないためかと思われる。

<sup>76</sup> 繰り返しになるが、「～ト見ラレル」「～ト考エラレル」構文については、「第5章 自発」の部分で再び検討する。

表 4-12 「テレビニュース」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計データ

可能の条件 可能 表現形式	心情可能	能力可能	内的条件 可能	状況可能	属性可能	結果可能	認識の 可能	小計
(ラ) レル	0	0	0	100 (7)	0	0	0	100 (7)
可能動詞	10 (1)	30 (3)	0	60 (6)	0	0	0	100 (10)
デキル	0	11 (2)	0	84 (16)	5 (1)	0	0	100 (19)
ウル・エル	0	0	0	0	0	0	100 (2)	100 (2)
合計	3 [1]	13 [5]	0	76 [29]	3 [1]	0	5 [2]	100 [38]

最後に、「可能の条件」による統計データである表 4-12 をみると、やはり状況可能が大多数である。動詞の使用頻度からみれば、(ラ) レル形式の「～ト見ラレル」(5 文) と、デキル形式の「使用デキル」(3 文、そして「使用ガデキル」も 1 文ある) 以外は、特に目立つものはない。しかし、「使用デキル」の 3 文が同一の記事に集中していることを考えたら、これも偶然性によるところが大きいと言わざるを得ない。

データが少ないため、「テレビニュース」についての結論とは言い難いが、他のジャンルと形式上の統一を図り、とにかく今回の集計結果を次のようにまとめておく。①可能動詞で否定形のほうが多いことを除けば、全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を見せている。具体的に(ラ) レル形式をみると、②可能の意味の面では、すべて「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」という極端な結果となっている。③可能の条件の面でも、すべて「状況可能」であるという結果である。④潜在可能と非過去テンスの間に、依然として相関性が見られる。⑤潜在可能は、すべて「非過去+肯定」のパターンとなっている。

#### 4.3.5 テレビドラマ

表 4-13 をみると、まず「文学(地の文)」と同様に、「テレビドラマ」でも否定形が多いことに気付くであろう。現実の厳しさを強調したり(例(114)(115))、自分の強烈な思いや感情を表明したり(例(116)(117))、相手の過失を厳しく責めたり(例(118))、またその詰問に対してやむを得ない苦情を説明したり(例(119))、さらに絶縁の宣言をしたり(例(120))するとき、否定形を使うと、緊張感や衝突の雰囲気醸し出し、より視聴者に心惹かれる同感を呼び起こせる。否定形が多いのは、これが一因と考えられる。

- (114) 銀行っていうのは、一度飛ばされたら、二度と元には戻れない世界だ。(『花咲』第1話)
- (115) おたくの融資が受けられなかったら、うちの会社は立ち行かなくなってしまう。(『花咲』第4話)
- (116) 今日だけは負けられない、絶対に。(『ラスフレ』第2話)
- (117) どうしても許せなかったの、辞めて行った3人のことを思うと。(『花咲』第1話)
- (118) 何で約束守れないんだ!(『ラスフレ』第2話)
- (119) 美容師は私の仕事なんだよ。男のお客さんが来ることだってあるし、それを断ってられないよ。仕事なんだもん。(『ラスフレ』第3話)
- (120) 私は、もう宗佑と一緒にはいられない。また同じことの繰り返しになる。(『ラスフレ』第5話)

可能動詞で用例数も否定形数も最も多い動詞「言エル」は、「判断+ト言エル」構文の数がさらに減り、1文しか現れておらず、「～ハ/モ/ニ/ツテ/〇(無助詞)言エル」など、「話ス、伝エル」という「言う」本来の意味で使われているのが大多数である。しかし、「文学(地の文)」のように心情可能が多いのとは違い、言うともまずい結果をもたらしかねない(例(121))とか、契約上秘密とすべきものだから(例(122))とか、客観的外部状況に制限されているために言うのを控えさせられるのが殆どである。

- (121) 銀行では、間違ってることも間違ってるって言えないってことですか。(『花咲』第2話)
- (122) それは、言えないけど。(『花咲』第1話)

表 4-13 「テレビドラマ」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計データ

統計項目 可能 表現形式	I								II		III		合計
	潜在可能				実現可能				非過去	過去	肯定	否定	
	非過去		過去		非過去		過去						
	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定					
(ラ) レル	24 (10)	44 (18)	0	0	0	12 (5)	5 (2)	15 (6)	80 (33)	20 (8)	29 (12)	71 (29)	
小計	68 (28)		0		12 (5)		20 (8)		100 (41)		100 (41)		
	68 (28)				32 (13)								
	100 (41)												
可能動詞	38 (38)	36 (36)	0	0	2 (2)	9 (9)	5 (5)	10 (10)	85 (85)	15 (15)	45 (45)	55 (55)	
小計	74 (74)		0		11 (11)		15 (15)		100 (100)		100 (100)		
	74 (74)				26 (26)								
	100 (100)												
デキル	26 (18)	51 (35)	3 (2)	1 (1)	4 (3)	4 (3)	4 (3)	4 (3)	87 (59)	13 (9)	38 (26)	62 (42)	
小計	78 (53)		4 (3)		9 (6)		9 (6)		100 (68)		100 (68)		
	82 (56)				18 (12)								
	100 (68)												
ウル・エル	17 (1)	83 (5)	0	0	0	0	0	0	100 (6)	0	17 (1)	83 (5)	
小計	100 (6)		0		0		0		100 (6)		100 (6)		
	100 (6)				0								
	100 (6)												
合計	31 (67)	44 (94)	1 (2)	0 (1)	2 (5)	8 (17)	5 (10)	9 (19)	85 (183)	15 (32)	39 (84)	61 (131)	
	75 (161)		1 (3)		10 (22)		13 (29)		100 (215)		100 (215)		
	76 (164)				24 (51)								
	100 (215)												

一方、「潜在・実現可能」と「非過去・過去」では、「テレビドラマ」はこれまでの主流の傾向と同様に、潜在可能と非過去テンスのほうが大多数をなしている。確かに日常の会話では、過去を振り返るより、現在の様子に基づいて（近）未来の成り行きを予測したり（例（123））、何かの目的を実現させるために計画を立てたり（例（124））、人に頼み事をしたり（例（125））するのが普通であろう。つまり未来に向かって絶え間なく発展していく普段の生活や仕事などにおいて、既成の事実より、行為や事柄の実現の可能性のほうがもっと重視され、話題に上がりやすいため、こうした結果につながっていると思われる。そしてここにもまた、潜在可能と非過去テンスの間に連動が見られる。

(123) ああもう出られそうだから、多分8時くらいには…。 (『ラスフレ』第2話)

(124) 100万円もの現金事故になれば、支店長に責任を負わせられるでしょ。(『花咲』第1話)

(125) 忙しいのは分かるけど、見に行ってあげられないかな。(『ラスフレ』第2話)

表 4-14 「テレビドラマ」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計データ

可能の条件 可能 表現形式	心情可能	能力可能	内的条件 可能	状況可能	属性可能	結果可能	認識の 可能	小計
(ラ) レル	34 (14)	10 (4)	0	51 (21)	0	0	0	100 (41)
可能動詞	13 (13)	29 (29)	1 (1)	45 (45)	0	12 (12)	0	100 (100)
デキル	28 (19)	26 (18)	1 (1)	35 (24)	0	9 (6)	0	100 (68)
ウル・エル	0	0	0	0	0	0	100 (6)	100 (6)
合計	21 [46]	24 [51]	1 [2]	42 [90]	0	9 [20]	3 [6]	100 [215]

「可能の条件」による統計データである表 4-14 をみると、依然として状況可能が最も多い。(ラ) レル形式では、それに次いで心情可能の割合もかなり高い。しかし、総用例数が少ないためか、「文学(地の文)」で多用された「信ジラレナイ」「忘レラレナイ」はそれぞれ1回と2回しか出ておらず、特に目立っているとは言えない。

最後に、これまで分析してこなかった結果可能について、考察を加えておきたい。(ラ) レル形式の用例数がゼロで、合計からみても決して割合が高いわけではないが、「テレビドラマ」のデータでいくつか言及すべきと思う用例があるので、考察しておくことにする。

「テレビドラマ」の用例で、渋谷(1993a)が挙げている例のような典型的な結果可能文は、次の1文しか出てこない。

(126) そう、難しいんだよ。でもさ、できた一って思うときあんだろ？爽快だろ  
そんなとき？(『ラスフレ』第4話)

渋谷(1993a)で挙げている2つの典型例はいずれも過去形をとっており、「結果可能」ならずすでに起きた(過去の)ことでなければならないように見えるが、その定義「条件を無視して単に実現の有無(結果)だけを問題にする用法」から考えると、必ずしもそうとは限らない。例えば(127)は銀行の支店長が融資課の部下たちに向けて発する言葉であるが、ここの「取れる」も結果可能に当たると考える。もちろん多くの場合、新規の融資をとるのは、主に業務員の努力次第であり、取れるかどうかはその業務能力に関わっている。しかし、プロセス志向ではなく結果志向の職場においては、いかなる手段であれ、結果として融資が獲得さえできればよいという、条件不問の可能表現と捉えたほうがより適切であろう。この結果志向のニュアンスは、「まで」の使用によって強められていると感じられる。(128)も同じ理由により、結果可能と判定した。

(127) 新規の融資が取れるまで、帰ってくるな。(『花咲』第3話)

(128) 早く代わりの人材を手配してもらえるよう、人事部にお伝え下さいね。(『花咲』第4話)

また、視聴者の心をつかむため、わざわざ原因を述べずに結果だけをひとまず教えておいて、後で徐々に展開させていく手法も、結果可能の使用につながっている(例(129))。さらに、事実だけ把握しており、その成立した条件がよく分からない場合(例(130))や、行為自体が極めて簡単で、わざわざその実現の条件を問うあるいは言及する必要さえない場合(例(131)(132))、そして条件を無視するというより、条件(原因)自体を厳しく詰問する場合(例(133))も、結果可能となる。このように一口「条件不問」と言っても、実は様々な形式や様相があるわけである。

(129) 相馬さん、この詐欺師、捕まえられるかもしれません。(『花咲』第3話)

(130) —そういえば、尾見機械工業って、うちからの融資が下りなくて、結局どうなったんですか。 —調べてみたよ。何とか不渡りは回避できたみたいだ。(『花咲』第4話)

(131) —チケット、渡せたよ。 —サンキュー。(『ラスフレ』第2話)

(132) あっ、美知留？よかった。やっと連絡取れて。(『ラスフレ』第4話)

(133) なんで約束を守れなかったのか言いなさい。(『ラスフレ』第2話)

以上のデータと分析から、「テレビドラマ」については次のようなことが結論として言えよう。①全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を呈している。具体的に(ラ)レル形式をみると、②可能の意味の面では、「潜在可能」「非過去テンス」が依然として大多数を占めているが、緊張感や衝突の雰囲気醸し出すため、「否定形」の使用が大幅に増え、7割を占めている。③可能の条件の面では、「状況可能」が約半分となっており、「心情可能」の割合もかなり高い。④潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンスの間の相関性は依然として見られる。⑤実現可能では依然として「過去+否定」のパターンが比較的が多いが、潜在可能では初めて「非過去+否定」のパターンが主流となった。

## 4.3.6 トーク番組

「トーク番組」の統計データである表 4-15 を「テレビドラマ」と比べてみると、まず「否定形」の数が下がっていることに気付く。「トーク番組」は「テレビドラマ」のように台本があるわけではなく、ほぼその場で思いつくことをじかに話すので、日常会話により近づいていると思われる。そして今回の資料に出ている動詞のランキングを見ても、「食べる」(5回、例(134))「出ル」「見ル」(各2回、例(135)(136))のような普段の生活と緊密な関係のある動詞が上位となっている。特に他のジャンルで「～ト見ラレル」構文でたくさん使われている動詞「見ル」も、ここでは2例ともその本来の意味で用いられている。もともと「トーク番組」で話題に上がってくる内容は、大体ゲスト個人の私生活における面白い出来事、現在携わっている仕事や、将来の動向などであり、日常の自然会話の内容に近いものである。そのため、用例数が少ないながらも、この肯定形が否定形より多い結果は、現実の会話ぶりを反映しているとみることができる。

(134) 私は、でも今、あの、うん、食べようと思えば食べられると思うんですけど、習慣はまた無くなっちゃったんですよ。(『徹子』木村佳乃)

(135) 徹子さんの番組出れるということで、もうしっかりと自分を、しっかり出て。(『徹子』篠原涼子)

(136) (静電気)今の時期みんななかなか見れないんですけど。(『テレフォン』向井理)

可能動詞で用例数も否定形数も最も多い動詞は、また「言エル」(11回)である。そして「テレビドラマ」と同様に、「判断+ト言エル」構文は2文しかなく、ほかは全部「言ウ」本来の意味で使われている用例である。「言エル」に引き続き2番目に多いのは、授受の助動詞「Vテモラウ」の可能形「Vテモラエル」(10回、例(137))である。行為の授受を表すとき、特にそれが恩恵的な意味を持つ場合は常に授受の助動詞を伴うのは日本語の1つの特徴であり、特に話し言葉では顕著である。「テレビドラマ」においても、「Vテモラエル」は10回(例(138))出ており(それに「Vテアゲラレル」も3回、例(139))、「言エル」を超えている。授受の助動詞の可能形の使用は、可能表現においてこの二つのジャンルと他のジャンルとの間の一大相違点と言えよう。

(137) 今思うと、大事にしてもらえてたんだと思いますね。（『徹子』佐佐木希）

(138) 宗佑だってたたくたくてたたいてるんじゃないくて、私をたたくときは自分も苦しんでるんだと思うんだ。分かってもらえないかもしれないけど…（『ラスフレ』第4話）

(139) ごめんねお父さん。私は普通の女の子とは違うんだ。だからお父さんが望むような形では、幸せを見せてあげられない。（『ラスフレ』第10話）

表 4-15 「トーク番組」における四種類の可能表現形式の「可能の意味」による統計データ

統計項目 可能 表現形式	I								II		III		合計
	潜在可能				実現可能				非過去	過去	肯定	否定	
	非過去		過去		非過去		過去						
肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定	肯定	否定				
(ラ) レル	50 (8)	25 (4)	0	0	6 (1)	6 (1)	6 (1)	6 (1)	88 (14)	13 (2)	63 (10)	38 (6)	13 [16]
小計	75 (12)		0		13 (2)		13 (2)		100 (16)		100 (16)		
	75 (12)				25 (4)								
	100 (16)												
可能動詞	35 (26)	32 (24)	1 (1)	4 (3)	1 (1)	7 (5)	15 (11)	4 (3)	76 (56)	24 (18)	53 (39)	47 (35)	59 [74]
小計	68 (50)		5 (4)		8 (6)		19 (14)		100 (74)		100 (74)		
	73 (54)				27 (20)								
	100 (74)												
デキル	29 (10)	41 (14)	12 (4)	0 (0)	9 (3)	0 (0)	3 (1)	6 (2)	79 (27)	21 (7)	53 (18)	47 (16)	27 [34]
小計	71 (24)		12 (4)		9 (3)		9 (3)		100 (34)		100 (34)		
	82 (28)				18 (6)								
	100 (34)												
ウル・エル	0	100 (1)	0	0	0	0	0	0	100 (1)	0	0	100 (1)	1 [1]
小計	100 (1)		0		0		0		100 (1)		100 (1)		
	100 (1)				0								
	100 (1)												
合計	35 [44]	34 [43]	4 [5]	2 [3]	4 [5]	5 [6]	10 [13]	5 [6]	78 [98]	22 [27]	54 [67]	46 [58]	100 [125]
小計	70 [87]		6 [8]		9 [11]		15 [19]		100 [125]		100 [125]		
	76 [95]				24 [30]								
	100 [125]												

「潜在・実現可能」と「非過去・過去」の面では、「トーク番組」もまたこれまでの主流傾向と同じく、潜在可能と非過去のほうが大多数である。ここには「テレビドラマ」の場合と類似したところもあれば、異なったところもある。前者は、たとえば(140)のように将来の可能性を予測する用法も普通に出ているところである。後者は、たとえば(141)のように自分の過去の体験を追憶しているが、それを非過去形で話すことによって、まるでその出来事の場に立ち戻っているような感覚で発話している用法があるところである。これはつまり工藤(1995:186, 212, 214)の言う「歴史的現在用法」、あるいは「心理的

現在用法」である。用例数は多くないが、工藤が指摘しているように、「非常に素朴な表現方法」であり、普段の話し言葉でよく使われる表現方法であると思われる。

(140) まだちょっと大きいんですけど、もう少しで着れると思って。(『徹子』  
木村佳乃)

(141) だいたい時間を決めて、ご飯を食べる前に、体重計に乗って、あ今日は  
どれくらい食べれるとか。(『テレフォン』田中理恵)

表 4-16 「トーク番組」における四種類の可能表現形式の「可能の条件」による統計データ

可能の条件 可能 表現形式	心情可能	能力可能	内的条件 可能	状況可能	属性可能	結果可能	認識の 可能	小計
(ラ) レル	6 (1)	31 (5)	0	63 (10)	0	0	0	100 (16)
可能動詞	3 (2)	16 (12)	0	72 (53)	4 (3)	5 (4)	0	100 (74)
デキル	3 (1)	47 (16)	0	47 (16)	0	3 (1)	0	100 (34)
ウル・エル	0	0	0	0	0	0	100 (1)	100 (1)
合計	3 [4]	26 [33]	0	63 [79]	2 [3]	4 [5]	1 [1]	100 [125]

「可能の条件」による統計データである表 4-16 をみると、依然として大部分が状況可能であり、それに次いで能力可能もかなりの割合を占めているという結果である。渋谷 (2006) は各地方言において、各可能表現形式の表す「可能の条件」についての研究を通して、日本語の可能表現内部の意味変化は、「状況可能→能力可能→心情可能といったかたちで進むのが一般的である」という結論を出している。そして、各可能の条件の間にも非対等性が見られ、まず中核をなすのは能力可能と状況可能であり、さらにこの 2 つの条件のうち、能力可能よりも状況可能のほうが優位を持っていると指摘している。これは可能形式の面における研究であるが、今回の集計結果をみると、現実の使用上でもそうした非対等性が確認されたと考えられる。

最後に「トーク番組」におけるもう一つの特徴について述べておきたい。今回の統計では、全部 16 文の (ラ) レル可能文のうち、その半分は「見レル」のようないわゆる「ら抜き言葉」の形で現れている（「食べレル」が 4 回、「見レル」が 2 回、「着レル」「出レル」が 1 回ずつ。例 (135) (136) (140) (141) ）。このような「ら抜き言葉」を可能動詞の一種と捉える研究もあるが、小矢野 (1980:21) の言うように、二つの形式間に「意味的な違いとか表現性の差といった尺度ではなく、「見られる」より「見れる」のほうが音声言語（口頭語）で発音しやすいとか、「見れる」は誤用だという規範意識の有

無などの尺度で説明できそう」ということを考え、本論文はこれを可能の助動詞「(ラ)レル」による可能表現に分類している。こうした「ら抜き」の可能表現は、現在はまだ主に話し言葉に限られているとしても、使用人数の拡大につれて、将来は可能表現の世界における正式な市民権を得ていくのであろう。

以上のデータと分析から、「トーク番組」については次のようなことが結論として言えよう。①全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を呈している。具体的に(ラ)レル形式をみると、②可能の意味の面では、「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」が中心をなしている。③可能の条件の面では、「状況可能」が6割超となっており、次いで「能力可能」の割合もかなり高い。④潜在可能と非過去テンスの間の相関性が依然として見られる。⑤潜在可能では「非過去+肯定」のパターンが中心をなしている。

#### 4.3.7 「ウル・エル」及び「デキル」について

本節では、これまでの分析で保留にしておいた(注72と4.3節の最初の部分を参照)可能形式「ウル・エル」及び「デキル」について考察する。まず「ウル・エル」形式については、表4-3をみれば分かるように、その出現回数および割合はジャンルを問わず数が少なく、割合も非常に低い。また表4-17(括弧内は数)に示されているように、異なり動詞数も非常に限られている。

表4-17 六つのジャンルにおけるウル・エル形式可能表現の異なり動詞とその数

文字 言語	新聞記事	ある(2)、成る(2)、行う(1)
	文学(地の文)	ある(4)、成る(3)、起こる(1)、持つ(1)
	ブログ	ある(6)、禁じる(1)
音声 言語	テレビニュース	ある(2)
	テレビドラマ	ある(6)
	トーク番組	ある(1)

これらの動詞のうち、最も出現頻度の高いものは言うまでもなく認識の可能の典型例「アル」であり(21回)、そのうち4例以外はすべて否定形の「アリエナイ」である。「アル」に次いで、「成ル」も5回現れており、肯定形が3回で否定形が2回である。それ以外の動詞は、特に肯定形や否定形に偏る傾向は観察されていない。そしてテンスの面では、全例文のうち、2例しか過去テンスは存在しておらず、はっきりした偏りを見せている。

また可能の条件の面（表 4-6、表 4-8、表 4-10、表 4-12、表 4-14、表 4-16）からみると、状況可能と心情可能がそれぞれ 5 例と 1 例出現しており、ほかはすべて認識の可能である。実際の使用において、ウル・エル可能表現はかなり強い傾向を持っていることが確認できた。

次に、「デキル」形式について、三つのタイプごとに六つのジャンルにおける数と割合をまとめると、表 4-18 のとおりになる<sup>77</sup>。

表 4-18 六つのジャンルにおけるデキル形式可能表現の数とその割合

ジャンル		可能形式	(名詞+ガ+) デキル	名詞+デキル	動詞連体形+ コトガデキル	合計
文字 言語	新聞記事		36 20%	124 69%	20 11%	180 100%
	文学（地の文）		72 23%	71 23%	169 54%	312 100%
	ブログ		57 36%	59 38%	41 26%	157 100%
音声 言語	テレビニュース		1 5%	14 74%	4 21%	19 100%
	テレビドラマ		38 56%	24 35%	6 9%	68 100%
	トーク番組		23 68%	10 29%	1 3%	34 100%

表 4-18 から、デキル形式の三つのタイプは、各ジャンルの中に大きな相違があることが一目で分かる。割合からみると、「(名詞+ガ+) デキル」タイプでは、「トーク番組」と「テレビドラマ」が最も高く、「テレビニュース」が最も低く、表 4-3 における「可能動詞」のデータと同様な傾向を示している。これが「名詞+デキル」タイプでは正反対となり、「テレビニュース」が最も高く、「トーク番組」と「テレビドラマ」が最も低い。そして「動詞連体形+コトガデキル」では、「新聞記事」や「テレビニュース」において文字数の制限があるためか、今度は「文学（地の文）」が最も高い。

「動詞連体形+コトガデキル」、ウル・エル形式は文章語的で、可能動詞は口語的であると多くの研究が指摘している（奥田 1986、渋谷 1995、庵ほか 2001 など）が、可能動詞と同様な傾向にある「(名詞+ガ+) デキル」も話し言葉性の高い表現だと考えられる。そして、サ変動詞自体が硬い表現であるので、その可能形式「名詞+デキル」も硬い可能表現だと言えよう。各表現形式のこうした特徴は、表 4-3 と表 4-18 のデータによってあらためて確認できたと思う。

<sup>77</sup> 実際の統計において、「頭では理解できても、すぐできるかどうかまだ、自信はない。」のように「名詞+ガ」の部分が消える例や、「しかし浪人生でしかない今の自分に本当に彼女を幸せにできるのか？」のようにもともと「名詞+ガ」の部分がな例もあるが、整理の都合上、全部「(名詞+ガ+) デキル」の類に加算している。

#### 4.4 本章のまとめ

上でみてきた六つのジャンルにおける可能表現の特徴をまとめると、次のようになる。

①「文学（地の文）」を除いて、どのジャンルも全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を見せている。「文学（地の文）」では形式間でずれが出たが、似ている部分は依然として多い。

そして、具体的に（ラ）レル形式に限定すると、次のような特徴がみられる。

②可能の意味の面では、「新聞記事」「ブログ」「テレビニュース」「トーク番組」はいずれも「潜在可能」「非過去テンス」「肯定形」が中心をなしている。「テレビドラマ」でこれらと異なっているのは、緊張感や衝突の雰囲気醸し出すため、「否定形」の使用が大幅に増え、7割を占めている点だけである。また「文学（地の文）」では、主に過去においてすでに起こった出来事を語るというジャンル自体の性質により、「潜在可能」「非過去テンス」が依然として約半分を占めているが、「実現可能」と「過去テンス」の数も大幅に増え、また「信ジラレナイ」「忘レラレナイ」など表現の多用によって、「否定形」も7割近くに増加している。可能表現において、否定表現のほうが多いと主張する研究もある（渋谷 1993a、川村 2004 など）が、今回の集計結果をみると、それと正反対の傾向を見せているジャンルもあることが分かった。

③可能の条件の面では、「文学（地の文）」を除いて、ほかのジャンルはすべて「状況可能」のほうが著しく多い。「文学（地の文）」では、「状況可能」は依然として多いが、「信ジル」「忘レル」「耐エル」など主体の心境を描く動詞の多用によって、「心情可能」も40%まで伸びている。また「テレビニュース」を除いて、他のジャンルにおいて「能力可能」もかなりの数で出現している。

④すべてのジャンルにおいて、潜在可能と非過去テンスの間に強い相関性が見られる。実現可能の数が多いジャンル（「文学（地の文）」）において、実現可能と過去テンスの間にも強い相関性が見られ、他のジャンルはそれほど強いとは言えないが、実現可能において非過去テンスが過去テンスより多いケースはない。

⑤「テレビドラマ」を除いたすべてのジャンルにおいて、潜在可能では「非過去＋肯定」のパターンが主流となっている。また「文学（地の文）」「ブログ」「テレビドラマ」において、実現可能では「過去＋否定」のパターンが主流となっているのが観察される。

## 第5章 自発

本章では、先行研究を紹介したうえで、自発表現について本論文での定義を行い、本論文で扱う自発表現の形式を定める。そして、各ジャンルの自発表現の統計データをもとに、各ジャンルの特徴と相違を見出し、その原因について分析する。

### 5.1 自発表現の定義および形式

本節では、自発表現にまつわる先行研究を紹介したうえで、「自発表現」およびその形式について定義を行う。

#### 5.1.1 自発表現の定義

自発表現の定義について、諸研究はだいたい似たようなものを提示している。例えば岩淵ほか編（1989:136）には、「自発とは、そうしようと思わなくても自然にそうなるという言い方のことである」という記述がある。また小池ほか編（2002:174）では、自発表現は「主体の意志に関係なく、ひとりでにある動作をとるに至っていることを表す表現」とあると定義している。

この二つの定義は、一見同じようにみえるが、細かいところで違いがあると思われる。岩淵ほか編（1989）の定義における「そうしようと思わなくても」という言い方に、「主体の意志に関係なく」という含みのほか、「主体の意志に反して」という含みも読み取れないわけではない。実際、この二つ目の含みを定義にはっきりと反映させている研究もいくつか存在し、たとえば渋谷（2006）、吉田（2010）、川村（2014）が挙げられる。

渋谷（2006:48）は動作主体の意志を拠り所とし、自発を「「通常は動作主体の意志の発動によって行う／行わないはずのある動作が、動作主体の意志とはかかわりなく、あるいはときにそれに反して、起こる（肯定文の場合）／起こらない（否定文の場合）」といったことを表す動詞の文法的なカテゴリー」と定義し、そのうち特に「話し手の意志や期待に反して行為が起こる／起こらない」場合の表現が「典型的な自発」（52頁）であると主張している。川村（2014:258）も同様な角度から、「通常意志的に行われる行為が、行為主体が意志しないのに（意志に反して）実現すること」を自発の意味としている。両者の違いは、渋谷は否定文の場合も含めて考察しているのに対し、川村はそうした点に触れ

ていないところくらいである<sup>78</sup>。そして吉田(2010:95)も、「そうしようと意識・努力しないで、自然にそうなる。ひとりでに催されて、止めることができない意味を表す」と、言葉遣いを少々変えているが、「動作主体の意志に背く」という意味を包含している点で基本的に前述の主張と一致している。

そこで、この「動作主体の意志に反して」という規定がはたして必要であるか否かを考えてみたい。寺村(1982:271-272)は、「Xガ V(他動)-e-(ru)」という自発構文の意味を、「あるもの(X)が、自然に、ひとりでにある状態を帯びる、あるいはあるXを対象とする現象が自然に起きる」と定義し、この表現の本質は、「V-の主体を不問に付した、あるいはそれが意識に存しない」というところにあると主張している。この動作主体(への意識)の不要という主張は、橋本(1969:266)、森田(2007:41)、堀川(1992:172, 179, 180)など、定義の中で動作主体への言及すらない研究によって支持されていると考えられる。また澤田(2006:265)における「自発文とは、心理主体に、ある心的作用(感情・知覚・思考など)が自然に生じるさまを表す構文の集合である」という定義では、心理主体は言及されているものの、単に心的作用の発生の場としての役割しか持たず、その意志性は関係していない。

よく考えてみると、「動作主体の意志に反して」というのは、自発表現の一義的な意味ではなく、それを文脈や世間一般の常識に照らし合わせた結果、生じてくる意味合いであると理解したほうが適切のようである。すなわち、自発表現の置かれる文脈から、その出来事が動作主体の意志や期待にそぐわないという読みが出る場合、「普通は動作主体の意志によって発動される動作が、動作主体の意志に関わりなく発生してしまう」ことに付随して、「動作主体の意志に反して」という意味合いが生じてくる。これは、例えば「忘れようとしているのに、あれを見ると、どうしても昔のことが思い出される」という文を考えてみるとよい。この文からは確かに「動作主体の意志に反して」という意味が読み取れる。ところが、「忘れようとしているのに」という部分を外したとしても、自発部分の意味はほとんど変わらない。そのほか、自発表現に「テシマウ」を伴う場合も、「動作主体の意志に反して」という意味合いが生起することがあるが、これも「テシマウ」の付加によるところが大きいのは、言うまでもなからう。

こう見てくると、自発表現の定義については、「主体の意志に関係なく自然に出来事が発生する」という点こそが、諸研究に共通している部分であり、自発の本質的な意味であ

<sup>78</sup> 自発の否定形に関しては、後述する。

ろう。というわけで、本論文においては、「自発表現」を「主体の意志に関係なく、自然に出来事が発生する意味を表す表現」と定義することにする。

### 5.1.2 自発表現の形式

森山（1988: 122-123）によると、自発表現の形式（以下は「自発形式」と略す）に関する扱いは、主に①助動詞（ラ）レルの自発用法のみ、②自動詞的な *-eru* のみ、③その両方を含むもの、を自発形式とする、という三つの考え方があ

る。（ラ）レルが自発の助動詞としての位置づけがほぼ共通の認識となっている現代日本語において、それを自発形式の一つに数えるのが至極当然のように思われるなか、上の考え方②の特異性は際立つものに感じられよう。事実、管見のかぎり、この立場をとる研究は寺村（1982）しか見当たらないようである。寺村（1982:272）は他動詞のうちの「五段活用をする動詞の語幹に‘*-e-(ru)*’という形態素がついたもの」を自発形式の標準の形と規定し、「聞コエル、思ワレル、泣ケ（テク）ル」などを「標準から外れる形」、そして一段活用動詞の「見エル、煮エル」などを例外的な自発形式として考えている。この規定のもとでは、「切レル、折レル、売レル、割レル、砕ケル」などはすべて自発形となる。しかし、庵ほか（2000:85）に指摘されているように、これらの動詞は現在「他動詞に対応する自動詞とする考え方のほうが一般的」である。また、自発文は「動作主体を文構造のなかにもっている」のに対し、これらの動詞は「もともと動作主体は文構造のなかに含まれていない」という渋谷（2002:30）の指摘をあわせると、それを自発形式の一種として立てる妥当性はさらに薄くなってしま

であろう<sup>79</sup>。考え方①の支持者といえ

ば、森山（1988）、堀川（1992）、渋谷（2002）などが挙げられる。渋谷（2002:30）は、*-e(ru)* 形を自発形としない理由について、上に述べたもののほか、「可能動詞と同じかたちをとる自発形式」は、「テシマウやテクルのような補助動詞や、副詞イツノマニカなどの、自発であることを表す別の形式のサポートがないと、可能に解釈されることが多く、単独で自発を表す力は弱い」ことを挙げている。また堀川（1992:171）は早津（1987）の指摘を援用し、「割レル、焼ケル、切レル」などにみられる「自然にそうなる」という意味は、他の有対自動詞と共通の特徴であり、「語幹に *-eru* がついた形のもの（可能性と同形）だけを別に取り出して、自発という生産的なカテゴリー

<sup>79</sup> この点については、杉本（1988:220）が語彙確立の歴史の角度から行った反論も参考になる。

一として独立させる根拠は薄い」ということから、(ラ)レルのみを自発形として扱っている。

考え方③をとる研究については、「両方を含む」といっても、実は -eru 形の一部だけを含めるのが一般的である。例えば小池ほか編 (2002:174) では、自発表現には、「動詞+レル・ラレルの形」と「可能動詞の一部」とが包含されている。「この種の可能動詞は意外と少なく」と述べてあり、用例としては「思エル、笑エル、泣ケル、読メル、知レル」などが挙げられている。松村編 (1971:301) や杉本 (1988:217-219)、岩淵ほか編 (1989:136-137)、川村 (2014:258) など、これと同様な立場である。

本論文は、二つの理由により、考え方③に従うことにする。第一に、現代日本語において、助動詞(ラ)レルの自発用法はすでに市民権を得たものであり、当然自発形式の一つとすべきだからである。第二に、「泣ケル、笑エル、読メル、思エル」など可能動詞形ものは、一般の自動詞の類に属せず、自発形式として認められる場合が多いため、実証的研究を目的とする本論文にとっては、集計して比較する価値があると思われるからである。また、動詞「見エル・聞コエル」はよく自発の範疇内のものとして捉えられるが、以上の二種類とまったく違う特有の性質を持っており、現代語においては「単独の動詞」と判断される(杉本 1988:218) ため、本論文では考察対象から外すことにする<sup>80</sup>。

## 5.2 各ジャンルにおける自発表現の集計結果およびその分析

まず六つのジャンルにおける二種類の自発表現形式の統計データを示した表 5-1 から、全体的な感覚をつかんでみよう。(括弧( )の中は用例数で、その外はパーセンテージ<sup>81</sup>。用例数がゼロの場合はパーセンテージを略す。以下同。)

<sup>80</sup> 「見エル」「聞コエル」を「状態性の自動詞の用法の一環」とみる研究もある(小池ほか編 2002:174)。「見エル」「聞コエル」については、畠山 (2014) などが参考になる。

<sup>81</sup> 今回の統計で、用例数の非常に少ないジャンルがあり、パーセンテージを表示するのはあまり意味がないかもしれないが、格式上の統一のため、全部入れることにした。

表 5-1 六つのジャンルにおける二種類の自発表現形式の統計データ

ジャンル 自発形式	文字言語			音声言語		
	新聞記事	文学（地の文）	ブログ	テレビニュース	テレビドラマ	トーク番組
（ラ）レル	82 (28)	48 (30)	83 (10)	0	0	0
可能動詞	18 (6)	52 (32)	17 (2)	0	100 (4)	100 (2)
合計	100 (34)	100 (62)	100 (12)	0	100 (4)	100 (2)

表 5-1 から、六つのジャンルのいずれにおいても、自発表現の数が少ないことは一目瞭然であろう。特に音声言語の三つのジャンルをみると、「テレビニュース」は極端であり、自発表現の用例は皆無で、「テレビドラマ」と「トーク番組」においても、（ラ）レル形の用例数はすべてゼロである。こうした数の少なさは、本来使用の少なさ以外に、統計の基準も関わっているのので、ここはまず、本論文における統計基準について説明しておく。

渋谷（2002:29）が指摘するとおり、現代日本語における（ラ）レル形式の自発文は、「思考動詞や感覚動詞など、ごく一部の動詞に助動詞（ラ）レルが付加して作られるにすぎない」。森山（1988:130）はさらに「感情、感覚、思考の動詞でも、ラレル自発になるのは、次のような動詞だけである」と主張し、次のように意味に従って分類し、動詞の例を挙げている。

- 思考動詞** 考える、判断する、思う、認める、望む、願う、興味を持つ、推論する、納得する、承服する、思い出す
- 感情動詞** 悲しむ、懐かしむ、嘆く、期待する、急ぐ
- 感覚動詞** 感じる

また、堀川（1992）は森山（1988）の主張に従ったうえで、自発を「感情生起型」（惜シム、悔ヤム、危ブム、など）、「想起型」（思イ出ス、惚ブ、感ジル、など）、「判断型」（思ウ、考エル、見込ム、など）の三つに分類し、考察を進めている。

このように、現代日本語において、（ラ）レル形自発になり得る動詞はもとより限られている。さらに前述した可能動詞形の自発もごくわずかなものに限定されているという事実をあわせて考えると、用例数が少ないのもそう不思議なことではない。しかしその中でも、ここで特に検討を加えておきたいのは、「考エル」と「見ル」という二つの動詞である。

より正確には、「～ト考エラレル」「～ト見ラレル」という二つの引用構文について再

び検討を重ねておきたいのである<sup>82</sup>。この二構文を自発表現として捉える研究も多い（松村編 1971:302 など）が、一方、それを可能表現として（庵ほか 2001: 191、内田 2002:34-35 など）、されに断定保留を表す一種のモダリティ表現として（小矢野 1980:23 など）捉える研究も少なくない。富阪（1999:139）が述べているとおり、これらの表現は「ある状況についての解釈が自然発生的であり、理にかなっており、疑問の余地が少ないことを示している」ので、意味上では可能の側面も自発の側面も備えている」ため、こうした見解の食い違いも無理はない。

佐藤・仁科（1997:69）は「根拠の有無」に応じて、「～ト考エラレル」の機能が可能か自発かを判断するという分別の方法を提示している。それはすなわち、「根拠をとまなう判断における「と考えられる」の用例では、可能の意味が優勢になって」おり、「根拠を欠いた判断における「と考えられる」の用例では、自発の意味が主体になっている」という。しかし、同論文後半のサ変動詞の「される」系（自発）と「できる」系（可能<sup>83</sup>）の集計結果を見ればわかるように、「される」系も根拠を伴った場合が 48%（30/63）も占めており、「できる」系という明らかに可能を表す表現も根拠を欠いた場合がある（14%、9/60）。こうした結果を考慮すると、根拠の有無をとわず「できる」系をすべて可能表現として、「される」系をすべて自発表現<sup>84</sup>として扱うのに対し、根拠の有無によって「ト考エラレル」（広げて言えば（ラ）レル形式の自発・可能表現）を可能と自発に分けるのは、合理性に若干欠けると言えよう。従って本論文は、佐藤・仁科（1997）の主張に参考に値する部分が充分あると認めつつも、根拠提示の有無による分別方法に従わないことにする。

小矢野（1980:23）は、「考エル、見ル」など思考や感覚に関する動詞の（ラ）レル形について、「対象格が「～と」という引用の形式となって表現される際には」、それが「話手や書手が自分の判断や感じを断定することを避け、判断や感じの内容を一つの可能性として婉曲的に示すことによって、判断や感じに対する話手や書手の責任を回避する表現法」

<sup>82</sup> 「～ト見ラレル」「～ト考エラレル」構文については、4.3.1 節と 4.3.4 節でも触れている。

<sup>83</sup> 括弧のなかの「自発」と「可能」の指定は、同論文佐藤・仁科（1997:69）によるものである。

<sup>84</sup> 「できる」系という歴然と可能を表す表現があるにもかかわらず、あえて「される」系のほうを進んで用いるのは、可能より自発に近寄る意味選択の意図が込められていると考えられる。よって、「される」系をすべて自発として扱うのは確かに妥当であると思う。本論文もこうした扱い方に従う。もちろん現実の使用において、誤用や適切でない用法も存在すると思われるが、分類・統計に基づいて使用率を分析する際、ある形式を選択するにあたって、書き手がその形式特有の意味・表現効果を意識したうえでそれを選んでいると想定するしかない。もちろん「される」形の動詞が受身になる場合もあるが、それは別問題である。

であり、「思考動詞や知覚動詞に特有の用法として位置づけることができる」と述べている。これはつまり、「～ト考エラレル」や「～ト見ラレル」はモダリティ化した可能表現であるという意見であり、妥当性が高いと思われる。従って、本論文は「～ト考エラレル」「～ト見ラレル」という二つの引用構文を自発表現ではなく可能表現として扱い、しかもそれがかなりモダリティ化しているものと認識する。このように本論文において、使用頻度の高い「考エラレル」と「見ラレル」は自発表現として集計されていないため、その数がひとときわ少なくなったわけである。

以上の基準をふまえ、本論文は主に「動詞」「動作主<sup>85</sup>」「構文」「主節・接続節」「テンス」「肯定・否定」「自発の型」「根拠提示の仕方」などの面から、統計を行っている。

具体的にいえば、「動作主」（思考、感情、知覚の主体）は人称とマーカの面から観察している。自発表現は使われる動詞の性質に規制され、人称制限があると従来言われている。しかし、三人称小説の場合、感情移入という手法があるため、三人称主体の自発表現も十分想定できる。また、動作主が省略される場合が極めて多いと言われるが、それが出る場合、どんなマーカを伴うことが多いかを確認するのも、自発表現を把握するうえでは不可欠と思われる。

そして「構文」というのは、典型的な自発構文「X〔動作主〕ニ（ハ） Y〔対象〕ガ V〔動詞〕(rar)eru」以外に、どういう構文が用いられているかを確認するための項目である。

また、通常自発表現の研究に出されている例文は、ほとんど主文末にくる、非過去形のものに限られており、他の形式は少ない。実際の使用において、果たしてどんな状況になっているか確かめるために、「主節・接続節」および「テンス」という項目を加えている。

なお、自発は否定になりにくいと従来言われているので、「肯定・否定」を集計する意味はないように見える。しかし、安達（1995）は「思エル」が可能と自発の両方を表わせることを立証し、さらに「否定で使われる場合には、思エルの方が自然である」と指摘しており、以下のような実例を挙げている（129頁）。

<sup>85</sup> 森山（1988）や堀川（1992）、渋谷（2002）の主張にあるように、現代日本語における（ラ）レル形式の自発文は、ごく一部の感情、感覚、思考動詞に限られているため、その主体は「経験者」と呼ぶほうがよりふさわしいようである。しかし、上に見てきた自発表現の定義や形式についての先行研究には「動作主体」「行為主体」などの用語が使われており、また「泣ケル、笑エル」など可能動詞形のものも考察対象に入れているはため、ここでは続けて「動作主」という用語に統一させることにする。

(142) 戸倉は、かおりが自分との深夜の電話を、石越に話しているとは思えなかった。(海岸)

また、庵ほか(2001:192)も否定の場合の「思ワレナイ」は、「「思えない」よりも硬い表現になるため、話し言葉では使われ」ないと指摘し、次のような実例を挙げている。こうした実例の存在から、自発は絶対に否定になりえないわけではないことが分かる。というわけで、本論文は「肯定・否定」をも統計項目に入れることにした。

(143) 深夜ひそかに行われた犯行にせよ、一家3人をどこかへ連れ出したとすれば、1人や2人のしわざとは思われない。(朝日新聞朝刊 1991.11.4)

最後に、「自発の型」は前述した堀川(1992)の三分類、すなわち「感情生起型」「想起型」「判断型」に従う。「判断型」自発表現に対しては、さらに前述した佐藤・仁科(1997:65)における「判断の根拠の提示の仕方」によって分類する。その分類基準は具体的には図5-1のようになっている。

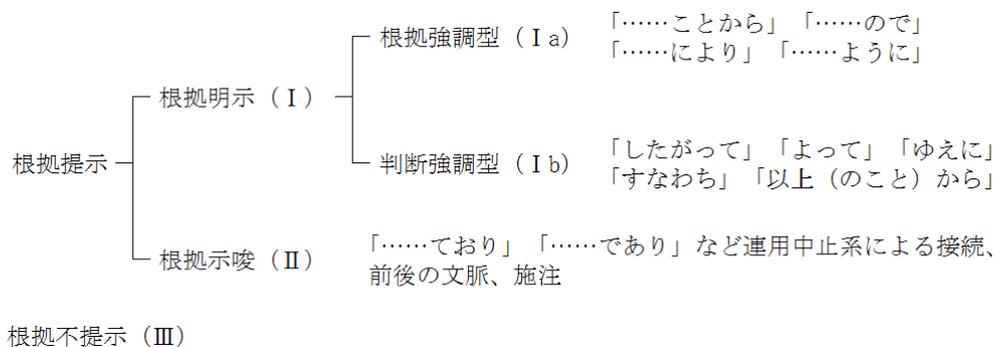


図5-1 佐藤・仁科(1997:65)における「判断の根拠の提示の仕方」

佐藤・仁科(1997)のように、この基準によって自発か可能かを見分けるわけではないが、自発の使用にあたって、根拠の提示をどれほど伴っているか、またそれがどういった形で現れているかを把握するのは、意味あるものと思われる。

以下ではジャンルごとに、既述したいくつかの方面から、自発表現の特徴を考察してみる。

## 5.2.1 新聞記事

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から抽出した「新聞記事」における両形式の自発表現についての統計データは、表5-2のとおりである（括弧（ ）、[]の中は用例数で、その外はパーセンテージ。「小計」に示されているパーセンテージは自発形式ごとの総用例数に対するもので、また「合計」に示されているそれは二形式を合算した総用例数に対するものである。以下同）。

表5-2 「新聞記事」における二種類の自発表現形式の統計データ

統計項目 自発形式	I		II 人称		III テンス		IV		V 自発の型			VI 根拠提示の仕方（判断型）				合計
	主節	接続節	一人称	三人称	過去	非過去	肯定	否定	感情 生起型	想起型	判断型	I a	I b	II	III	
(ラ) レル	68 (19)	32 (9)	96 (27)	4 (1)	7 (2)	93 (26)	100 (28)	0	7 (2)	0	93 (26)	12 (3)	4 (1)	58 (15)	27 (7)	82 [28]
小計	100 (28)		100 (28)		100 (28)		100 (28)		100 (28)			100 (28)				
可能動詞	50 (3)	50 (3)	100 (6)	0	17 (1)	83 (6)	83 (6)	17 (1)	0	0	100 (6)	0	0	67 (4)	33 (2)	18 [6]
小計	100 (6)		100 (6)		100 (6)		100 (6)		100 (6)			100 (6)				
合計	65 [22]	35 [12]	97 [33]	3 [1]	9 [3]	91 [31]	97 [33]	3 [1]	6 [2]	0	94 [32]	9 [3]	3 [1]	59 [19]	28 [9]	100 [34]
	100 [34]		100 [34]		100 [34]		100 [34]		100 [34]			100 [34]				

表5-2の(ラ)レル形式のデータをみると、いずれの項目も明らかに偏りを呈していることが分かる。「接続節」「三人称」「過去テンス」「否定形」に対して、「主節」「一人称」「非過去テンス」「肯定」のほうが優位に立っている。これは従来指摘されている自発の特徴と一致した結果である。既述したように、自発の研究で出される例文は、大体自発表現が主文末に来るものが多い。「新聞記事」の実例も、確かに主文末をとるものが大多数を占めている。が、接続節に現れるもの（例（144））も一定の量で出現し、そのうち連体修飾節となっているもの（例（145））もある。

(144) 国内向けが自動車生産増で伸びるほか、生産集約、人員削減などの効果が  
見込まれて、経常利益で三、五倍増益の見通し。（産経新聞、2002/6/7）

(145) 国民の健康増進に明らかに寄与すると思われる健康診断やワクチン接種は  
保険から給付されない。その一方、治療とは関連の薄い病院給食などが保険財  
政から支出されている。（読売新聞、2001/6/8）

そしてテンスや人称の面でも既述の主流傾向に合致しており、非過去テンスと一人称動  
作主の文がほとんどである。唯一の三人称自発文（例（146））、①～④の番号は筆者によ

る)を分析してみると、これがすこし特殊な例であることが分かる。文脈から、判断を述べる文②だけでなく、その理由を説明する文③④も西岡清院長の言葉の引用であると判断できる。前文との重複を避けるために、引用であることを表明する「と西岡清院長はいう」をくりかえし明示しないようにしたと捉えられる。つまり本当は西岡院長が一人称で述べた文が、引用表現の省略によって、外見上は三人称にみえてきたというわけである。

- (146) ①これまでは、検査から診断・治療・回復まで、ずっと入院したままの例も珍しくなかった。②しかし、今回の制度は「入院文化の変革」と東京医科歯科大病院の西岡清院長はいう。③検査が終われば退院。④治療方針が決まったら再入院し、治療が終わればまたすぐ退院、となることが想定されるからだ。  
(朝日新聞、2003/3/13)

「新聞記事」における自発表現に、こういった動作主マーカ―が共起しているかという点、表5-3のとおりである(数字は用例数、以下同)。両形式をあわせてみても、動作主がマーカ―を伴って文に現れているのは1例しかない。「主体の意志に関係なく自然に出来事が発生する」という意味を表す自発表現において、動作主は単なる出来事の発生の場合としての役割しか果たしていないため、必要度が低く、このようにほとんど明示されないのもごく当たり前のことであろう。

表5-3 「新聞記事」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況

自発形式 統計項目	(ラ) レル	可能動詞
動作主マーカ―	無 28	無 5 Xニハ 1
構文	Yガ(モ) V-(r)areru 15	Yト V-eru 5
	Yト V-(r)areru 13	Yヨウニ V-eru 2

表5-3に示されているもう一つの項目「構文」の内訳を見てみよう。「X〔動作主〕ニ(ハ) Y〔対象〕ガ V〔動詞〕(rar)eru」は典型的な自発構文とされているが、この数字から、「Y〔対象〕ト V〔動詞〕(rar)eru」構文もたくさん使われていることが分かる。これは、自発表現に使用されている動詞に関わっていると考えられる。

(ラ)レル形式の自発に用いられている動詞は、使用頻度上位のものとして「思う」(9

例)、「予想スル」(7例)、「期待スル」(5例)が挙げられる。この3つの動詞の自発構文がそれぞれ異なった様相を呈しているのも、興味あるものである。「思ウ」がすべて「Yト V-(r)areru」構文をとっており、「予想スル」は逆にほとんど「Yガ(モ) V-(r)areru」構文をとっている(6例)。「期待スル」は中間的であり、「Yガ(モ) V-(r)areru」構文と「Yト V-(r)areru」構文はそれぞれ3例と2例ある。動詞によって、構文上偏りをもっていると捉えられる。「思ウ」「期待スル」のような引用節を受けて判断や予測の内容を表す動詞の多用は、「Yト V-(r)areru」構文の高出現率をもたらした一方、判断型自発の頻用にもつながっている。

堀川(1992:180)の言う「判断型」の自発は、「判断する」「予想する」など判断を表わす動詞において、ある事態に対する判断が可能になることを表わす自発表現のことを指し、ほかに「想像スル・推定スル・見込ム・見ル・考エル・思ウ」などの動詞も挙げられている。堀川は「可能形と置き換えられる」と「テイルをつけることが可能である」<sup>86</sup>という二つの理由により、判断型自発は可能と受身の両方につながっていると述べている。前掲の(144)における「見コマレテ」に受身の意味が若干読みとれるのは、判断型自発のこうした性質からきたものであろう。

一方、同じ判断型自発である(147)に、あまり受身の意味は出てこない。これは、使われる動詞の性質に影響されていると推察できる。

(147) タイガースの長期にわたる低迷が、こういった数の少なさにつながっていると思われるのだが、今年のタイガースは、ご存知のとおり、去年とはまるっきり違う。社会現象といわれるほどの快進撃である。(産経新聞、2002/5/8)

内田(2002:35)は「思考動詞「考える」が、動作を始めるときに行動の意志を必ず必要とするのに対し(動作開始時の自己制御可能)、「思ウ」は動作を始めるときに行動の意志を必要としない」という両動詞の性質の違いを指摘している。また富阪(1999:137)は、「考エル」と「思ウ」の違いは「筋道を立てて」の思考であるか否かにあり、「考エル」のほうが「より知的レベルが進ん」でいると述べている。「見込ム」や「推定スル」「予想スル」なども「考エル」と同様、主体の意志と知性を必要とする動詞であり、「思ウ」と性質が異なっているといえる。

<sup>86</sup> ただし「判断型にテイルをつけた形は自発ではなく受身である」(堀川 1992:181)。

堀川（1992:181）は、判断型は「一人称」ではなく「不特定多数」の人々の感情になる場合があるのと、「ヒトリデニ」ではなく何らかの判断のもととなる外的情報を必要とする」との二点から、それを一括して自発のプロトタイプ<sup>87</sup>から最もずれていると位置付けている。しかし上述の（144）と（147）のニュアンスの違いから、この判断型の内部にも段階性があり、動作を始める時点で主体の行動意志や知性を必要とする動詞ほど、自発のプロトタイプから離れてしまうと指摘することはできよう。もう一歩進んで言えば、もともと自発に向かない判断動詞<sup>88</sup>に自発形が使われているのは、自発のもつ「自然とそうなる」という必然性の意味合いを利用して、「自然にそういう結論になる」（庵ほか 2000:124）、「これは必然的な判断である」というニュアンスを帯びさせ、判断の客観性を高めるといふ書き手の意図の結果であると言ってよからう。

表 5-2 における「自発の型」および「根拠提示の仕方」のデータを考察する。（ラ）レル形式が全部で 28 例あるうち、26 例も判断型となっている。そして判断型のうち、19 例も根拠提示を伴うもの（タイプ I a、I b、II）であり、根拠不提示の用例（タイプ III）は 7 例しかなく、全体的に根拠提示率はかなり高い。そして、根拠不提示の用例を確認してみると、（147）のように理屈が簡単で自明的な場合、（148）のように専門度が高く詳しい計算過程を示す必要性の薄い場合、それに（149）のように場面性が強くその場の状況が判断の手掛かりとなっているので説明のしようもない場合などであり、それぞれ根拠を不提示にする合理性がうかがえる。

（148）イスラエル在留ルーマニア人 6 万～7 万人のうち、不法労働者は 2 万～2 万五千人と推計される。（毎日新聞、2002/7/23）

（149）四回 1 死からフェルナンデス、カブレラに連打を許して一、三塁。続く和田は遊ゴロに打ち取って併殺かと思われたが、沖原が後逸。（毎日新聞、2005/8/27）

一方、根拠提示の用例でも、根拠明示のタイプ I a、I b より、根拠示唆のタイプ II のほ

<sup>87</sup> 堀川（1992:181, 182）は「一人称者の感情がひとりでに生ずること」を自発のプロトタイプとしている。

<sup>88</sup> 内田（2002:35）は「自発になる動詞は、その意味内容として、動作を始める時点で主体の行動意志がないものでなければならない」と主張するが、この基準に従うと、ほとんどの判断動詞は自発になれなくなる。本論文はそこまで極端に捉えることはしない。

うがはるかに多い。(150)のように文脈から根拠が読みとれたり、(151)のようにテ形「～て」で理由が表明されたり、(152)のように連体修飾節の内容が根拠となったり、根拠示唆には豊富な手段が使われている。新聞記事は客観性が求められるといっても、学術論文のように「…コトカラ」「シタガッテ」など根拠や判断を強調する接続節や接続詞を用いて論理性を高める<sup>89</sup>のではなく、ほかのさまざまな形で根拠を示唆する程度にとどめるほうが好まれているようである。

(150) パキスタンのムシャラフ大統領は二日、就任後初めてアフガニスタンの首都カブールを訪れ、暫定行政機構のカルザイ議長と会談した。会談終了後の記者会見で、ムシャラフ大統領はテロ組織壊滅などの課題についてアフガニスタンを全面的に支援すると表明した。会談は二月のカルザイ議長のパキスタン訪問に続くもので、両国関係の転機になるものと期待される。(産経新聞、2002/4/3)

(151) 第二に、今後、国際的な支援に助けられて、道路や建物の復旧作業が急ピッチで進むと思われるが、これはGDPを押し上げる方向に働く。(毎日新聞、2005/1/7)

(152) 実際には、身体的なリスクの高い卵子提供よりも、余剰胚提供の方が多いことが予想され、新たな受精卵を作る必要性が薄く、不必要に不妊治療の範囲を拡大する恐れもあることから、禁止を決めた。(読売新聞、2001/12/22)

上に述べてきた傾向は、可能動詞形式のほうでもほぼ同様であるが、「肯定・否定」の面からみると、違いは出ている。(ラ)レル形式はすべて肯定形となっているのに対し、可能動詞形式は否定形も現れている。なお、可能動詞形自発の否定表現は、すべて「思エル」に集中しているのも注目に値する。前述したように、自発表現が否定形をとることもあるとの指摘があり、いずれも「思ウ」という動詞の例を挙げている。今回の資料に、「～ト思ワレナイ」の用例は出現していないが、「～ト思エナイ」の用例は少ないながら現れており、前述の指摘の妥当性を立証していると言えよう。「思エル」については、5.2.4節でさらに詳しく検討する。

<sup>89</sup> 佐藤・仁科(1997:66)における表3から、工学系学術論文において、「ト考エラレル」を用いて判断を表す場合、根拠明示のタイプⅠの用例数が根拠示唆のタイプⅡの二倍以上となっていることが分かる。

(153) ダンス音楽が響く中、南国風のかやぶき屋根の下で、若者たちが冷えたトロピカルフルーツを味わっている。#神奈川県鎌倉市の由比ガ浜は、古都の海水浴場とは思えない風景だ。(読売新聞、2003/8/8)

以上のデータと分析から、「新聞記事」については次のようなことが結論として言えよう。(ラ)レル形式の自発は、①主節に現れる場合が多数である。②動作主は大体一人称であり、しかもマーカーを伴って文に出現するものは見つかっていない。③非過去テンスが圧倒的に多い。④典型構文「Yガ(モ) V-(r)areru」のほか、「Yト V-(r)areru」構文もたくさん使われている。動詞によって、構文上偏りをもつものがみられる。⑤判断型の自発が主流であり、そのうち根拠提示を伴うものが大多数である。しかし、根拠提示の仕方は、タイプⅠの明示よりタイプⅡの示唆にとどめるほうがはるかに多い。⑥以上の傾向は可能動詞形式においても大体同じであるが、(ラ)レル形式がすべて肯定形をとっているのに対し、可能動詞形式では否定形も用いられているところに、両者は相違をみせている。

### 5.2.2 文学(地の文)

表5-4に示されている「文学(地の文)」のデータを「新聞記事」のデータと比べると、似ているところもあるが、大きな相違点もあることが分かる。「新聞記事」と似ているのは、自発表現が「主節」に来るのが依然として大多数となっていることである。そして大きく異なっているのは、両形式ともに三人称主体と過去テンスが著しく増えてきたことである。

表5-4 「文学(地の文)」における二種類の自発表現形式の統計データ

統計項目 自発形式	Ⅰ		Ⅱ 人称		Ⅲ テンス		Ⅳ		Ⅴ 自発の型			Ⅵ 根拠提示の仕方(判断型)				合計
	主節	接続節	一人称	三人称	過去	非過去	肯定	否定	感情 生起型	想起型	判断型	I a	I b	Ⅱ	Ⅲ	
(ラ)レル	70 (21)	30 (9)	30 (9)	70 (21)	73 (22)	27 (8)	100 (30)	0	43 (13)	30 (9)	27 (8)	13 (1)	0	50 (4)	38 (3)	48 [30]
小計	100 (30)		100 (30)		100 (30)		100 (30)		100 (30)			13 (1)		50 (4)	38 (3)	
可能動詞	69 (19)	41 (13)	34 (11)	66 (21)	75 (24)	25 (8)	78 (25)	22 (7)	25 (8)	0	75 (24)	8 (2)	0	38 (9)	54 (13)	62 [32]
小計	100 (32)		100 (32)		100 (32)		100 (32)		100 (32)			4 (1)		38 (9)	54 (13)	
合計	65 [40]	35 [22]	32 [20]	68 [42]	74 [46]	26 [16]	89 [55]	11 [7]	34 [21]	15 [9]	62 [32]	9 [3]	0	41 [13]	50 [16]	100 [62]
	100 [62]		100 [62]		100 [62]		100 [62]		100 [62]			9 [3]		41 [13]	50 [16]	
												50 [16]			100 [32]	

「新聞記事」において、(ラ) レル形式(全部で28例)は三人称主体文が1例、過去テンスが2例、そして可能動詞形式(全部で6例)は三人称主体文が0例、過去テンスが1例しかない。しかし「文学(地の文)」(全部で30例)においては、両方とも逆転している。三人称主体文は21例もあり(たとえば(154)の「葵」、(155)の「滋子」、(156)の「キシベ」など)、過去テンスは22例もある。

文学には三人称小説というものがある。この三人称小説においては、全知的な存在としていわゆる「神の視点」で作中世界の全般を把握する語り手の存在を介し、普通なら人称制限のかけられる感情や心理活動などの内面描写も、三人称の登場人物について描くことが可能になる。それゆえ、「文学(地の文)」で三人称主体の自発文が増えるのももつともである。また、小説は普通「実際のことであれ、架空のことであれ、すでに起きた過去の出来事として作者によって整理され、構成されて描かれたものである」(守屋1992:98)ため、過去テンスの増加も容易に理解できる。

(154) そんな気分が、どこにも出口を見つけられないまま鬱積していつているように、葵には感じられた。(『対岸の彼女』)

(155) ただでさえ難しいものを、テレビカメラの前でやろうというのは、やや無謀のように滋子は感じている。それに、もうはるか昔のこのように感じられるが、坂木達夫との約束も、心に残っていた。(『模倣犯』)

(156) キシベは、既に四十代後半になっていた。#ペルーに来て、二十数年がかりで築き上げてきた人生のすべてが、足元から崩れていくように思えた。(『新・人間革命』)

ただし、ここで一つ言及に値するものがある。それは、同じ三人称主体の文といっても、2種類に分かれていることが観察できることである。というのは、(154)のように三人称主体が作中の登場人物である場合もあれば、(157)のように語り手が主体となって物語の背景的知識を説明する場合もある。さらに(158)のように、シーンに登場する人物が一人しかなく、その人物を含むシーンの全般を描写する文の場合、主体は紛れもなく語り手であり、読者はその語り手の目と知覚を通して物語の世界を感受し理解している。文学は、このように出来事に直接かかわる人物のほか、語り手という虚構の存在がある点において、他のジャンルと大きな違いがある。

(157) 仏教は、インドから西域を経て中国、朝鮮に入り、六世紀半ばまでに、東漸の終着駅ともいふべき日本に伝えられた。韓・朝鮮半島では、既に四世紀には、仏教が入っており、日本への渡来人のなかにも、仏教徒はかなりいたものと思われる。（『新・人間革命』）

(158) 机の上のポータブルCDプレーヤーからは、ブライアン・アサワの歌うアレクサンドロ・スカラティのカンタータが流れている。#そのゆったりとしたテンポは身体の激しい動きとは異質なように思えるが、彼は音楽の流れにあわせて、微妙に動きをコントロールしている。（『アフターダーク』）

「新聞記事」との二つ目の相違点は、「自発の型」にある。「新聞記事」では判断型が圧倒的主流であるのに対し、「文学（地の文）」では感情生起型と想起型が大幅に増えている。

堀川（1992:172）によると、「感情生起型」の自発は「何らかの感情・気持がひとりでに生じてくる」ことを表し、「～スル気持ニナツテクル」「～スル気持ガ浮カンデクル」という意味を表す。典型的な動詞として、「惜シム・懐カシム・悔ム・恨ム・案ズル・危ブム・気遣ウ・危惧スル・懸念スル・願ウ・念ジル」などが挙げられている。そしてこれらの動詞のほか、堀川は「形容詞（形容動詞）の連用形+思ワレル（感ジラレル）」の形もこの型に含めている。登場人物の心理・感情などの内面描写を重要な一要素としてもつ文学において、こうした感情生起型自発が常用されるのも当然の帰結であろう。

今回の資料には、感情動詞そのものを使った自発表現はいずれも姿を現しておらず、出ているのは後者ばかりで、しかもすべて（13例）「感ジラレル」を使うものである。たとえば「形容詞の連用形+感ジラレル」の（159）と、「形容動詞の連用形+感ジラレル」の（160）が挙げられる。そして（159）と類似した表現として、「名詞ニ+感ジラレル」構文の（161）と、「名詞トモ+思エル」構文の（162）のような用例もある。時間に対する心理的感受を表しているところが（159）と共通しているので、感情生起型自発に該当する。これらの例文からも実感できるように、一人称の感情生起型が自発のプロトタイプとされているのは、思考・判断と異なり、感情が最も人間の意志的制御の範囲からはみ出しているからであろう。

- (159) 植村は手元の資料に目を落としている。その時間が長く感じられた。（『半落ち』）
- (160) この微笑ましい光景に、メンバーは、山本会長という存在が身近に感じられ、嬉しくなった。（『新・人間革命』）
- (161) それは、十秒ほどの出来事であったかもしれないが、彼には、途方もなく長い時間に感じられた。（『新・人間革命』）
- (162) 永遠とも思える時間、祖父はだまって戸口に立っていた。（『ダ・ヴィンチ・コード』）

一方、想起型の自発にあてはまる「感ジラレル」文もある。堀川（1992:179）は「想起型」の自発を「ある対象が、自然に意識にのぼってくる、想起されてくる」ことを表すと定義し、典型的な動詞としては「思イ出ス・思ウ・窺ウ・感ジル・考エル・連想スル・想起スル・思イ起コス・偲ブ」などを挙げている。今回の資料でいえば、(163) (164) がこの型に該当する。「想起型自発には何らかの外的条件が必要」（180頁）という特徴を考えると、特に(164)は典型的な例であると言えよう。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）からダウンロードできる例文の語数に制限があるため、詳しく知るすべもないが、おそらく「着物」と「雪の日」との間に何らかの関連が存在しているであろう。それで着物を早く作ってもらおうと母親にねだろうとするたびに、「雪の日」のことが頭に浮かんできているのであろう。ここの「外的条件」とは、つまり二つの物事の間  
に存在する「関連」だと言えよう。

- (163) 可愛らしい顔立ちの女の子だった。それこそ流行の言葉で言う“小顔”タイプだ。明かりの少ないところだからはっきりとは言えないが、化粧気も無いに等しいように見える。ジーンズに包まれた足はすらりと長く格好良く、スタイルの良さがうかがわれた。（『模倣犯』）
- (164) 約束した着物は、いつになっても縫い上がらなかった。何度もおきみは母親にねだろうと思った。そのたびに、悟郎とおきみを…と吐き捨てた雪の日は思い出された。（『あかね空』）

全部で9例ある想起型自発に、動詞「感ジル」はまた7例という高い割合で登場してい

る。ただしこの動詞は、ほかとすこし異なった性質をもっている。「思イ出ス・連想スル」などの動詞の場合、対象が想起されるのは意識領域でしか起こらない。それに対し「感ジル」の場合、対象が頭で想起される形も、または肉体で感知される形もあり得る。というのは、「感ジル」は精神面における感情・気持ちにも使えるし、物理面における振動・触覚にも使えるからである。精神面での「想起型」はある対象が想起されるのに対し、肉体面での「想起型」はある肉体感覚(実在する対象)が知覚されることになる。たとえば(165)において、主体「ハリー」の意志に関わらず、光の玉が滑ってくるにつれて、杖の振動は自ずと感知されるようになる。(166)における歌の音も、目に見えないけれど振動によって発生しているという意味では確実な存在であり、その音がさらに大きく強力なものになったら、内臓まで共振してくるとかいうことも十分想像できる。よって、肉体的感覚と捉えていいと思われる。また(167)における幹部の「揺れに揺れている」感覚も、確実なものだと捉えられる。

(165) 光の玉がゆっくり、着実にハリーの杖のほうに滑ってくると、ハリーの手の中で杖が身震いするのが感じられた。(『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』)

(166) その歌が、ハリーの周囲にだけではなく、体の中に響くように感じられた…(『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』)

(167) 地元のメンバーは、今日の海は穏やかであると語っていた。しかし、東京から伸一に同行してきた、船に乗り慣れない幹部にとっては、揺れに揺れているように感じられた。(『新・人間革命』)

こうした例は想起型の典型からだいぶずれているように見えるが、「感情生起型が、何らかの「感情」が生じてくる意味を表わすのに対し、想起型は、「対象」そのものが想起される」という両者の違い、および「感情生起型が可能形に置き換えられないのに対し、想起型は、それが可能なことである」(堀川 1992:179)という判断基準によれば、やはり想起型に振り分けたほうが適切だと思われる。ただし、周辺の用法として位置付けてよいであろう。

ところが、その感覚が抽象化すると、特に「～ヨウニ+感ジラレル」構文をとる場合、「～」部分に入る感覚はより感情・気持ちに近い存在となり、可能形にも置き換えにくく

なってくる。すると、こうした「感ジラレル」は想起型ではなく、感情生起型にあてはまる。たとえば(168)では、「透明の分厚い壁」は実存するものではなく、比喩的言い方で心理的距離感・隔絶感を表し、主体の心境を描いている。(169)についても同様であり、二例とも感情生起型自発である。

(168) その答えも、透明の分厚い壁の向こうから響いてくるように感じられた。

(『対岸の彼女』)

(169) それまでにも、日本の名曲といわれる歌はたくさんありましたが、とたんにそれが色あせたように感じられたほどです。(『運命の足音』)

一方、「～ヨウニ+感ジラレル」構文の自発は判断型になるものもある。たとえば(170)の二重下線の部分は、感情でも気持でもなく、また自然に意識にのぼってくる対象でもなく、主体「葵」が現実に対する判断を自分の一種の感じとして語るものである。この文は、「第一に、可能形と置き換えられる」(感じる事ができた)、「第二に、テイルをつけることができる」(感じられていた)という二つの特徴<sup>90</sup>を持っていることから、判断型の自発と判定できる。しかし何よりも、「～ヨウニ」の「～」部分に入っている内容が感情でも知覚対象でもなく、一種の判断であることこそが、決め手だと考える。(171)もこの点においては同様である。(161)と同じく「名詞ニ+自発表現」の構文であるが、(161)が感情生起型であるのに対し、(171)は判断型である。ここから、自発表現の「型」を決めるのは構文ではなく、文の意味であると分かるであろう。

(170) しかしだからといって高校の偏差値が上昇することはなく、そもそもカリキュラム自体が他の学校とは異なり、ずいぶんのんびりしているように葵には感じられた。(『対岸の彼女』)

(171) だが、やはり、新宿歌舞伎町に行っていたというのが真実に違いない。#地名が具体的であることがまずもって決定的なことに思える。(『半落ち』)

「文学(地の文)」に現れる動作主マーカ―および各種構文を整理してみよう。表5-5のとおりである。この表から、「文学(地の文)」では、動作主がマーカ―を伴って文に

<sup>90</sup> 堀川(1992:182)の注6)を参照されたい。

現れる文が増加していることが分かる。「新聞記事」ではほとんどの動作主が一人称の書き手となっており、省略されることが多いのと違い、文学では登場人物が多く、しかも三人称主体が大多数であるため、それを明確に示すことが必要となる場合もそれなりに多くなっていくのが一因であると考えられる。

表 5-5 「文学（地の文）」における動作主マーカと各種構文の出現状況

自発形式 統計項目	(ラ) レル	可能動詞
動作主マーカ	無	無
	Xニハ/モ	Xニハ
	Xニトツテ	Xニトツテ
	Xハ	Xハ
構文	Yガ V-(r)areru	Yト V-eru
	Yヨウニ V-(r)areru	Yヨウニ/フウニ V-eru
	Y(モノ)ト V-(r)areru	Yガ/ハ 名詞ニ V-eru
	Yガ/ハ 名詞ニ V-(r)areru	Yガ 形容動詞の連用形 V-eru
	Yガ/モ 形容詞/形容動詞の連用形 V-(r)areru	V-eru

構文の面では、(ラ)レル形式と可能動詞形式とは異なる様相を呈している。(ラ)レル形式は上にみてきたように、感情生起型や想起型において「形容詞(形容動詞)の連用形+感ジラレル」や「名詞ニ+感ジラレル」などの構文が多用されることによって、構文の種類は「新聞記事」より豊富になってきた。それに、文学表現に求められる表現の豊さも一因として考えられよう。

一方、可能動詞形式は32例あるうち、31例は「思エル」によるものである。しかも判断型自発(24例)が大方であり、それと連動して「Yと V-eru」構文も依然として主流となっている。しかし「新聞記事」で「思エル」文が全部判断型であるのと異なり、「文学(地の文)」では一部(7例)が感情生起型となっている。たとえば(162)のようなものもあるし、また(168)とそっくりのものもある(例(172))。そして表5-5における唯一の対象を欠いた構文「V-eru」は、(173)の「泣ケル」である。テ形などで原因を説明し対象を略す、あるいはもとより対象がない場合もあるところに、「泣ケル」という動詞の特殊性がみられる(この点は、「笑エル」も同じだと思われる。たとえば後掲する「ブログ」の(177))。

(172) 終業式も、ホームルームも、透明の壁の向こうで行われているように葵に

は思えた。（『対岸の彼女』）

- (173) 「排尿の感覚はあるからいやだ。早く知らせるようにするから、やめて」と言って泣く。「よしよし、つけんから泣かなくていいよ」#と、おばあちゃんに優しく言われてよけいに泣けた。（『1 リットルの涙』）

さらに表 5-4 における判断型自発の根拠提示の仕方を見してみる。数が少ないながらも、割合としては「新聞記事」と大して変わらないことがうかがえる。タイプⅡが依然として多く、タイプⅢがそれに次ぐ。「文学（地の文）」では、論理性が主要ファクターではなく、(174) (175) のような完全たる主観的判断も許されるため、タイプⅢが一層出やすくなったのではないかと考えられる。

- (174) それに、私たち日本人にキリスト教的な感覚というか宗教的な感覚がなければ、バッハでもベートーヴェンでも、心から鳴り響く讚美歌にはなりえないのではないか。#私にはそんなふうに思えるのです。（『運命の足音』）

- (175) その間もずっと博士は床に座り込んで動けず、両手はルートを抱いた形のまま硬直していた。# 傷の手当てよりも、博士を正気に戻す方が先決のように思えた。（『博士の愛した数式』）

最後に「肯定・否定」のデータを見ると、これもまた「新聞記事」と同様で、(ラ)レル形がすべて肯定であるのに対し、可能動詞形は否定も使われており、しかも全部「思エル」による判断型の自発である。詳しくは 5.2.4 節に譲る。

以上のデータと分析から、「文学（地の文）」については次のようなことが結論として言えよう。(ラ)レル形式の自発は、①「主節」に来るものが依然として多数である。②三人称小説において、三人称の登場人物についても内面描写ができるため、三人称主体の自発文が著しく増加し、主流となっている。そして、数多くの登場人物のなかで動作主体を特定するためか、マーカーを伴って現れる動作主が増えている。③物語を過去の出来事として描く文学の作法がゆえに、過去テンスが大多数を占めている。④構文「Y ガ (モ) V-(r)areru」と「Y ト V-(r)areru」はまだ多いが、「Y ヨウニ V-(r)areru」や「Y ガ / モ 形容詞 / 形容動詞の連用形 V-(r)areru」「Y ガ / ハ 名詞ニ V-(r)areru」など多様な構文も用いられ、表現の豊かさが求められていると考えられる。⑤登場人物の心理・感

情などの内面描写を重視するという文学の性質から、感情生起型自発が大幅に増え、一位となっている。判断型の自発が一気に減り、文脈において根拠を示唆する(タイプⅡ)か、根拠提示のない完全たる主観的判断(タイプⅢ)が多い。⑥自発の型を除いて、以上の傾向は可能動詞形式においても似たようなものだが、「肯定・否定」の面では、(ラ)レル形式がすべて肯定形であるのに対し、可能動詞形式では否定形も用いられており、「新聞記事」と同じ様相である。

### 5.2.3 ブログ

「ブログ」の自発表現データ数があまりにも少ないため、これで傾向が見出せるとは言い難いが、収集したデータに基づいて考察したい。

表 5-6 「ブログ」における二種類の自発表現形式の統計データ

統計項目 自発形式	I		II 人称		III テンス		IV		V 自発の型			VI 根拠提示の仕方(判断型)				合計
	主節	接続節	一人称	三人称	過去	非過去	肯定	否定	感情生起型	想起型	判断型	Ia	Ib	II	III	
(ラ)レル	60 (6)	40 (4)	100 (10)	0	0	100 (10)	100 (10)	0	10 (1)	0	90 (9)	11 (1)	0	78 (7)	11 (1)	83 [10]
小計	100 (10)		100 (10)		100 (10)		100 (10)		100 (10)			11 (1)		0	11 (1)	
可能動詞	50 (1)	50 (1)	100 (2)	0	50 (1)	50 (1)	100 (2)	0	50 (1)	0	50 (1)	100 (1)	0	0	0	
小計	100 (2)		100 (2)		100 (2)		100 (2)		100 (2)			100 (1)		0	0	17 [2]
合計	58 [7]	42 [5]	100 [12]	0	8 [1]	92 [11]	100 [12]	0	17 [2]	0	83 [10]	20 [2]	0	70 [7]	10 [1]	
	100 [12]		100 [12]		100 [12]		100 [12]		100 [12]			20 [2]		0	10 [1]	

表 5-6 から、「ブログ」の自発表現も接続節に来るものがあることが分かる。そしてテンスの面では「非過去」がほとんどで、人称の面では両形式とも一人称のみであり、既述の主流傾向に合致している。特にすべて一人称であるのは、ブログの性質にも合致した結果だと思われる。つまり、現在幅広い用途に使われるというが、ブログはまだ、個人的な体験や日記、手軽な時事評論や意見表明などの内容が多いため、このように一人称主体に限定される状況となっているであろう。これはさらに表 5-7 に示される動作主マーカ―が皆無という結果につながっている。一人称なら省略されるのが慣例である日本語の特徴を示していると言えよう。

表 5-7 「ブログ」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況

自発形式 統計項目	(ラ) レル		可能動詞	
動作主マーカ―	無	10	無	2
構文	Yが(も) V-(r)areru	5	Yと V-eru	1
	Y(もの)と V-(r)areru	4	V-eru	1
	V-(r)areru	1		

相互に連動している自発の型と構文とをあわせて考察する。表 5-6 に示されるデータから、判断型自発が主流となっていることは一目で分かる。(ラ) レル形式に使われる動詞は「思う」(4例)、「予想スル」(4例)、「望ム」(1例)である。「新聞記事」で言及したように、動詞によって、慣用の構文に偏りをもっており、「思う」は「Yト V-(r)areru」構文が好まれ、「予想スル」は逆に「Yガ V-(r)areru」構文が常用される。よって、表 5-7 に示される(ラ) レル形式の構文もこの二種類に集中している。一方、可能動詞形式では「思エル」によるものがほとんどで、したがって「Yガ(モ) V-eru」構文がなく「Yト V-eru」の判断型自発表現が中核となる。

そして両形式に1例ずつ存在する対象不在の「V-(rar)eru」構文は、感情動詞「悔ム」と「笑ウ」による感情生起型自発である(例(176)(177))。(176)はかなり特殊な使い方、改造すれば「私の部屋のテレビスペースを考えると二十インチが限界だというのは悔やまれる」となろう。しかしそうすると次の文と形式上重複することになり、そのため避けられたのではないかと考えられる。そして(177)は「文学(地の文)」の(173)の「泣ケル」と類似し、対象の代わりにテ形で感情生起の原因を解釈する方法である。このほか、実際の統計は行っていないが、(178)のような連体修飾節や「Yハ 笑エル/泣ケル」構文もよく使われるものと思われる。

(176) しかし悔やまれるか私の部屋のテレビスペースを考えると二十インチが限界なんだよね。どうせテレビ買うなら大画面にしようって思ったけど二十が限界って切ない。(Yahoo!サービス)

(177) 釣れすぎて1時間程で飽きてしまった。#手が生臭くて相当笑える#魚は友人がクーラーボックスに入れて持ち帰る。(Yahoo!サービス)

(178) ほのぼのしてて笑える映画のお勧めは何ですか?王道では、「ホームアローン」「ホームアローン2」ですね。単純に笑える映画なら三谷作品をオスス

めます。「ラジオの時間」や「みんなの家」は結構笑えます。(Yahoo!知恵袋)

しかし、これまでに見てきた感情生起型の自発は、典型的感情動詞で作られたものが非常に少なく、「ブログ」の「悔ム」「笑ウ」、「文学(地の文)」の「泣ク」(後掲する「トーク番組」においても「泣ク」が1例)、「新聞記事」の「心配スル」「急グ」とそれぞれ1例しかない。そこで、これらの感情動詞は、一体どういった形で使われているのかという素朴な疑問が浮かんでくる。堀川(1992:172)に挙げられている代表的な動詞を中心に、感情表現が最も多用されると思われる「文学」を対象に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)のオンライン版「中納言」で検索してみた。それぞれのヒット件数は表5-8のとおりである<sup>91</sup>。

表 5-8 「文学」における感情動詞の出現状況

動詞	数
心配	64
願う	40
念ずる	4
悔やむ	3
懸念	2
案ずる	2
気遣う	2
惜しむ	1
懐かしむ	1
恨む	0
危ぶむ	0
危惧	0
合計	119

表5-8から、これらの感情動詞はもとより使用率が低いと分かる。そのうち用例数の一番多い「心配」について考察してみると、64例のうち、24例の発話文を除けば、地の文は40例ある。この40例に使われている「心配」は、形容動詞(21例)、動詞(12例)、名詞(7例)の順に用例数が多い。具体的に言えば、形容動詞では「心配ソウニ」「心配ソウナ」「心配デタマラナカッタ」など、動詞では「心配シテイタ」「心配シナクテイイ」「心配サセナイヨウニ」など、名詞では「心配ガアル」「心配カラ解放サレ」「親ノ心配

<sup>91</sup> 具体的には、検索対象の範囲設定は「特定目的・ベストセラー(非コア)、文学、2000年代」である。「心配」「懸念」「危惧」の数には名詞としての用例も含まれている。また、発話文の用例も含まれているため、ここは「文学(地の文)」ではなく、「文学」となっている。

ヲヨソニ」など様々な用法が見出せる。使い方はそれぞれであるが、他の感情動詞も大体同じ状況を見せている。このようにほかにいくらかでも感情を表わす表現があるなかで、わざわざ自発性を強調する表現を選んで表すのは大げさと感じられるためか、自発のプロトタイプであるというものの、実際には感情生起型の使用は少ないのが現状である。

想起型の動詞についても考察を付け加えておく。今回の資料で、想起型自発が出現したのは「文学（地の文）」のみで、使われた動詞は「思イ出ス」「窺ウ」の二つである。ここも引き続き上の方法を用い、堀川（1992:179）に挙げられている代表的な動詞からいくつかを選び、それらが「文学」における使用状況を確認してみた。「中納言」で検索した結果は表 5-9 のとおりである。

表 5-9 「文学」における想起動詞の出現状況

動詞	数
思イ出ス	60
窺う	4
伺う	4
思イ起こす	3
連想	1
偲ぶ	1
想起	1
合計	74

表 5-9 から、想起動詞の使用も全体的に非常に少ないことが分かる。さらにその中から、ほかよりはるかに用例数の多い「思イ出ス」を代表に使用状況の詳細を覗いてみる。具体的には、「思イ出シタ」「思イ出シテ」「思イ出シテイル」「思イ出シナガラ」「思イ出ソウトスル」など多様な使い方が 53 例、使役形「思イ出サセル」「思イ出サセテクレル」などが 3 例、可能形「思イ出セナイ（ナカッタ）」が 2 例、自発形「思イ出サレタ」が 1 例、あと「思イ出シ玉」という連用形で名詞を構成するものが 1 例という具合である。使われるとしても、使役・可能・自発などの意味を付加せず、動詞そのものとしての使い方が主流であると言える。

こうして感情動詞も想起動詞も元来使用頻度が低く、くわえて感情や想起を表す言い方が多種多様なのでわざわざ自発を使う必要性も薄いため、自発表現の使用における感情生起型と想起型の低出現率が観察されたわけである。

最後に表 5-6 に示される判断型自発の根拠提示の仕方と「肯定・否定」をみると、依然として根拠示唆のタイプⅡが中心となっており、否定形は可能動詞形式の「思エル」にの

み使われている有様である。とくに特徴といえるところがないので、詳しい考察を略す。

以上のデータと分析から、「ブログ」については次のようなことが結論として言えよう。

(ラ) レル形式の自発は、①「主節」と「接続節」の両方に現れている。②すべて一人称主体となっており、動作主も一切文中に顕在せず、個人的内容が多いという「ブログ」の特徴の現れとして捉えられる。③すべて非過去テンスである。④動詞による構文上の偏りに関連し、典型構文「Y ガ(モ) V-(r)areru」と、判断型に多用される「Y ト V-(r)areru」構文の二種類が依然として中核である。⑤「新聞記事」と同様に、判断型自発が圧倒的に優位を占め、根拠提示の仕方もタイプⅡが大多数である。⑥以上の傾向は可能動詞形式においても大体同じであるが、「肯定・否定」の面では、また「新聞記事」および「文学(地の文)」と同様に、(ラ) レル形式がすべて肯定形であるのに対し、可能動詞形式では否定形も用いられている。

### 5.2.4 音声言語の3つのジャンル

前掲の表5-1に示されているとおり、音声言語の3つのジャンルにおける自発表現の数がいずれもきわめて少ない。そのため、文字言語のジャンルのようにそれぞれ一つの節を設けて考察することはせず、3つのジャンルを合わせて検討することにする。ただし、「テレビニュース」のデータや(ラ) レル形式の自発表現の数はゼロなので、以下でデータの提示はない。

「テレビドラマ」と「トーク番組」における可能動詞形式の自発表現の統計データは、表5-10のとおりである。

表5-10 「テレビドラマ」と「トーク番組」における可能動詞形式の自発表現の統計データ

統計項目 自発形式	I		II 人称		III テンス		IV		V 自発の型			VI 根拠提示の仕方(判断型)			
	主節	接続節	一人称	三人称	過去	非過去	肯定	否定	感情 生起型	想起型	判断型	Ia	Ib	II	III
テレビドラマ	100 (4)	0	100 (4)	0	0	100 (4)	0	100 (4)	0	0	100 (4)	0	0	75 (3)	25 (1)
合計	100 (4)		100 (4)		100 (4)		100 (4)		100 (4)			60 (3)		100 (4)	
トーク番組	100 (2)	0	100 (2)	0	50 (1)	50 (1)	50 (1)	50 (1)	50 (1)	0	50 (1)	0	0	100 (1)	0
合計	100 (2)		100 (2)		100 (2)		100 (2)		100 (2)			100 (1)		100 (1)	

表5-10をみると、「テレビドラマ」と「トーク番組」に出てきた自発表現がすべて主節かつ一人称主体であり、1例を除くと全部非過去テンスであると分かる。データが少な

すぎてこれが話し言葉の傾向とは言いがたいが、ともかく自発表現の主流的用法に一致している結果である。用例数が少ないのですべての例文を列挙する。

(179) 中島さんは、とても優秀なテラーですよ。逆に、中島さん以外は、皆さん若手の方ばかりで、仕事のレベルがこう、明らかに…〈中略〉本当に中島さんがあんな単純な事務ミスをするんでしょうか。私にはそう思えないんですけど。(『花咲』第1話)

(180) —100万円は返してもらえたって言ってたじゃないか。それに、受け渡しの現場が防犯カメラに写ってたし。 —そうなんですけど。でも私は、三上社長が嘘をついてたとは思えません。(『花咲』第1話)

(181) いやしかし、このままで終わるとは思えませんよね。いろいろ聞いてるんですよ、青田の悪い噂。はるな銀行に業務改善命令を出した時には、銀行側の検査妨害を捏造したって話もありますし。(『花咲』第5話)

(182) ていうかきれいだし。飲んだ翌朝とは思えない、この部屋。(『ラスフレ』第3話)

(183) —なんかね、あのう、デジタルになってるからかね、あなたの声が遅れて聞こえるの。 —あああ、2秒ぐらい遅れるんですよ。 —地球の向こうのほうから電話もらってるみたいよ。そんなにね、東京の中にいるとは思えない。(『テレフォン』黒柳徹子)

(184) まあ、出会えた、会いたかった人に会えた喜びで泣いてるんですけど最初は、で、それよりも、役者として、悔しい思いとか、忸怩たる思いが、言わなくても全部分かってる。そこに泣けちゃったんですよ。(『徹子』三上博史)

以上の例文における動作主マーカ―および構文の出現状況は、表5-11のようにまとめられる。すべて一人称であるものの、動作主がマーカ―を伴って現れる用例が2つある。すこし異例のようにみえるが、それなりの理由があると思われる。この2つの用例はともに、聞き手の意見と衝突や食い違いが生じたところに、きちんと自分の見解を主張するという場面における発話である。ゆえに「私(二)ハ」をはっきりと表に出すのも容易に納得できよう。

構文の面では、1つの「泣ケル」による用例以外はすべて「思エル」によるものである

ため、「Yト V-eru」構文が大部分を占めている。そして「トーク番組」における唯一の「Yニ V-eru」構文（例（184））は、「名詞+ニ」で原因を表す文型をとる動詞「泣ク」自体の用法からくるものであり、自発とは関係ないと言える。

表 5-11 「テレビドラマ」と「トーク番組」における動作主マーカ―と各種構文の出現状況

自発形式 統計項目	テレビドラマ		トーク番組	
動作主マーカ―	無	2	無	2
	Xニハ	1		
	Xハ	1		
構文	Yト V-eru	4	Yト V-eru	1
			Yニ V-eru	1

実のところ構文だけでなく、「肯定・否定」と「自発の型」も動詞に連動してそれぞれ分けられている。すなわち、「泣ケル」自発文は肯定形・感情生起型で、「思エル」自発文はすべて否定形・判断型となっている。しかしこの連動はとくに特徴とは言えず、データの少なさに起因したただの偶然と思われる。

可能動詞形式の自発における「思エル」の高い出現率は、音声言語に限らず、これまで見てきた文字言語のジャンルにも共通して見られている。六つのジャンルにおける可能動詞形式の自発表現に使われる動詞の内訳をまとめると、表 5-12 のようになる（数字は用例数）。自発文が「話し言葉で用いられることはごく限られている」と渋谷（2002:29）が指摘しているが、それは頻度の面だけでなく、動詞の面でも言えそうである。

表 5-12 六つのジャンルにおける可能動詞形式の自発表現に使われる動詞の内訳

	文字言語			音声言語		
	新聞記事	文学（地の文）	ブログ	テレビニュース	テレビドラマ	トーク番組
思エル	6	31	1	0	4	1
ほか	0	1（泣ケル）	1（笑エル）	0	0	1（泣ケル）
合計	6	32	2	0	4	2

さらに共通点を見出すと、文字言語のジャンルにおいても、否定形の自発はすべて「思エル」文に限られており、「～ト」引用構文をとって判断型となっている。しかし比率から言うと、文字言語ではやはり肯定の方が多く（肯定/否定の数といえば、「新聞記事」では 5/1、「文学（地の文）」では 24/7、「ブログ」では 1/0 となっている）、ここのよう

に「思エル」自発文がすべて否定となっているほどではない。かといって、音声言語で肯定形の「～ト思エル」文や「～ト思ワレル」文が現れていないのは、ただ肯定の場合は、直接「～ト思ウ」を使うのが普通であるからという単純な理由による可能性も考えられよう。

ただし、否定形の自発について、もう一つ検討しておきたいことがある。(179)から(183)の「～ト思エナイ」は、深く考えることなく即座に生じてくる思考や判断を率直に語るという意味では自発を表している。が、否定になった自発表現が不可能という意味に近づくと通常言われているように、この「～ト思エナイ」も、可能のニュアンスを若干帯びているのではなかろうか。安達(1995:127-128)は副詞「トテモ」との共起が、「思エルが少なくとも含意としては可能の意味を持っていることの根拠と考えられる」とし、そして副詞「ドウシテモ」との共起が「思エル」の「心情可能に近い位置づけ」の手がかりであると議論している。そのほか、「あれこれ考えても」という主体の意図性を示唆する助詞「～トシカ」を伴う場合も、可能の意味がただちに強まってくると言えよう<sup>92</sup>。この現象は書き言葉においても同様であり、それぞれ次のような例が挙げられる。

(185) 本当に見事なプロポーション。もう絵に描いたようなプロポーションでいらしたんですど、お二人のお子さんのお母様とはとても思えません。(『徹子』篠原涼子)

(186) だったら、明日も来ませんか？やっぱり私、中島さんがミスをしたとはどうしても思えないんですよ。(『花咲』第1話)

(187) 何があっても、おふみは栄太郎を京やの跡取りに据える気だとしか、おきみには思えなかった。(「文学(地の文)」、『あかね空』)

このように否定の「思エナイ」は、伴う副詞や助詞の有無一つでどちらにもなりえて、可能と自発の境界線上に存在する曖昧な表現であると言えよう。

さらに各ジャンルを合わせて、自発の「思エル」(全部で43例)と「思ワレル」(全部で18例)の比較もしておく。「自発の型」と「構文」の二方面からみていきたい。「思ワレル」がすべて判断型であるのに対し、「思エル」は判断型のほか、感情生起型にも使われている(たとえば前掲の(162)(172))。そして構文の面では、「思ワレル」がす

<sup>92</sup> ただし「～トシカ思エナイ」の場合、形式上は否定形であるが、意味上は肯定となっている。

べて「～ト」構文をとるのに対し、「思エル」は「～ト」構文のほか、「～ヨウニ」「Yガ/ハ 名詞ニ V-eru」「Yガ 形容動詞の連用形 V-eru」などの構文も見られている。

「思ワレル」は「～ト思ワレル」という単一の型に定着しているように見えるが、「思エル」はまだ多様な表現や形式に対応しているようである。けれどそうは言うものの、6つのジャンルにおける「思エル」の使用状況の内訳を見ると、やはり判断型(36例)と「～ト」構文(25例)が主流となっている。これは「思ウ」という動詞自体の使用上の習慣によるところが大きいかと考えられる。安達(1995:130)は「思エル」と「思ワレル」の違いの原因を、「両形式が意味変化(意味・用法の分担の定着)の過程にあるということ」に求めているが、その可能性もあるであろう。

最後に「根拠提示の仕方」をみる。これまで見てきた文字言語のジャンルの主流と同様に、前後の文脈などによる根拠提示のタイプⅡが優位となっている。(182)の判断は文面から根拠が直接読めないが、ドラマの中では「きれいに片付いている部屋」のシーンによって支えられている。これは音声だけでなく画面もあわせ持つ「テレビドラマ」に特有の文脈支持の仕方と言えよう。

以上のデータと分析から、「テレビドラマ」と「トーク番組」については次のようなことが結論として言えよう。(ラ)レル形式の自発は完全に姿を消し、可能動詞形式の自発も非常に少ない。わずかにある可能動詞形式の自発は、①すべて「主節」に現れている。②すべて一人称主体となっているが、聞き手と意見の衝突や食い違いが生じた場合、自分の主張を強めるためか、マーカーを伴って「私(ニ)ハ」が文中に現れてくる。③非過去テンスが殆どである。④「思エル」の多用に関連し、「Yト V-eru」構文が主流である。⑤「思エル」の多用によって、判断型自発が優位で、根拠提示の仕方でも文字言語の主流と同様に、タイプⅡが多数である。⑥「泣ケル」自発文の1文が肯定形で、「思エル」自発文はすべて否定形となっている。話し言葉において、肯定の場合は直接「～ト思ウ」で言い表すのが普通であるためかと考えられる。

### 5.3 本章のまとめ

全体的にみれば、今回の資料に現れた(ラ)レル形式と可能動詞形式の自発表現は、いずれのジャンルにおいても数が非常に少ない。とくに「テレビニュース」は一例も見つかっておらず、「テレビドラマ」と「トーク番組」も可能動詞形式しか見出せていない。そして両形式とも、使われている動詞はきわめて限られており、とくに可能動詞形式は「思

エル」「笑エル」「泣ケル」の3つしか観察されていない。このように用例数が少ないので、項目ごとに傾向や特徴を探り出すには十分とは言えないが、本研究で観察したことをまとめると以下ようになる。

①どのジャンルでも、主節に現れる自発表現のほうが多数である。

②「文学（地の文）」のほか、どのジャンルも、一人称主体のほうが主流であり、それがマーカーを伴って文に出現するのは稀にしかない。「文学（地の文）」は、三人称小説という特殊な表現技法がゆえに、三人称動作主のほうが一転して主流となる。そして、数多くの登場人物のなかで動作主体を特定するためか、マーカーを伴って現れる動作主は少ないながら増えている。

③「文学（地の文）」のほか、どのジャンルも、非過去テンスが圧倒的に多い。「文学（地の文）」は、物語を過去の出来事として描く文学の作法がゆえに、割合が逆転して、過去テンスが大多数を占めている。

④構文の面では、典型構文「Yガ(モ) V-(r)areru」のほか、判断型自発に多用される「Yト V-(r)areru」構文もたくさん使われている。動詞によって、慣用の構文に偏りがみられる。たとえば、「思ウ」(「思ワレル」と「思エル」両方を含む)は「Yト V-(rar)eru」構文が好まれるが、「予想スル」は「Yガ V-(r)areru」構文が常用される。なお、「文学（地の文）」ではほかに、「Yヨウニ V-(r)areru」や「Yガ/モ 形容詞/形容動詞の連用形 V-(r)areru」「Yガ/ハ 名詞ニ V-(r)areru」など多様な構文も用いられ、表現の豊かさが求められていると考えられる。

⑤自発の型の面では、「文学（地の文）」のほか、どのジャンルも、判断型の自発が主流である。そしてその根拠提示の仕方は、根拠示唆のタイプⅡが優位をとっている。「文学（地の文）」では、登場人物の心理・感情などの内面描写を重視するというそれ自体の性質から、感情生起型自発が大幅に増え、第一位となっている。そして、論理性が主要ファクターではないため、根拠提示を伴わない完全たる主観的判断のタイプⅢが多い。

⑥「肯定・否定」の面では、(ラ)レル形式がすべて肯定形であるのに対し、可能動詞形式では否定形も用いられており、しかもそれはすべて動詞「思エル」に限定されている。そして否定の「～ト思エナイ」については、伴う副詞(「トテモ」「ドウシテモ」など)や助詞(「～トシカ」など)の有無一つで自発にも可能にもなりえて、両者の境界線上に存在する曖昧な表現であると指摘できる。

## 第6章 敬語

本章では、先行研究を紹介したうえで、敬語表現について本論文での定義を行い、本論文でとる分類基準を述べ、扱う敬語表現の形式を定める。そして、各ジャンルの敬語表現の統計データをもとに、各ジャンルの特徴と相違を見出し、その原因について分析する。

### 6.1 敬語表現の定義、分類および形式

助動詞（ラ）レルの尊敬用法を含めた敬語は、（ラ）レルの他の三つの用法、つまり受身・可能・自発と比べると、日本語においてより特殊な地位を占めているようである。その特殊性は、国語政策として国語審議会（1952）、国語審議会（2000）を経て、文化審議会（2007）が文化庁によって出されていることから垣間見える<sup>93</sup>。これは、「敬語は言語の運用規則の一面をもつのみならず、日本人の意識や社会生活様式の表れである」（浅田 2014:264）り、いわば日本文化の根本にかかわるものであるからと言えよう。その一方で、定義や分類、形式の面では、逆に受身・可能・自発表現において諸説があり定まらない部分や連続的で分別しがたい部分が見られる状況とは異なり、一連の政策や指針によって、敬語表現はかなり整理されている状況にある。

本節では、助動詞（ラ）レルの尊敬用法を含めた敬語表現にまつわる先行研究を紹介したうえで、「敬語表現」およびその分類、形式について定義を行う。

#### 6.1.1 敬語表現の定義および分類

敬語表現は、「待遇表現」の下位分類として取り扱われるのが一般的である。小池ほか編（2002）によると、待遇表現とは、「「人間関係」や「場」の認識に基づいて使い分けられる表現」となる。さらに詳しく定義すると、つまり「ある「表現意図」をもった「表現主体」（話し手・書き手）が、「自分」・「相手」・「話題の人物」相互の「人間関係」や、表現の「場」の状況を認識し、「表現形態」（話し言葉・書き言葉）を考慮したうえで、その「表現意図」を叶えるために、適切な「題材」「内容」を選択し、適切な言葉を用いることによって文章・談話を構成し、「媒材化」（音声化・文字化）する、といった

<sup>93</sup> 敬語の重要性について、「敬語の指針」は「第1章 敬語についての考え方」の「第1 基本的な認識」において述べている。

一連の「表現行為」である」（238頁）。こうした定義に基づけば、敬語は「待遇表現の中で「上位」の「相手」や「話題の人物」、改まった「場」だと認識したときに用いられる言葉のことであり、待遇表現において用いられる言葉の一種だと考えられることになる」<sup>94</sup>（239頁）。

また菊地（2010:16-17）は「表現」という語が「広い意味では、言語によらないもの（非言語行動／非言語表現）も指すことがある」ことから、より広い意味の「待遇行動」という構図に、「敬語」を組み入れている。具体的には、まず待遇行動を「非言語行動」と「言語行動」に大別する。そして「言語行動」をさらに「内容が問題である場合」<sup>95</sup>と「述べ方が問題である場合」<sup>96</sup>に分け、後者を「待遇表現」と呼び、またそのうちの「敬意や丁寧さを表すもの」を「敬語」と呼んでいる。小池ほか編（2002）の定義とは、些細な用語の違いや「非言語行動」をいっしょに取り扱うか否かの違いがあるが、基本的に同様なことを述べている。

なお、限定的に敬語のみを対象とする前述の「敬語の指針」は、「敬語は、話し手あるいは書き手（中略）がその場の人間関係や状況をどのようにとらえているかを表現するものである」（5頁）と記述しており、一致した捉え方を示している。本論文もこうした定義に従うことにする。

敬語の分類について簡単に述べておく。日高（1995:677）によると、敬語の分類は「山田孝雄（1924）の「人称」による分類、松下大三郎（1928）の「敬意の対象」による分類を経て、話題の人物に対する敬意の表現（詞の敬語）と聞き手に対する敬意の表現（辞の敬語）とを区別する時枝誠記（1941）に至り、さらに今日では卑罵表現等をも含めた待遇表現一般の中で行われるようになってきている（南不二男（1974）、大石初太郎（1976）等）」。しかし現在のところ、これらの分類法よりも、「敬語の指針」によって提示されている五分類のほうが、国語政策という形で建議されているため、それなりのオーソリティと影響力を持っていると思われる。それを基準にする研究や指導書も多く（日高 1995、菊地 1997, 2010、森山 2003、佐藤ほか 2009 など）、日本の学校教育や中国における日

<sup>94</sup> 「敬語」と並んで、ほかには「通常語」と「軽卑語」がある。詳しくは『日本語表現・文型事典』239-240頁を参照されたい。

<sup>95</sup> 「内容が問題である場合」とは、たとえば人に物を贈るときに「つまらない物ですが」と言うか、「ありがたく思え」と言うかの違いを指す（菊地 2010:16）。

<sup>96</sup> 「述べ方が問題である場合」とは、同じ内容を述べるに、たとえば「お客様がいらっしゃった」と言うか、「客が来た」と言うか、それとも「客の野郎が来やがった」と言うかの違いを指す（菊地 2010:16）。

本語教育においても一般的に採用されており、日本語母語話者にとっても学習者にとってもよほど馴染み深い。よって、本論文もこの五分類に従うことにする。次のとおりである（「敬語の指針」13頁）。

- 1 尊敬語（「いらっしゃる・おっしゃる」型）
- 2 謙讓語Ⅰ（「伺う・申し上げる」型）
- 3 謙讓語Ⅱ（丁重語）（「参る・申す」型）
- 4 丁寧語（「です・ます」型）
- 5 美化語（「お酒・お料理」型）

これらの分類は、中心となる動詞のほか、名詞や形容詞、形容動詞などが入っているものもあるが、本論文は助動詞（ラ）レルの尊敬用法を主軸としているので、考察対象を「尊敬語」の動詞に絞ることにする。次節ではこの「尊敬語」を中心に、動詞の表現形式について述べる。

### 6.1.2 尊敬語の動詞の表現形式

尊敬語の動詞の表現形式は、交替形式と添加形式<sup>97</sup>に分けられ、おもに以下のようものが挙げられる。

#### A. 交替形式（括弧内は通常語）

くださる（くれる）、いらっしゃる（ある、いる、来る、行く）、おっしゃる（言う）、召し上がる・上がる（飲食する）、見える（来る）、なさる（する）

#### B. 添加形式<sup>98</sup>

助動詞（ラ）レル：読まれる、始められる

オ／ゴ～ニナル：お話しになる、ご出席になる

<sup>97</sup> 「交替形式」と「添加形式」は奥山（1976:76-80）の用語である。菊地（1997:464）はそれぞれ「特定形」と「一般形」という異なった言い方で呼んでいるが、内容としては完全に同じである。そして「添加形式」をさらに「その語の上に添える形式」「その語の下に添える形式」「その語の上と下に添える形式」の三種に細分する研究もある（西田 1977:32）が、本論文はそれらを「添加形式」と括弧することにする。

<sup>98</sup> 「敬語の指針」（25頁）に準じて、「ご覧／お出で+になる／くださる／いただく／だ（です）」は、それぞれの添加形式の変則的な形として扱う。

オ／ゴ～ナサル：お話しなさる、ご出席なさる

～ナサル：出席なさる

オ／ゴ～ダ（デス）：お話しだ（です）、ご出席だ（です）

オ／ゴ～クダサル：お話しくださる、ご出席くださる

～テクダサル：話してくださる、出席してくださる

本論文は（ラ）レル形式を主軸としているが、それと同じ機能（主語である動作主・行為者を高める）をもつ形式との比較も必要であると考え。しかし、あまり考察対象を広げては焦点がぼやけてしまう恐れもある。従って本論文は比較範囲を最小限に絞り、（ラ）レル形式を含める添加形式の尊敬語のみを対象とする<sup>99</sup>。

ただし、上述の添加形式のうち、「オ／ゴ～クダサル」と「～テクダサル」は一般の尊敬語の機能に加え、「その行為者から恩恵が与えられる」という意味もあわせて表現している。この恩恵の意味を受け手のほうから表す敬語は、「オ／ゴ～イタダク」と「～テイタダク」（謙譲語Ⅰに属する）である。「クダサル」と「イタダク」は、主語の取り方や視点の置き方が異なるが、結果的にはほぼ同じ内容を述べており、恩恵の与え手（＝行為者）が高められるところでも一致している。たとえば次の二文は、同じく行為者（Aさん）を高めることになる。

(188) Aさんが私を空港までお送りくださった／送ってくださった。

＝私がAさんに空港までお送りいただいた／送っていただいた。

日本語では、ある行為を恩恵的に捉える場合、また「相手の行為が実際には自分の恩恵にならない場合にも拡張して」（菊地 1997:198）、こうした表現が多用されており、考察に値する。そして、「助詞の使い方や敬語の種類が違うが」、同一の出来事を異なった角度から述べる「オ／ゴ～クダサル」「～テクダサル」と「オ／ゴ～イタダク」「～テイタダク」は「事実上同内容で、敬度も同程度」<sup>100</sup>（菊地 1997:216）であるため、比較する価値があると考え、少し異質ながらも今回の考察対象に入れることにする。

<sup>99</sup> 「ご覧になる」「お出でになる」は「敬語の指針」（25頁）に倣って、変則的な「オ／ゴ～ニナル」形式として扱う。「ご覧くださる」「お出でいただく」などもこれに準じた扱い方をする。

<sup>100</sup> ここで敬度が「同程度」というのは、もちろん「オ／ゴ～クダサル」と「オ／ゴ～イタダク」、そして「～テクダサル」と「～テイタダク」が同じ敬度ということである。

要するに、本論文が考察対象とする添加形式の敬語の共通点は、「添加形式を除いた残りの本動詞の動作主・行為者を高める機能を持つ」ところにあるわけである。

本節の最後に、敬語の敬度、つまり敬意の度合いという属性について述べておく。菊地(1997:146)によると、「オ／ゴ～ニナル」形式は「ほかの多くの敬語と同レベルの、敬語としてはごく普通レベルの敬度なのに対し」、(ラ)レル形式は「それらに比べてかなり敬度が軽い」<sup>101</sup>。なお、(ラ)レルを除いた諸形式のうち、「～ナサル」の敬度がほかよりやや軽いとの指摘もある(菊地 1997:182)。また、「クダサル」型と「イタダク」型は恩恵の授受という意味を合わせ持っているので、ほかの形式と比較することはないが、内部で比べれば、「オ／ゴ～クダサル／イタダク」のほうが「～テクダサル／イタダク」より敬度が高い(菊地 1997:226、佐藤ほか 2009:12)。よって、本論文が扱う諸形式の敬語の敬度は、以下の不等式で示すことができる。

$$\begin{aligned} \text{オ／ゴ～ニナル} &= \text{オ／ゴ～ナサル} = \text{オ／ゴ～ダ (デス)} > \sim\text{ナサル} > \\ &\text{助動詞 (ラ) レル} \\ \text{オ／ゴ～クダサル} &= \text{オ／ゴ～イタダク} > \sim\text{テクダサル} = \sim\text{テイタダク} \end{aligned}$$

主要考察対象の(ラ)レル形式とより便利に比較するため、以上の諸形式を表6-1のようにグループ分けする。「クダサル」型と「イタダク」型は尊敬・謙遜の意味合いのほか、恩恵的行為の授受を表す意味もあわせ持っているので、特別に「恩恵」というグループに入れる<sup>102</sup>。後述するが、「オ／ゴ～クダサル」は「トーク番組」における1例以外はすべて依頼表現形「オ／ゴ～クダサイ」で使われているため、取り出して単独に「依頼」というグループを作り、また表中でも直接「オ／ゴ～クダサイ」と表記したほうが都合がよい。残りの諸形式は敬度によって分けて、最も敬度の低い(ラ)レル形式を「低敬度」に、ほかを「高敬度」にそれぞれ入れる。

以下グループで言うときには、それぞれを「低敬度敬語」「高敬度敬語」「依頼敬語」

<sup>101</sup> (ラ)レル尊敬語の敬度について、菊地(1997:150)は「尊敬用法の「(ら)る」は平安時代になってからあらわれ、大鏡や今昔物語集あたりから目立つようになる。当初から敬度はそれほど高くなかったと見られ」と指摘している。

<sup>102</sup> 「オ／ゴ～クダサル／イタダク」と「～テクダサル／イタダク」は、同じ書き手が異なる対象に使うものだと、そこに敬度の違いによる使い方の違いが認められるかもしれないが、そもそも書き手自体が異なる場合、単に言葉遣いの習慣の相違かもしれないので、比較する意味はあまりない。従って、同じ「恩恵」グループに入れて差し支えないと思う。

「恩恵敬語」と呼ぶことにする。ただ、単独のグループに分けられたとしても、「相手に何かをやってもらうことが、依頼側すなわち話し手にとっては恩恵になる」ため、「依頼敬語」は「恩恵敬語」と切り離せない関係にあると言えよう。

表 6-1 統計に使う敬語形式のグループ分け

グループ	敬語形式
低敬度	(ラ) レル
高敬度	オ/ゴ～ニナル、オ/ゴ～ナサル、オ/ゴ～ダ (デス) ; ~ナサル
依頼	オ/ゴ～クダサイ
恩恵	オ/ゴ～イタダク、～テクダサル、～テイタダク

## 6.2 各ジャンルにおける敬語表現の集計結果およびその分析

本節は、「新聞記事」「文学（地の文）」「ブログ」「テレビニュース」「テレビドラマ」「トーク番組」という六つのジャンルから、尊敬語の添加形式「助動詞（ラ）レル」「オ/ゴ～ニナル」「オ/ゴ～ナサル」「～ナサル」「オ/ゴ～ダ（デス）」「オ/ゴ～クダサル」「～テクダサル」および謙譲語 I の添加形式「オ/ゴ～イタダク」と「～テイタダク」を対象に抽出した敬語文を資料に、統計と分析を行う。六つのジャンルにおける各敬語表現形式の統計データは表 6-2 のとおりである（括弧（ ）の中は用例数で、外はパーセンテージ。以下同）。

表 6-2 六つのジャンルにおける各敬語表現形式の統計データ<sup>103</sup>

敬語形式		ジャンル	文字言語				音声言語				
			新聞記事	文学（地の文）	ブログ	テレビニュース	テレビドラマ	トーク番組			
低敬度	(ラ) レル		43 (9)	6 (1)	24 (20)	100 (3)	21 (16)	14 (17)			
尊敬語	高敬度	オ/ゴ～ニナル	0	6 (1)	6 (5)	0	9 (7)	20 (24)			
	オ/ゴ～ナサル	0	0	0	0	0	2 (2)				
	～ナサル	0	0	1 (1)	0	3 (2)	6 (7)	28 (34)			
	オ/ゴ～ダ (デス)	10 (2)	11 (2)	4 (3)	0	10 (8)	1 (1)				
依頼	オ/ゴ～クダサイ	38 (8)	6 (1)	17 (14)	0	26 (20)	10 (12)				
謙譲語	恩恵	～テクダサル	0	39 (7)	12 (10)	0	10 (8)	29 (36)			
	オ/ゴ～イタダク	0	10 (2)	22 (4)	7 (6)	49 (41)	0	6 (5)	32 (25)	2 (3)	49 (60)
	～テイタダク	10 (2)	11 (2)	30 (25)	0	15 (12)	17 (21)				
合計			100 (21)	100 (18)	100 (84)	100 (3)	100 (78)	100 (123)			

前述したように、敬語は「人間関係」や「場」の認識に基づいて使い分けられる表現

<sup>103</sup> 既述したように、六つのジャンルにおける依頼敬語のうち、「オ/ゴ～クダサイ」という依頼表現形をとらない用例は「トーク番組」の1例のみである。

のうち、表現主体が「上位」の「相手」や「話題の人物」（以下は「敬語対象」と呼ぶ）、改まった「場」だと認識したときに用いられる言葉である。以下の分析は、この二方面に主眼を置いて進めていきたい。

なお、本論に入る前、敬語を扱うときに一つの重要な概念である「人称」について、本論文での扱い方を述べておきたい。菊地（1997:117-119）によると、普通で言う一人称・二人称・三人称は、敬語を考える場合に使いにくい面をもっている。ひと言三人称といっても、話し手側の領域の人物なら、一人称並みと見なすべきであり、また相手側の領域の人物なら、事実上二人称並みと見たほうがよい。そして「その場でその会話の聞こえる範囲にいる人やその家族などを話題とする場合は、やはり二人称者やその家族に準じて、高められやすい」。このように、普通の意味での三人称を会話双方との関係によって分けたほうが、敬語を考える上では好都合なのである。菊地はこれを「敬語的人称」と呼び、図6-1<sup>104</sup>のようにまとめている。

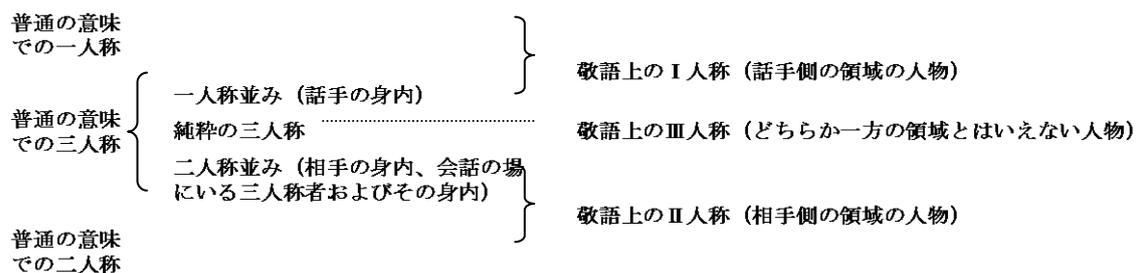


図6-1 菊地（1997:119）の提唱する「敬語的人称」

これは話し言葉を手本にした分け方であるが、書き言葉も基本的に類似していると思われる。本論文はこの「敬語的人称」に従い、以下は「敬語上のⅠ・Ⅱ・Ⅲ人称」あるいはその略の「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ人称」をもって論を進めていく。

### 6.2.1 新聞記事

表6-2における「新聞記事」のデータを見ると、まず数と種類の少なさに目を引かれる。21文しかなく、そのうち、（ラ）レル形式が9文、「オ／ゴ〜クダサイ」形式が8文の

<sup>104</sup> この図において、菊地（1997:119）は「会話の場にいる三人称者およびその身内」を「二人称並み」には含めていない。しかし、前文の記述から、それを含めたほうがより妥当であると考え、図6-1のようにしているわけである。

ほか、「オ／ゴ～ダ（デス）」と「～テイタダク」が2文ずつ現れている。

奥山（1976:226-227）によると、書き言葉で扱う敬語は、①「文章の読み手に対する敬語」（つまりⅡ人称敬語）、②「文章に登場する人に対する敬語」（つまりⅢ人称敬語<sup>105</sup>）、③「文章を品よくするための敬語」という三種類に分けられる。新聞では、ニュース報道が主たる内容であるのは言うまでもない。そしてニュース報道は、社会、政治、経済、国際、スポーツなどの分野における出来事を客観的に伝えるもので、事実そのものが最も重要であり、相手（新聞の読者）を意識しないのが普通である。したがって、報道記事で①と③のような敬語はまず使われまい。また②に関しては、「一般の新聞では、皇室以外の人びとに対して敬語動詞などは使わない」（奥山 1976:260）ため、いわゆる皇室敬語を除けば、文章に登場する人に敬語が用いられないのも通例となっているようである。本論文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されている全国紙（コア）を検索対象に、2000年代という期間設定をしているが、敬語が使われた皇室報道は一例も出てこなかった。「天皇」をキーワードに検索した結果も似たようなものなので、皇室報道が全面的に収録されていない可能性もある。

しかし、新聞記事は敬語とまったく無縁とも言えない。ニュース報道のほか、読者への知らせや案内など相手が意識された内容と、評論や読者投書など主観的で言語使用もそれほど制限されない内容もあるため、敬語の余地は残っている。「敬語対象」による統計データは表6-3のとおりである。「新聞記事」では、Ⅲ人称敬語とⅡ人称敬語はほぼ半々であるが、Ⅲ人称敬語のほうがすこし多い。

表 6-3 「新聞記事」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ

形式 敬語対象	尊敬語					謙譲語				合計
	低敬度	高敬度				依頼	恩恵			
	(ラ)レル	オ／ゴ～ニナル	オ／ゴ～ナナル	～ナサル	オ／ゴ～ダ(デス)	オ／ゴ～クダサイ	～テクダサル	オ／ゴ～イタダク	～テイタダク	
Ⅲ人称	38 (8)	0	0	0	10 (2)	0	0	0	10 (2)	57 (12)
Ⅱ人称	5 (1)	0	0	0	0	33 (7)	0	0	0	38 (8)
直接引用文中のⅡ人称	0	0	0	0	0	5 (1)	0	0	0	5 (1)
小計	43 (9)	0	0	0	10 (2)	38 (8)	0	0	10 (2)	100 (21)
		10 (2)						10 (2)		
								10 (2)		

<sup>105</sup> 厳密に言えば、「文章に登場する人」あるいは「話題の人物」には、表現主体の「話し手・書き手」や相手の「聞き手・読み手」も含まれるが、奥山（1976:227-228）の論述では、それが三人称のものに限られている。確かにこうした分け方のほうがすっきりするし、議論するにも好都合である。従って文もこの扱い方に倣い、「文章に登場する人・話題の人物」を「敬語上のⅢ人称」の者に限定し、それに対する敬語を「Ⅲ人称敬語」と呼ぶことにする。

具体的にどんなものがあるかを見てみよう。まずは(ラ)レル形式の例文を挙げる(下線部が敬語、以下同)。(189)がⅡ人称敬語であり、ほかはすべてⅢ人称敬語である。

(189) このため、平成十五年五月期の業績は、増益は確保できるものの、市場の期待値を下回りそうです。新規投資はもう少し様子を見られたほうが良いと思われます。(産経新聞、2002/6/7)

(190) 何年か前のこと。#NHKが主催する『ハート展』の、障害を持つ女性の詩に絵を描いたことがある。#『ハート展』も終わって何年かして、何かの折りにその女性の訪問を受けた。#絵と出会った時の娘の喜び様をお母さんが話され、女性は「ありがとう」と「嬉しい」が千回も書いてある笑顔をぼくにくれた。その笑顔が百の絵に重なって見え、ぼくの夢は一気にふくらんだ。(朝日新聞、2002/3/8)

(191) 私の視点#◆中曽根氏引退 五十六年、生涯目標掲げつつ#元副総理・元内閣官房長官 後藤田 正晴# 総選挙が公示され、自民党が届け出た候補者名簿に中曽根康弘元首相の名がないことを確認した翌日、中曽根氏を訪ねた。八十二年十一月から5年間の中曽根内閣で私は官房長官、総務庁長官として仕えた。その方の議員引退である。ごあいさつを、と思った。2人で1時間あまり話し込んだ。小泉純一郎首相が「勇退」勧告に来たあとの記者会見で不満を口にすると報じられていたが、その種の言葉は一切なく、実に淡々としておられた。(朝日新聞、2003/11/4)

(192) 日本ハムには七十年に安全な発色剤抜きハムの試作品を作ってもらったことがあったが、いざ共同購入の段階で断られた。その時、努力された社員もいたが、結局、消費者の声よりも会社の利益優先なのだなと思った。その姿勢の延長線上に今回の偽装があると思う。(毎日新聞、2002/8/21)

(193) 激突プロアマ対抗#第1譜(1~二十三)#九段 清成 哲也#2子 近藤昌美#(持ち時間各1時間三十分)#再度挑戦# 近藤さんは門真市にお住まいで六十九歳。#碁を覚えたのは十七歳の頃で「田舎の郵便局長に教わった」という。# もっぱら碁会所で腕を磨かれ、アマ本因坊大阪代表や最強戦関西代表などの棋歴がある。(産経新聞、2003/7/4)

(194) 「いや、まことにすばらしい妙法である。いつ聞いても眼がさめる思いがする」 欽明帝、磯城嶋の大君は百済の使者に、仏法にふれた感想をそのように語られ、「しかし、みずからは是非を決すまい」 帝としては自分ひとりの判断で決められない、ということを説明された。(産経新聞、2001/4/19)

(195) 祭政については、天皇は公的な存在であって、私的な判断はできない、帝はそのように自覚しておられたようである。このあと、欽明帝は群臣を皇居にあつめ意見を聞かれるのだが、それをきっかけに国論をわけた排仏、崇仏の宗教論争がくりひろげられることになる。(産経新聞、2001/4/19)

(ラ) レル形式の唯一のⅡ人称敬語(189)は、読者からの「ベンチャー・リンクに注目しています。今後の見通しをお願いします。」という質問に対する答えであり、特定の聞き手が存在し、それを意識した言葉づかいである。新聞記事というものの、会話の形をとっており、尊敬語「見られる」のほかに対話の敬語<sup>106</sup>「です・ます」も併用されている。

そして(190)(191)(192)は、エッセイか評論のような文章に現れた例であると思われる。(190)は作者が感動を覚えたエピソードの登場人物「障害をもつ女性のお母さん」に敬語を使った例であるが、作者にとって同様な関係(詩と絵を通じて関わりをもつようになったが、面識はない)にあるはずの「女性」に敬語は使われていない(「くださった」ではなく「くれた」)。相手の年齢に対する配慮からきた敬語使用であるかと考えられる。(191)は『朝日新聞』の「私の視点」コラムに、元副総理・元内閣官房長官後藤田正晴が投稿した文章に現れた例である。やや長い例文であるが、作者と敬語対象との関係が記された部分が分析に役立つため、あえて全文引用した。文脈から、作者の後藤田正晴と敬語対象の中曽根康弘元首相がかつて仕事上では上下関係をもっていたことと、作者が相手に対して尊敬の意を抱いていることが分かる。一緒に内閣に務めた時代は、作者は相手に向けておそらく常に敬語を用いていたことは容易に想像できる。(191)の敬語表現に、おもにこの二つの要素が働いているのではなかろうか。

(192)は、敬語の必要性はさほど高くないように思われる。名前も特定性もないとある「社員」に、普通敬語は使わないであろう。ただ、後ろの文脈から、その社員の努力が無駄に終わった結果、現在の望ましくない現状になってしまったことに対する作者の批判

<sup>106</sup> 「対話の敬語」とは、「話手と聞き手が作る“対話の世界”において、話手が聞き手に《丁寧》に述べようとさえすれば、“話題の世界”とはまったく関係なく」使われる敬語であり、「です・ます」を指す(菊地1997:104)。

の意が読みとれる。その反動から、社員を高く待遇することにしたのではないかと思われる。

(193) はごく短い暮の記事に見えるが、その前に「です・ます」体で署名「にわかファン」の投書めいた文章が先行していることから、読者からの投書である可能性も高い。「オ／ゴ～ダ（デス）」形式を含めて二箇所も敬語が使われており、(189) と同じように 69 歳の年上に配慮しているためと思われる。

(194) (195) は同一の文章に現れたもので、あわせて四つの尊敬語が用いられている。今回の資料で敬語が使われた皇室報道は一例もないと前述したが、この四つはすべて「欽明帝」という天皇に使用されたものである。ただし、これらは報道文ではなく、歴史に関するコラムの連載の中で使われたものと思われる。もっとも、日本社会において、天皇は特別な存在であり、歴史小説にしても論文にしても敬語を使って一向に無理はない。皇室敬語については、6.2.4 節に詳細を譲る。

奥山 (1976:223) は報道、評論、論文など「書き手の判断による」「言い立て文」<sup>107</sup>における書き手と読み手の関係を、「読み手を意識していますが、不特定多数の場合が多い」としており、こうした文に敬語は「きわめて少ない」と主張する。すなわち、「新聞記事」という一般大衆向けのマスコミの「場」において、皇室敬語および読み手を意識した内容以外に、話題の登場人物や読み手に対して敬語を使う必要性（使わないと失礼になる）はもうとうない。上に見た使用例も、書き手各自の配慮（年齢、役職関係など）でもなければ使わずに済むものであると思われる。これは、用例数の少なさと、敬度の低い（ラ）レル形式にとどめる表現が主流である事実からも裏付けられていると言えよう。

二番目に多い依頼敬語（8 例）について検討しておく。例文を見れば分かるように、すべて「オ／ゴ～クダサイ」という命令形をとっている。(196) のような直接引用文に現れたものが 1 例ある以外に、ほかはすべて新聞社から読者へのメッセージであり、新聞社としてはあるべき姿勢である。(197) のような断り文が 2 例、(198) と (199) のよう

<sup>107</sup> 奥山 (1976:223) は佐久間鼎氏の文章三分類を借用し、書き手と読み手との関係を次のようにまとめている。

- (1) 表出文——書き手の感情をそのまま表した文で、読み手をあまり意識していません。たとえば詩歌、随想、日記など。
- (2) 訴え文——書き手が読み手に呼び掛け、訴えます。読み手は一人から多数に及びますが、誰が読むかが推測できます。たとえば手紙、宣伝文、お知らせなど。
- (3) 言い立て文——書き手の判断による文。読み手を意識していますが、不特定多数の場合が多い。たとえば報道、評論、論文など。

な情報や意見の寄稿依頼が5例で、「新聞記事」における「オ／ゴ〜クダサル」形式の適用範囲の狭さが見て取れる。ちなみに、これは募集型の広告にも現れやすい言い方であるが、今回の資料には1例も出てきていない。広告も収録されていない可能性が考えられる。

- (196) ホテルの部屋の冷蔵庫にある缶飲料は、ホテルの格にかかわらず高い。#コンビニの倍以上することもある。飲食品の持ち込みはご遠慮くださいと掲示してあることもある。品数は少ない。(産経新聞、2001/7/8)
- (197) 二重投稿、採否の問い合わせはご遠慮ください。本社電子メディアにも収録します。原稿は返却しません。(朝日新聞、2003/11/4)
- (198) この連載に対するご意見、情報をお寄せください。(毎日新聞、2005/8/31)
- (199) あなたが読みたい、時と人をめぐる物語をお寄せください。あて先は右下のアドレスに。(朝日新聞、2004/10/17)

最後に「新聞記事」における残りの4例を挙げておく。「オ／ゴ〜ダ(デス)」(例(193)(200))と「〜テイタダク」(例(200)(201))が2例ずつある。(200)は衆院議員渡辺喜美が「金融と産業を同時に再生するための「産業再生委員会」創設の重要性を説く」文章の中で、当時の首相小泉について言及した用例である。(191)と同様に、役職の上下関係から、敬語を使う必要性を感じているためかと思われる。(201)の敬語「〜テイタダク」は文脈からしてそれほど必要性が高くないが、前文の「〜テモラウ」との重複を避けるのが最大の要因だと考えられる。

- (200) どれも非常に大きなお荷物で、しかもデフレ経済下で改革を行わなければならない。強い政治的意思とそれを支える政治勢力を結集しないと、実現はできない。小泉首相はそういう認識をお持ちだと思うが、改革を成功させるには、同時に高度の戦略性を持たないといけない。(中略)総理には、ハンセン病訴訟の控訴断念で見せたあの決断力を、ぜひ経済運営においても発揮していただきたいと思う。(毎日新聞、2001/8/10)
- (201) 地域住民の協力を得て完成させる予定です。住民の方々にカウンターを一個ずつ渡して、数字を刻む速さを設定してもらい、作品に流れる時間を考えていただく。住民と僕が創作を共有したいと考えるからです。(産経新聞、

2002/1/4)

以上のデータと分析から、「新聞記事」については次のことが結論として言えよう。①客観的事実報道が中核をなす「新聞記事」という「場」の性質から、敬語の使用はきわめて少なく、表現形式も種類に乏しい。②Ⅱ人称敬語とⅢ人称敬語はほぼ半々であり、Ⅱ人称敬語は読み手を意識した内容（新聞社から読者への呼び掛け、読者の質問への回答など）に限って使われ、適用範囲が狭い。③「オ／ゴ～クダサル」形式はすべて「オ／ゴ～クダサイ」という依頼表現形をとっており、Ⅱ人称敬語（直接引用文中のⅡ人称敬語も1例ある）となっている。④それを除いた他の諸形式では、敬度の低い（ラ）レル形式は敬語表現の主流をなしており、「新聞記事」という「場」の制限による結果であると思われる。主にⅢ人称敬語に使われ、書き手各自の配慮（年齢、役職関係など）が主因であると考えられる。

### 6.2.2 文学（地の文）

表6-2における「文学（地の文）」のデータを見ると、敬語表現の数が依然として少ないが、「新聞記事」より敬語形式の種類が豊富であることが分かる。そのうち、特に恩恵敬語の数が目立ち、あわせて全体の7割以上を占める。そして「敬語対象」による統計データを示す表6-4を見ると、またⅢ人称敬語とⅡ人称敬語がほぼ半々の状況であるが、「新聞記事」とは逆で、Ⅲ人称敬語よりもⅡ人称敬語のほうがすこし優位であり、そのうち、特に「直接引用文中のⅡ人称」が多いのは注目される。

表6-4 「文学（地の文）」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ

形式 敬語対象	尊敬語					謙譲語				合計
	低敬度	高敬度			依頼	恩恵				
	(ラ)レル	オ／ゴ～ニナル	オ／ゴ～ナサル	～ナサル	オ／ゴ～ダ(デス)	オ／ゴ～クダサイ	～テクダサル	オ／ゴ～イタダク	～テイタダク	
Ⅲ人称	6 (1)	6 (1)	0	0	0	0	28 (5)	0	6 (1)	44 (8)
Ⅱ人称	0	0	0	0	0	0	11 (2)	0	6 (1)	17 (3)
直接引用文中のⅡ人称	0	0	0	0	11 (2)	6 (1)	0	22 (4)	0	39 (7)
小計	6 (1)	6 (1)	0	0	11 (2)	6 (1)	39 (7)	22 (4)	11 (2)	100 (18)
		17 (3)						33 (6)		
								72 (13)		

まずは本論文の主要考察対象の（ラ）レル形式を見ていく。（202）の1文しか現れておらず、しかもそれは手紙からの引用である。奥山（1976）によると、「手紙文は文章の

中でも最も話し言葉に近いもの」(236頁)であり、「手紙文の敬語は話し言葉よりも一段上の敬語を使うのがふつう」(247頁)である。それにここで言う「山本先生」は、創価学会のメンバー(文中の「エイコ・リッチ」および手紙の受け手)が尊敬し憧れる存在である。以上の二点をあわせて考えると、ここは諸形式の中で最も敬度の低い(ラ)レル形式を使うべきではない。しかし、この「山本先生」は手紙の直接受け手ではなく、ただ話題に上ってくる人物である。Ⅱ人称者の場合に比べて、Ⅲ人称敬語はもともと少ないという(菊地 1997:117)<sup>108</sup>ので、それに比例して敬度の低い形式が選ばれるのも納得できよう。

(202) 千九百六十五年(昭和四十年)の十月上旬に、エイコ・リッチから手紙がきた。そこには「間もなく、山本先生が、ヨーロッパを訪問されるそうです」と記されていた。だが、その日程については、彼女もわからないようだった。「なんとしても、先生にお会いしたい！」彼女は思った。そして、真剣に祈り続けた。(『新・人間革命』)

次に唯一の「オ／ゴ～ニナル」形式について見てみよう。(203)を読めば分かることだが、この「お生まれになる」は尊敬や相手を立てるといふ敬語本来の意味を一切持っておらず、むしろ皮肉や軽蔑の気持ちが込められている。敬語のこうした働きについて、大石(1975:67)は「一種の優越感をもって敬語を使う使い方に属し」、そしてこの優越感はまだ「敬語が教養性のことば」であることから生じていると解説するが、まさにそのとおりである。

(203) 四十名の大注目を浴びて入ってきたのは、気持ち悪いほどオドオドしたデブだった。ベッタリとしたワカメヘアを載せたデカ過ぎる頭、その額にはじんわりと脂が浮かび、デザイン性ゼロ機能重視の大きなメガネを顔面にめり込ませ、サイズちょっと小さいんじゃないですかのムチムチブレザーにズボン、顔は…これはもう残念な顔にお生まれになったとしか言いようのない絵に描いたようなブ男だった。(『野ブタ。をプロデュース』)

<sup>108</sup> 菊地(1997:117)の部分は主に話し言葉について論じているが、(202)は話し言葉に近い手紙文なので、同様に適用できると思われる。

さて、上の2例はいずれもⅢ人称敬語であるが、議論の都合上、つづいては形式にとらわれずこれと同じ機能のほかの例も一括に検討しておく。上の2例を含め、あわせて9例ある。(204)と(205)は『新・人間革命』からの用例で、二つとも登場人物の心理活動、あるいは内心独白である。これは声に出せば独り言になるが、また文字に書けば日記になるのであろう。こうした「場」はいずれも自分のためのものであり、その内容を聞くか読む相手はいない。そのため、本来敬語など必要はないが、例文を見れば、心理活動の主体が敬語対象を強く意識し( (205)において、敬語対象はまさに目の前に存在している)、なおかつ厚い尊敬や憧憬の思いを抱えていることが伝わってくる。それでたとえ内心の独白であっても、敬語を使わずにられないのであろう。敬語表現はもともと書き手や話し手の場や人間関係に対する捉え方を反映するものなので、その気持ちに左右されるのももつともだと言えよう。

(206)から(208)は木藤亜也という少女が闘病中に手が動かなくなるまで書き綴った日記をまとめた<sup>109</sup>ノンフィクション『1リットルの涙』からの用例である。病気のせいで体がだんだん不自由になっていく過程の中で、作者は助けてくれる他人のやさしさを普段よりもいっそう強く感じるのであろう。それを日記に記したとき、「～テクダサル」で恩恵を受けた人への感激の心境を表すのは、いたって自然なことである。これが(209)では「～テイタダク」にかわっているが、理屈としてはまったく同様である。

(204) だが、伸一の言葉が、この高等部員の心を変えていくことになる。 指導を聞いて、彼は考えた。 “ぼくは、一日も早く沖縄から離れたいと思いつけてきた。でも、それでは、誰がこの沖縄の現実を変えていくのか。それを成し遂げていくのが、沖縄に生まれ育った、ぼくたちの使命だと、先生は教えてくださった。 また、この世界に、第二、第三の「沖縄」をつくってはならない。だから、その苦しみを知らずぼくたちこそが、世界の平和のために、貢献していかなくてはならないんだ” (『新・人間革命』)

(205) 伸一が船のデッキに立って手を振ると、「ワーッ」と、唸り声のような歓声がわき起こった。多くのメンバーは、伸一の来島を聞かされても、直接、姿

<sup>109</sup> ウィキペディア (Wikipedia) の「1リットルの涙」項目 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/1リットルの涙>、最終アクセス日 2017年4月6日) による。

を見るまでは半信半疑であった。直前まで、台風四号の影響で海は荒れ、鹿児島からの定期船は欠航していた。また、飛行機も、予定通り運航するかどうか心配だったのである。“山本先生は、本当に来てくださった!” この瞬間、皆の喜びは爆発したのだ。（『新・人間革命』）

(206) 秋田病院に入院することになった。馴れない病院で緊張する。小柄なおばあちゃんが、わたしの世話をして下さることになった。（『1リットルの涙』）

(207) ボタンかけの練習を必死でやる。リハビリで、寝返りや膝立ちの練習も必死でやる。おばあちゃん、わたしの姿に感激して応援してくれる。そして、トレパンと上着を買って下さる。もっと、ガンバロウゼ…。 （『1リットルの涙』）

(208) またも先生に救われたと思ったら、涙があふれてきた。母も泣いていた。相談した結果、知立市の秋田病院へ山本先生が月二回診察に行くから、そこを紹介すると言って下さった。「病室の手配ができ次第早急に入院しましょう。それまで待っていてね。亜也ちゃんはわたしの目の届く所にいてほしいから」と先生に言ってもらい、ほっとする。（『1リットルの涙』）

(209) 通園が始まってまもなく、先生から、学園での生活をしていくうえで秋雪の体のことをきちんと理解したいので、できれば診察に同席させてもらい、主治医と話をしたいとの申し出があった。そんなことまでしてくれるのか、と正直驚いた。早速、医師の承諾をもらい、小児医療センター・循環器科の診察を受けるとき、二名の先生に同席していただく。秋雪の学園生活における具体的な注意点は何かを、医師から直接聞いてくれた。（『たったひとつのたからもの』）

さらにⅡ人称敬語の用例を見てみよう。奥山（1976:223）によれば、小説は「表出文」と「言い立て文」にまたがっている文章であり、書き手は読み手をあまり意識していないか、それが不特定多数の場合が多いためか、敬語はきわめて少ない。しかし、(210)は明らかに読者に訴えるような口調であり、むしろ「訴え文」に属する文章である。なお、敬体で綴られているのも、読者を強く意識している裏付けであろう。障害を持つ作者にとって、自分のことを受け止め、さらには共鳴し共感してくれることは、生きていくうえで

大きな励みになるのであろう。その恩恵への感謝、感激の気持ちが、敬語「～テクダサル／イタダク」の使用に繋がっていると思われる。

(210) 私が語れば語るほど、私は子どもや脳障害のことを知らない人たちに出会うのです。これは、たぶん私が生きている間中、続くことでしょう。私は、ですから、手放すことを覚えました。私は語り続けますが、共鳴し、共感してくださるかたに語るだけにしたのです。(中略)人の心は、こちらからどう伝えても変わらないときがあるからです。それは、その人の生い立ちに負うところが多いので、その人自身が変わろうとか気づこうとしない限り、変えることはできないのです。だから私は手放すのです。私の言葉を文章に乗せて、ただ流すのです。そして、それを受け止めてくださるかたがいれば、その人たちと共鳴し共感し合うだけでいいと思っているのです。(中略)そういった生き方を求めて、実践しようとする人が増えたとき、人々の心に穏やかな革命が起こり、その周りには光の〈わ〉ができてくるでしょう。そして、その〈わ〉があちこちでき、それらがつながって網のように広がったとき、世界中をその光が包み込むことでしょう。そのサンプルとして、私の存在を知っていただけたらうれしく思います。(『ひとが否定されないルール』)

一方、これらとまったく異なる特殊な用例がある。(211)と(212)のような発話の直接引用や、(213)と(214)のような手紙文やその直接引用は、登場人物でも読み手でもなく、それぞれの発話や手紙の直接相手に対する敬語である。こうした用例を普通のⅡ人称敬語と区別し、「直接引用文中のⅡ人称敬語」と呼ぶことにする。(215)は(204)と(205)同じく内心独白であるが、「先生！」という呼び掛けの言葉から、それを声に出していないだけで、実のところは話し言葉同然のものであると分かる。そのため、話し言葉からの「直接引用文」として扱うことにした。

このように、一口に地の文といっても、(204)と(205)のような独り言に近い心理活動の描写もあれば、(210)のような読み手に訴える文章、また(211)から(215)のような発話や手紙からの直接引用など、実に様々なものがある。読み手の存在感が薄い「文学(地の文)」において、これらは敬語の存在が可能になる特別な「場」をなし、その使用を生み出しているのである。

- (211) 「亡くなったのは、私の知り合いなんです。まだ撥ねた人が見つからないので、手がかりを探したくて、頻繁にこちらをお訪ねしているのです」 事故の当時のことを何かご存知ですかと尋ねようとしたとき、奥で人影が動き、「おばあちゃん、どなた？」と、女性の声が呼びかけてきた。（『誰か』）
- (212) ドロホフがハーマイオニーにかけた呪いは、声を出して呪文を唱えられなかったので効果が弱められはしたが、それでも、マダム・ポンフリーによれば、「当分おつき合いいただくには十分の損傷」だった。ハーマイオニーは毎日十種類もの薬を飲んでいたが、めきめき回復し、もう医務室に飽きていた。（『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』）<sup>110</sup>
- (213) おじさんはハリーをギロリと睨むと、手紙を見下ろし、読み上げた。親愛なるダーズリー様、御奥様。 私どもはまだ面識がございませんが、ハリーから息子のロンのことはいろいろお聞き及びでございましょう。（中略） つきましては、ハリーを試合に連れていくことをお許しいただきませんか。（中略） お返事は、なるべく早く、ハリーから普通の方法で私どもにお送りいただくのがよろしいかと存じます。（『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』）
- (214) おじさんの唇の動きを、ハリーは「普通の方法でわたしどもにお送りいただくのがよろしいかと」と読み取った。（『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』）
- (215) 読経・唱題のあと、青年部長の秋月英介の指揮で、「新世紀の歌」を皆で合唱した。 伸一は、心でこう叫んでいた。“先生！ 青年部も陸続と育てております。学会はさらに力強く、新世紀の空高く飛翔してまいります。ご安心ください。” 最後に理事長の原山幸一が御礼のあいさつをし、戸田城聖の七回忌法要のすべての儀式は、滞りなく終了した。（『新・人間革命』）

以上のデータと分析から、「文学（地の文）」については次のことが結論として言えよう。①「表出文」と「言い立て文」にまたがっているという「場」の性質から、全体的に敬語の使用は非常に少ないが、表現形式の種類は「新聞記事」より豊富である。②全体的

<sup>110</sup> (212) は敬語対象（「ハーマイオニー」）に向けての言葉であるかどうかははっきりと判断できないが、その可能性が高いので、(211) と同列に扱うことにした。

にⅡ人称敬語とⅢ人称敬語がほぼ半々である。発話や手紙からの直接引用が混じっているため、「直接引用文中のⅡ人称敬語」が多く現れ、訴え性を持つ文章における読み手に対する敬語とあわせて、全体的にⅡ人称敬語をすこし優位に立たせる結果となっている。Ⅲ人称敬語は、心理活動描写や書き手が敬語対象に対して特別な思いを抱いている場合に限られている。③「オ／ゴ〜クダサル」敬語は1例しかないが、また「オ／ゴ〜クダサイ」という依頼表現形をとっており、Ⅱ人称敬語となっている。④それを除いた他の諸形式では、恩恵敬語が主流をなしており（あわせて13例、72%を占める）、「文学（地の文）」における敬語は主に書き手の感謝、感激の気持ちを表わすのに用いられていることが分かる。⑤（ラ）レル敬語は1例しかなく、しかも手紙文の引用におけるⅢ人称者に対するもので、敬度がそれほど要求されない場合に使われている。⑥「オ／ゴ〜ニナル」形式では皮肉・軽蔑に使われる特殊な敬語用法も観察されたが、1例しかなかった。

### 6.2.3 ブログ

表6-2における「ブログ」のデータを見ると、「新聞記事」と「文学（地の文）」より敬語表現の数が著しく多いのを見て取れる。そのうち、恩恵敬語は半分近く（49%、41例）を占めて最も多く、（ラ）レル形式はそれに次いで24%（20例）を占め、依頼敬語は17%（14例）で三番目となっている。

すでに述べたように、「ブログ」は主に個人的体験、見聞、心覚えを記したり、ある話題について手軽に感想を述べる私的な「場」として使われたりしているが、インターネットで公開すると設定した以上、読み手のある程度意識しているのが普通である<sup>111</sup>。それに、自己アピールや特定のテーマについて意見や評論を発信し注目を集めることを目的とするブロガーも数多く存在している。こうしたブロガーはより一層受け手に対する意識を強め、時には訴えたりもしている。いずれにせよ、「新聞記事」や「文学（地の文）」より読み手を意識しているのは間違いない。その結果、敬語使用の頻度が大幅に増えるのも至極当然であろう。また「敬語対象」による統計データを示した表6-5をみると、全体的にⅢ人称敬語とⅡ人称敬語はほぼ半々であるが、各々の形式ではばらつきがみられる。

<sup>111</sup> ブログ文章の多くが敬体の「デス・マス」体をとっているのが一つの証拠と言えよう。

表 6-5 「ブログ」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ

形式 敬語対象	尊敬語					謙談語				合計
	低敬度	高敬度				依頼	恩恵			
	(ラ) レル	オ/ゴ～ ニナル	オ/ゴ～ ナサル	～ナサル	オ/ゴ～ダ (デス)	オ/ゴ～ クダサイ	～テ クダサル	オ/ゴ～ イタダク	～テ イタダク	
Ⅲ人称	19 (16)	4 (3)	0	0	1 (1)	0	8 (7)	4 (3)	18 (15)	54 (45)
Ⅱ人称	5 (4)	2 (2)	0	1 (1)	2 (2)	17 (14)	4 (3)	4 (3)	12 (10)	46 (39)
小計	24 (20)	6 (5)	0	1 (1)	4 (3)	17 (14)	12 (10)	7 (6)	30 (25)	100 (84)
		11 (9)						37 (31)		

(ラ) レル形式の用例を見ていこう。(ラ) レル形式では、Ⅲ人称敬語が大方(16例、(216)から(218))であり、Ⅱ人称敬語はわずかしかない(4例、(219)(220))。前者の用例では、(216)は書き手が非常に高く評価している訳書の訳者に対して使われたものであり、(217)はゴルフスクールのブログにおいて管理者が会員の活躍ぶりを披露するときに使われたものであり、(218)は当時日本で絶対な人気をほこったバドミントン選手小椋久美子と潮田玲子に対して使われたものである。推薦、アピール、随想とそれぞれ目的は異なるが、然るべき人物に対して軽い敬意を表すにはふさわしい表現と言えよう。ただ(217)はゴルフスクールといってもビジネスに近い性質なので、通常はお客様たる会員により高い敬度の敬語を使う。が、読み手に親近感を抱かせるためか、この文章はかなりくだけたスタイルをとっている。それに応じて、敬語も形式ばったものでなく(ラ)レル程度にとどめるほうが逆に書き手の意図に適っているであろう。

なお、(218)には、「お休みされ」という注意すべき用法がある。菊地(2007:176)、佐藤ほか(2009:118)などによると、「オ/ゴ～サレル」は規範的に適切な敬語とは認められていないが、近年はよく使われるようになってきている。その理由として(「ご利用サレル」を例に)、おもに「①「ご利用」も「される」も尊敬語で「ご利用+される」と分析できること、②「利用なさる・ご利用なさる」がともに正しいので「利用される」に対して「ご利用される」といってもよからうという類推が働きやすいこと(菊地2007:176)という二点が挙げられる。こうした自然な成り行きの結果、菊地(1997:181)の予測どおり、「この形が市民権を得ていくのも時間の問題」であろう。

一方、Ⅱ人称敬語の用例は全部で4例あるが、いずれも(219)と(220)のように「皆様」や「みなさん」という言葉が入っており、読み手に向けて語り掛けるという書き手の姿勢が目に見える。かなり話し言葉に近い文章と言えよう。面と向かって話したらより高い敬度の敬語が使われやすいが、文字をもって一方的に語るブログの「場」において、(ラ)

レル程度で済ませる傾向がみられる。

- (216) 1冊でもいいから是非読んで欲しい本です。訳は文豪井伏鱒二。唯一無二の超訳、絶訳は原著を越えてしまっているような気がします。たとえば珍獣の命名がすごい。プッシュミープルミーという頭が二つのシカを「オシツオサレツ」って訳されているんですよ！（趣味とスポーツ）
- (217) まさしく、いまがゴルフを満喫する絶好の時です。スクールの中でも、十分すぎるほど満喫されている方が・・・GWの9日間で、7日もラウンドされ、それ以降5月中だけでも8回ラウンドが入っているとか・・・恐れ入りました！！という感じです。そして先日、スクールに来られて開口一番「やっちゃいました！」と言う方が・・・このパターンは大体ホールインワンが多いのですが、何と！六十九のスコアが出たと言うのです。（趣味とスポーツ）
- (218) いよいよ北京五輪モードに突入してきました。バドミントンも日本代表のユニフォームが正式にお披露目されたようですね。（中略）相変わらずオグシオはマスコミに追いかけられ、今回もワンピースのミニスカート姿をご披露いただきました。お二人ともとてもかわいらしいので、あまり違和感はありませんが、潮田さんが「恥ずかしい」とコメントされていましたね。（中略）小椋さんが腰を痛めて、しばらくお休みされていましたが、ようやく復帰。（趣味とスポーツ）
- (219) 今日は七夕ですね。皆様は願い事されました??私は毎年恒例！イオンに飾られていた笹に願い事を飾りましたよ！（Yahoo!サービス）
- (220) こんばんわ。今日から9月ですね。1発目から貨物ネタではありませんがタイトルが今日の朝日新聞の朝刊に掲載されていましたね。すでに皆さんは読まれましたか?（趣味とスポーツ）

「ブログ」で最も多く現れている恩恵敬語について検討する。敬語対象の面では、「オ／ゴ～イタダク」はⅡ人称とⅢ人称敬語ちょうど半々であるが、「～テイタダク」は登場人物に対するⅢ人称敬語のほうがやや多い。

Ⅲ人称敬語の用例である(221) (222) および(218)を見ていこう。(221)は試合の応援や声援をしてくれた人へ、(222)は番組に出演してくれた人への感謝の気持ちの

表れとして、「～テイタダク」という謙讓語で高く待遇した文章である。それに対し、(218)のユニフォーム披露はどちらかという書き手にそれほど関係深いことでもなく、ただ「披露しました」で述べても差し支えない。ただここは「北京五輪モード」という特殊な状況なので、国家代表というイメージが強く、そのため敬語が使用されているかと思われる。なお(222)では、接続節の「～テクダサル」との重複回避も、「～テイタダク」が使われる一因として考えられる。

Ⅱ人称敬語の用例である(223)と(224)は、ほぼ同じ様相を呈している。例を挙げるのは省くが、「～テクダサル」もまたほぼ同じである。理屈上、書き手が自分にとって恩恵的だと捉える行為であれば、動作主が登場人物であろうと読み手であろうと等しく使えるが、この3形式で言うと、登場人物のほうに少し偏っている傾向である。

(221) まずは、昨日は遠い中暑い中、たくさんの応援&声援&差し入れ&やさしさをありがとうございました。そして、仕事をかえてまできていただいた、トレーナーさんにも感謝です。(趣味とスポーツ)

(222) 先週末「草野☆キッド」の収録で、今話題の「髭男爵」のお2人が来て下さって、あの「ルネサ～ンス!!」を披露して頂きました♪♪(エンターテインメント)

(223) いつも応援していただきありがとうございます。(^^)モチベーション上げて、明日はトモニタタカッテきます。遠方の皆さま、勝利の念をよろしくお願いします。m( \_\_ \_\_ )mケータイ持っていつときます(笑)。(趣味とスポーツ)

(224) ついては、上記審査申立てにご賛同いただける方を広く募りたいので、趣旨に賛同いただける方は、下記宛にFAXもしくはメールにてご回答をお願いいたします。(Yahoo!サービス)

「ブログ」で3番目に多い「オ／ゴ～クダサル」については、話がいたって簡単であり、「新聞記事」と同様に、すべて「オ／ゴ～クダサイ」という依頼表現形をとっており、読み手に対する敬語となっている。

そして、高敬度敬語では「オ／ゴ～ニナル」形式が最も多く(5例)、そのうち2例が「御覧になる」であり、しかも(ラ)レルとの併用も1例あり、いわゆる二重敬語となっ

ている（例（225））。敬語対象の面では特に偏りは見られず、これは残りのほかの形式も同様である。ただ面白いのは、ペット（例（226））やコンピューターの電源（例（227））に対して尊敬語を使う例も見られたことである。ペットを可愛がる気持ちや、電源の長年の奉仕に対するいたわりの気持ちがそうした使い方に繋がったのではなかろうか。敬語の特殊用法とでもいえるが、一種のユーモアが感じられる。

（225）資料写真は他に同社「中国・台湾海軍ハンドブック」「世界の海軍二千七 - 二千八」内でも同艦横からのショットが掲載されていますので、是非御購入の上御覧になられてみて下さい。（Yahoo!サービス）

（226）何で、鳩は捕まったのかな???元々、弱ってたのかな???昔、ごんが鳩の雛を啜えて、お持ち帰りになった時の姿を思い出しました。前足の間に挟む感じで、引きずりながら持ってきた。（家庭と住まい）

（227）コンピューターの電源のやつ（OAタップですね？ すみません…。○ | ー | ー）なのですが、前から使ってきたやつがこの間とうとうお亡くなりになりまして、今は父が買ってきた電源を使っているのですが、これが面倒臭くって…。（Yahoo!サービス）

以上のデータと分析から、「ブログ」については次のことが結論として言えよう。①自己アピールや注目集めなどを目的とする「ブログ」の「場」の性質から、「新聞記事」と「文学（地の文）」より読み手を意識し、敬語の使用は大幅に増えている。②全体的にはⅢ人称敬語とⅡ人称敬語がほぼ半々であるが、各々の形式では偏りがみられる。③「オ／ゴ〜クダサル」敬語は「新聞記事」と同様に、すべて「オ／ゴ〜クダサイ」という依頼表現形をとっており、Ⅱ人称敬語となっている。④それを除いた他の諸形式では、「文学（地の文）」と同様に、恩恵敬語が主流をなしており、あわせて全体の半分近く（49%、41例）を占めている。⑤（ラ）レル形式ではⅢ人称敬語が中心となっており、軽い敬意を表すためや、くだけたスタイルの文章において読み手に親近感を抱かせるためなどに多用されている。⑥「オ／ゴ〜ニナル」形式では動物や物に使われる異例な表現も観察され、ユーモアを感じさせる敬語の特殊用法となっている。

## 6.2.4 テレビニュース

表 6-2 における「テレビニュース」のデータを見ると、その少なさと偏りにすぐ気づくことであろう。敬語は 3 例しかなく、しかもすべて (ラ) レル形式となっている。数が少なすぎるため、表で示すことは省略するが、「敬語対象」による統計データも偏っており、3 例の (ラ) レル敬語はすべてⅢ人称敬語である。既に述べたように、本論文はテレビニュースにおけるアナウンサーの発話のみを考察対象にしており、もっぱら報道文章となっているので、データが極端的に偏っているのも当然の結果であろう。視聴者に呼び掛けるような発話もたまたま耳に入るとい印象だが、今回の資料には出てきていない。

そしてもう一つ極端的なのは、この 3 つの用例はいずれも日本の皇族に対して使う、いわゆる皇室敬語である。(228) において、主語は「皇后さま」が 2 例で、「秋篠宮妃紀子さま」が 1 例である。

(228) 皇后さまは日本赤十字社の名誉総裁を務めていて、功績のあった 13 人に章を贈られました。秋篠宮妃紀子さまも出席されました。レバノンに 3 カ月派遣された看護師がシリア難民のための医療機関立ち上げに関わった経験を発表すると、皇后さまは「たくさんレバノンに入っているんですね」と話し、労をねぎらわれたということです。(ANN ニュース、2015/5/13)

皇室敬語の特徴をより端的に示すため、2016 年 7 月 5 日～2017 年 1 月 23 日のニュース報道から皇室に関わるものを任意に選び、集計してみた。その結果は表 6-6 のとおりである。「オ/ゴ～ニナル」と「～テイタダク」形式も少し現れてはいるが、(ラ) レル形式が依然として主流となっている。

表 6-6 「テレビニュース」における皇室敬語の補充データ

形式	尊敬語					謙譲語				合計
	低敬度	高敬度				依頼	恩恵			
敬語対象	(ラ) レル	オ/ゴ～ニナル	オ/ゴ～ナサル	～ナサル	オ/ゴ～ダ(デス)	オ/ゴ～クダサイ	～テクダサル	オ/ゴ～イタダク	～テイタダク	
Ⅲ人称	90 (73)	4 (3)	0	0	0	0	0	0	0	94 (76)
直接引用文中のⅡ人称	4 (3)	0	0	0	0	0	0	0	2 (2)	6 (5)
小計	94 (76)	4 (3)	0	0	0	0	0	0	2 (2)	100 (81)
		4 (3)				0	0	2 (2)		
								2 (2)		

皇室に対する敬語使用は、いくつかの段階を経て変化してきた。浅田（2014:309）によると、「日本における敬語使用は上代より始まるが、最古の文献である記紀においてはほとんど神とその子孫である天皇に対してのみ用いられ、神・天皇に対する言葉遣いとしてスタートしたことは疑いない」。しかし、戦後の「人間宣言」を境目に、「戦前には「神」であった天皇は戦後「人間」として生まれ変わり、言語上の待遇もそれに応じて根本的に変化し、特殊の用語を使った絶対敬語（例（229））から一般敬語（例（230））になった。

(229) 聖上陛下には十日正午前後より多数市民の帝国議会附近に参集せし実況を始め午後三時過日比谷公園側に於ける群衆の激昂及火災等の起こりし状況を聞召され深く御軫念相成り近侍に対し種々の御下問を賜ひたるやに拝承す  
（1913/2/11、東京朝日新聞、国文学編集部編（1977:134）より、下線は原作者、日付の表記に変更あり）

(230) 天皇陛下は二十九日、満七十五歳の誕生日を迎えられた。最近は、外交国はじめ海外からの客も多く、公務多忙で、お好きな生物ご研究も、予定をくずされがち。だが、忙しいのを楽しんでおられるようだ、という。侍従の話では、陛下のご研究の成果と、このあといつごろ次のご本を出されるのかをお聞きしたら……（1976/4/29、朝日新聞、国文学編集部編（1977:135）より、下線は原作者、日付の表記に変更あり）

1952年に第1期国語審議会によって建議された「これからの敬語」では、「11 皇室用語」という箇条において、皇室に対する敬語使用について次のように記述している。しかし、浅田（2014:311）の指摘のとおり、「普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使う」という了解と、敬度の低い「(ラ)レル」型敬語の使用を勧めるのとは、明らかに矛盾している。

これまで、皇室に関する敬語として、特別にむずかしい漢語が多く使われてきたが、これからは、普通のことばの範囲内で最上級の敬語を使うということに、昭和22年8月、当時の宮内当局と報道関係との間に基本的了解が成り立っていた。（中略）これを今日の報道上の用例について見ても、すでに第6項で述べた「れる・られる」の型

または「お——になる」「ご——になる」の型をとって、平明・簡素なこれからの敬語の目標を示している。（「これからの敬語」、下線は筆者）

こうした矛盾がある一方、実際の使用面ではかなり統一した様相を呈している。今回の資料で集めた例文を見ると、勧められた「オ／ゴ～ニナル」形式は3例しかなく、ほかはすべて（ラ）レル敬語である<sup>112</sup>。その3例のうち、2例は「ご覧になる」であり、もう1例は（231）における「お生まれになる」である。ただ、同じ内容を報道したFNNのニュース（例（232））では、それが「誕生される」となり、用語上の違いを見せている。

ただ、日本における皇室の地位から考えると、（ラ）レル形式に集中しているのは敬度の問題ではなく、ニュース報道の中立性、客観性および簡潔さを求める性格によるところが大きいと考えられる。さらには、現今の皇室自身の要望、つまりはあまり特別扱いされたくないという考えもあるのではないだろうか。

（231）武道大会は、天皇陛下がお生まれになった1933年に建てられた皇宮警察の武道場で開かれました。（TBS ニュース、2017/1/20）

（232）濟寧館は、天皇陛下が誕生された年に建てられ、これまでも、陛下の還暦や傘寿などの節目に、天覧の武道大会が開催されています。（FNN ニュース、2017/1/20）

もう一つの特徴は、「敬語の重複使用を避けようとするための敬語の脱落」（国文学編集部編 1977:135）が多く見られることである。（233）から（235）はいずれも主文末だけが敬語を用い、接続節が無敬語となっている。これは「敬語の連続的な使用は、文章を弛緩させるだけで、敬語は最後で、文末で包み込むように、まとめるのがよい」（国文学編集部編 1977:135）という表現上の考慮からきた現象だと考えられる。

（233）韓国の仏像は日本より100年ほど古く、6世紀に作られたという説明を受けると、皇后さまは「よく保存されていきましたね」と話されていました。（ANN ニュース、2016/7/5）

（234）天皇皇后両陛下は、新年にあたり、皇太子ご夫妻や、秋篠宮ご夫妻といっ

<sup>112</sup> 表 6-6 における「直接引用文中のⅡ人称」に対する敬語の5例は皇室敬語ではない。

た皇族方とともに、皇居・宮殿のベランダに立ち、訪れた人たちに笑顔で手を振られました。(FNN ニュース、2017/1/2)

(235) 両陛下は、柔道と剣道、弓道の試合をそれぞれ観戦し、選手たちの熱のこもった試合ぶりに、にこやかに拍手を送られました。(TBS ニュース、2017/1/20)

なお、日本皇室と同等な地位をもつ外国の王族に対する言語上の待遇法も変化を見せているようである。奥山(1976:256)によると、かつて「外国の王族に対しても、皇室よりやや低い程度の敬語を使」っていた(例(236))が、現在は日本皇室に敬語を用いる一方、外国王族を無敬語で待遇するようになっている(例(237)(238))。敬語使用の理論からすれば、ソト領域に属する外国王族に尊敬語を使い、それに対し、ウチ領域に属する日本皇室に謙讓語を使うはずだが、まったくそれに反する現状である。この問題について、滝浦(2005:255)は久野暲の「共感度」概念を援用し、その大小を表す不等式で「ウチ・ソト」を分け、解釈を求めている。即ち、 $E(x)$  が指示対象  $x$  に対する話し手の共感度( $E$ は「共感(Empathy)」の頭文字)を表す(236頁)とすれば、日本国民が外国の王族および日本皇室に対する共感度の不等式は、 $E(\text{日本国民}) = E(\text{外国王族}) > E(\text{日本皇室})$ <sup>113</sup>となり、それで外国王族をより近い「ウチ」の存在として扱い、日本皇室を「ソト」として扱う結果になる。そしてこうした扱いの前提は、「天皇は国家を超越している」ことにある。納得できる解釈である。

(236) (エリザベス女王の記事) 沿道の人びとは、日英両国旗の小旗を振り、歓声をあげて歓迎した。ご夫妻は、ほほえみを絶やさず、手を振って歓迎におこたえになった。国立劇場にお着きになったご夫妻は両陛下とともに、中村歌右衛門ら出演の歌舞伎『本朝廿四孝奥庭狐火の場』など、伝統芸能を鑑賞になった。(1975/5/10、朝日新聞、奥山(1976:256)より、下線は筆者、日付の表記に変更あり)

(237) 天皇皇后両陛下は、国賓として来日しているベルギーのフィリップ国王夫妻に日本の伝統文化に触れてもらうため、一緒に茨城県結城市を訪問されました。(ANN ニュース、2016/10/13)

<sup>113</sup> 滝浦(2005:255)が問題にしているのは外国首脳であるが、外国王族の場合も理屈は同じである。

- (238) (両陛下の) 滞在は1泊程度で、王宮に安置されている前国王のひつぎに  
 供花・記帳し、王妃や、先月即位した、ワチラロンコン新国王などと面会し、  
 弔意を示される見通しです。(FNN ニュース、2017/1/11)

最後に表 6-6 における「直接引用文中のⅡ人称」に対する敬語について触れておく。この5例はいずれも天皇・皇后陛下の発話からの直接引用で、一般国民に対して使われているものである。浅田(2014:315-316)によると、「前近代の天皇は、世話・連絡係の侍従や女房、その他庶民に対して話すときは無敬語であり、「戦前までは天皇が宮内庁の役人や政府の高官に話すときも無敬語であったと思われる」。ところが戦後「人間天皇」を演出するために、同じ無敬語でもきつい男性語ではなく、「やわらかく響く「折れるの?」「あっ、そう」という女性語を使」うようになった。さらに今上天皇の場合、(239)と(240)に示されているように、一般国民に対しても敬語を用いるようになっている。しかし、天皇という特殊な立場を考えると、これは相手との関係を考慮した結果ではなく、自身の品位を示すためのいわゆる「自己品位語」(浅田 2014:221)とみてよかろう。

- (239) 両陛下と国王夫妻は、ユネスコの無形文化財に登録されている結城紬(つむぎ)の地機織りを見て「足はどう操っておられるんですか」「完成までどれくらいかかるんですか」などと熱心に質問されました。(ANN ニュース、2016/10/13)

- (240) 両陛下は、選手の健闘に拍手を送り、「大変良い試合を見せていただいてありがとうございます」と話されたということです。(FNN ニュース、2017/ 1/20)

以上のデータと分析から、「テレビニュース」については次のことが結論として言えよう。①事実の客観的報道という特殊な「場」の性質に制限され、敬語の使用は非常に少ない。②Ⅱ人称敬語は皆無であり、Ⅲ人称敬語は皇室敬語に限られている。③補充データも含めて言うと、皇室敬語はほとんど(ラ)レル形式をとっており、「テレビニュース」における敬語表現には単一化が起きていると思われる。ただ、これは敬度の問題ではなく、ニュース報道の中立性、客観性および簡潔さを求める性格によるところが大きいと考えられる。④皇族の発話からの直接引用で、一般国民に対して使われる「自己品位語」型の敬語も観察されている。

## 6.2.5 テレビドラマ

表 6-2 における「テレビドラマ」のデータを見ると、4 グループの間にそれほど差がついていないことに気付く。恩恵敬語は 32% (25 例) と最も多く、依頼敬語はそれに次いで 26% (20 例) を占めている。低敬度敬語と高敬度敬語の量はほぼ同じで、それぞれ 2 割ほどを占めている。

また表 6-7 における「敬語対象」による統計データを見ると、これまでのⅢ人称敬語が主流をなしているのが一転して、Ⅱ人称敬語が中核となる。「文学 (地の文)」のところですでに述べたように、敬語はもともとⅡ人称者に対するものが最も多いので、この結果はごく自然と言えよう。

表 6-7 「テレビドラマ」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ

形式 敬語対象	尊敬語					謙譲語				合計
	低敬度	高敬度				依頼	恩恵			
	(ラ) レル	オ/ゴ～ ニナル	オ/ゴ～ ナサル	～ナサル	オ/ゴ～ダ (デス)	オ/ゴ～ クダサイ	～テ クダサル	オ/ゴ～ イタダク	～テ イタダク	
Ⅲ人称	6 (5)	1 (1)	0	0	1 (1)	0	3 (2)	0	3 (2)	14 (11)
Ⅱ人称	14 (11)	8 (6)	0	3 (2)	9 (7)	26 (20)	8 (6)	6 (5)	13 (10)	86 (67)
小計	21 (16)	9 (7)	0	3 (2)	10 (8)	26 (20)	10 (8)	6 (5)	15 (12)	100 (78)
		22 (17)						22 (17)		
								32 (25)		

(ラ) レル形式を見ていこう。16 例のうち、Ⅱ人称敬語は 11 例と大多数を占め、Ⅲ人称敬語は 5 例しかない。まずⅡ人称敬語の用例 (241) から (249) を検討する。(241) から (243) の場面は銀行の支店という職場である。銀行本部の支店統括部臨店班の平行員花咲から支店の窓口担当者中島に向けての発話である。お互い同レベルの社内的地位をもつ関係であるが、どちらかというとな部のほうが少し高いとも言えよう。こうした間柄にふさわしく、軽い敬度の (ラ) レル形式が使われているわけである。

(241) だから (中島さんは) 一人で後輩のフォローされてたんですね。(『花咲』第 1 話)

(242) 中島さんは、お待たせしたお客様には、お詫びの言葉と一緒に、ポケットティッシュを渡されていますよね。(『花咲』第 1 話)

(243) 杉下さん、どちらへ行かれるんですか。(『花咲』第 2 話)

(244) 課長が席を外されてましたので、そのまま出してしまいました。(『花咲』  
第1話)

(244) の場面もまた銀行の支店という職場である。行員が支店長に向けての発話であり、敬語対象はその場にいる第三者の課長である。三者の上下関係は、「話し手<第三者の課長<聞き手の支店長」である。第三者は聞き手より下だが、自分より上で、加えてその場に居合わせるため、(ラ) レル形式ぐらいにとどめて妥当だと思われる。菊地

(2010:170-172) は「社内の敬語」についてアンケート調査を行っており、ここの用法と似たような結果が出ている。

(245) の場面は銀行支店長のオフィスである。本部臨店班の相馬が不正をした支店長新田に向けての発話である。二人は昔上司(新田)と部下(相馬)の関係にあったことがあるが、その時相馬は新田にミスを負わされたことがある。今回同じ手口で今の部下に責任を負わせようとする新田のことが許せず、詰問している場面である。新田の支店長という地位と、今の部下がその場に居合わせていることを配慮しているためか、敬語は使っているが、最低限の(ラ) レル程度に抑えているように見える。そのほか、尊敬語で高めながら詰問するのは、より一層効果が出るという狙いも考えられる。

(246) と (247) はともに銀行員がお客さんに対する発話であるが、場面は異なっている。前者はATMがトラブルを起こし、その解決に駆け付けた行員の発話で、お客さんに対する言葉として敬度が足りないと言えるが、ここの「どうされましたか」はお客さん自身のことより、当時の状況について聞いているので、それほど不適切ともいえない。また後者は支店長須賀および営業課長門脇がお得意様の客と食事会をしている場面である。ここも主語がお客ではなく「会社移転の話」となっているので、(ラ) レル形式で済ませていると考えられる。

(248) と (249) は、親友の両親に向けての発話で、ともにくだけた日常の場面なので、あまり敬度の高い敬語を使うと逆に距離をとりすぎる恐れがあり、軽い敬度の敬語でほどよい距離感および親近感を保つためには(ラ) レルが適切と言えよう。

(245) こちらも大事な話なんです。新田支店長、あなたが犯してしまわれた罪について。(中略)あなたは、グランマリッジへの融資を、ある理由から、意図的に押し進められましたよね。(中略)新田さん、あなたはこれまで、何か問

題があっても、その責任を部下に押し付け、ご自身は生き延びて来られましたよね。（『花咲』第2話）

(246) どうされましたか。（『花咲』第3話）

(247) 会社移転のお話、決まられましたか。（『花咲』第3話）

(248) これ、全部お母さんが作られたんですか？（『ラスフレ』第5話）

(249) ー（タケル）どうぞ。 ー（修治）ああ…。 ー大分飲まれていたようなので。 ー（修治）フフッ。優しいんだな。（『ラスフレ』第10話）

Ⅲ人称敬語の（ラ）レル例文の例も挙げておく。（250）から（252）はお客、（253）上司の支店長およびお客、（254）は自分より年上の行員（先輩）に対して使う敬語である。その中、普通上司やお客に対してはより高い敬度の敬語が望ましいが、純粋な第三者であるため、（ラ）レルの敬度にとどめていると思われる。

(250) 三上社長が来店されたとき、店内はとても混み合っていました。（『花咲』第1話）

(251) そちらに署名された方は全員、入会金を支払ったのに、誰も紹介されていないそうなんです。（『花咲』第2話）

(252) うちの支店、毎日何人か要注意なお客様が来られるんですが、今日はその全員、花咲さんに回されてたんですよ。（『花咲』第3話）

(253) （支店長と）よく一緒にゴルフや食事に行かれてたようですから。（『花咲』第2話）

(254) この方達は、他の支店に異動されたんですか。（『花咲』第1話）

さらに最多の恩恵敬語（32%、25例）については、（255）から（257）のような話し手にとって望ましい行為を恩恵的に捉える表現がむしろ最も多くて一般的であるが、少し異例な表現も存在する。たとえば、（258）は対立立場の相手同士の間での発話で、敬語を使うことで逆に風刺・皮肉のニュアンスが生まれている。

(255) でも、相馬さんだって支店長の口座、調べてくださったんですよ。（『花咲』第1話）

- (256) それでは、早速社員の給与振り込みなど、一括してお願いしたいと思ってるんですが、口座を開設して頂きたいんです。（『花咲』第3話）
- (257) お前、親切に言ってくださってるのに。（『ラスフレ』第2話）
- (258) 牧野支店長には、問題の本質がご理解頂けていないようだ。（『花咲』第5話）

2番目に多い依頼敬語の「オ／ゴ〜クダサル」形式は、これまでと同様に、すべて依頼表現の「オ／ゴ〜クダサイ」形をとっている。20例のうち、14例も(259)のような「お待ちください」文であり、銀行や美容室などにおける接客業務およびそれに準じた場合に使われている。日常生活において馴染みのある言い方であろう。

- (259) では、こちらの番号札でお待ちください。（『花咲』第1話）

最後に高敬度敬語については、主にお客様（例(260) (261)）や会社（ここは銀行）の要職についた人物（例(261) (262) (263)）を直接相手にした場合に使われており、人間関係が使用の要因となっている。ただ、(264)のように詰問するのに用いられた威厳の表現も観察され、「文学（地の文）」で述べた皮肉用法と同様に、「優越感で使う敬語」（大石 1975:66）となっている。敬語に相手との距離を遠ざける語用論的効果もあるため、この用法に使われる敬語は、敬度が高いほど、皮肉や軽蔑、威厳の程度も高くなると思われる。

- (260) お急ぎでしたら、後で出して頂いても構いません。（『花咲』第3話）
- (261) ああ。でしたら、こうボリュームを出して。よくお似合いになります。（『ラスフレ』第1話）
- (262) 真藤本部長、お呼びでしょうか。（『花咲』第4話）
- (263) お聞きしたいことがあるんですが、支店長はなぜ、この融資を承認なさらなかったんでしょう。（『花咲』第4話）
- (264) これだけの融資資料を隠蔽しているということは、おたくの支店はよっぽどやましいことがおありなんじゃないかな。（『花咲』第4話）

ここで二つのドラマの相違についてもすこし触れておきたい。表 6-8 に示されているとおり、両者の敬語用例数には著しい差がある。『花咲』が 8 割以上を占めており、『ラスフレ』は 1 割余りの程度である。この結果には、両ドラマのセリフの密度も関係していると思われるが、それよりも、上下関係をもつ職場（『花咲』）と友達同士の日常生活（『ラスフレ』）という「場」と「人間関係」が関わる場所が大きかろう。定義にあるように、敬語の使用がこの二つの要素に左右されていることを裏付ける証拠と言えよう。

表 6-8 両ドラマにおける敬語表現の内訳

形式 敬語対象	尊敬語						謙譲語			合計
	低敬度	高敬度				依頼	恩恵			
	(ラ) レル	オ/ゴ～ ニナル	オ/ゴ～ ナサル	～ナサル	オ/ゴ～ダ (デス)	オ/ゴ～ クダサイ	～テ クダサル	オ/ゴ～ イタダク	～テ イタダク	
『花咲』	18 (14)	8 (6)	0	3 (2)	10 (8)	19 (15)	8 (6)	6 (5)	13 (10)	85 (66)
		21 (16)						27 (21)		
『ラスフレ』	3 (2)	1 (1)	0	0	0	6 (5)	3 (2)	0	3 (2)	15 (12)
		1 (1)						5 (4)		
小計	21 (16)	9 (7)	0	3 (2)	10 (8)	26 (20)	10 (8)	6 (5)	15 (12)	100 (78)
		22 (17)						22 (17)		
								32 (25)		

以上のデータと分析から、「テレビドラマ」については次のことが結論として言えよう。

- ①全体的に敬語表現は多いが、同じ話し言葉でも、友達同士の「場」より、職場のほうが敬語使用がよほど多い。
- ②話の相手があることで、Ⅱ人称敬語が大幅に増え、9 割近くを占めている。
- ③「オ/ゴ～クダサル」は依然としてすべて命令形をとっており、特に接客業務の場面に丁寧な依頼表現として多用されている。
- ④それを除いた他の諸形式では、「文学（地の文）」や「ブログ」と同様に、恩恵敬語が主流をなしており、全体の 3 割以上を占め、他人の行為を恩恵的に捉えることを好むという日本語の特徴を端的に表している。
- ⑤高敬度敬語が増えてきたが、職場でも日常生活でも軽い敬度の敬語がふさわしい場面があるので、(ラ)レル形式がまだ 2 割ほどを占めている。そのうち、「話」を主語とする特殊な用法も観察されている。
- ⑥「オ/ゴ～イタダク」形式と「オ/ゴ～ダ（デス）」形式では皮肉・軽蔑や威厳に使われる特殊な敬語用法も観察されたが、それぞれ 1 例しかなかった。

## 6.2.6 トーク番組

表 6-2 における「トーク番組」のデータを見ると、まず気付くのはその数の多さと種類の多様性であろう。これまで出てこなかった「お／ゴ～ナサル」まで現れ、何よりも高敬度敬語（そのうち特に「オ／ゴ～ニナル」）の数は著しく増え、34 例で 3 割近くも占めている。恩恵敬語は依然として多く、あわせて半分近く（49%、60 例）とかなりの高率である。主要考察対象の（ラ）レルは割合が下がり、17 例（14%）しか現れていない。

また敬語対象による統計データを示した表 6-9 を見ると、Ⅱ人称敬語は「テレビドラマ」と同様に主流であるが、Ⅲ人称敬語も少し増加している。これを理解するのも難くないであろう。テレビ番組は放送されるものなので、言及する第三者はたとえその場になくても、番組は見られるため、話題の本人あるいはその身近な者に常に配慮しなければならず、Ⅲ人称敬語もそれなりに出現頻度が上がってくると思われる。それにここのⅡ人称には、「聞き手側の領域の第三者」（15 例）および「その場にいる第三者」（11 例）に対するものがたくさん含まれているが、これについては後述する。

表 6-9 「トーク番組」における各敬語表現形式の「敬語対象」による統計データ<sup>114</sup>

形式 敬語対象	尊敬語					謙譲語				合計
	低敬度	高敬度				依頼	恩恵			
	(ラ)レル	オ／ゴ～ニナル	オ／ゴ～ナサル	～ナサル	オ／ゴ～ダ(デス)	オ／ゴ～クダサイ	～テクダサル	オ／ゴ～イタダク	～テイタダク	
Ⅲ人称	4 (5)	3 (4)	0	0	1 (1)	0	12 (15)	0	6 (7)	26 (32)
Ⅱ人称	9 (11)	16 (20)	2 (2)	6 (7)	0	10 (12)	17 (21)	2 (3)	11 (13)	72 (89)
直接引用文中のⅡ人称	1 (1)	0	0	0	0	0	0	0	1 (1)	2 (2)
小計	14 (17)	20 (24)	2 (2)	6 (7)	1 (1)	10 (12)	29 (36)	2 (3)	17 (21)	100 (123)
		28 (34)						20 (24)		
							49 (60)			

(ラ)レル形式を考察してみる。Ⅱ人称敬語の(ラ)レルは、ゲストと司会者の森田一義(タモリ)の発話に集中している。(265)と(266)のようにゲストが司会者の徹子やタモリに向けての発話、(267)のように司会者のタモリがゲストの安倍晋三首相に向けての発話、それに(268)のようにゲストが現場の観客に向けての発話、(269)のように司会者のタモリが現場の観客に向けて隣に座っているゲストについての発話など、実に様々な状況がある。

そして、Ⅲ人称敬語の例もまたタモリとゲストの発話に集中しており、(270)と(271)

<sup>114</sup> 「トーク番組」における依頼敬語のうち、「オ／ゴ～クダサイ」という依頼表現形をとらない用例は1例のみである。以下同。

のように話双方のどちらの領域ともいえない純粹の第三者のことについて敬語を軽く添えながら語るという感じである。

- (265) (小栗旬) さっき言われたように、帰ると、食べてきたものを伝えて、それを全部彼女がカロリー計算してくれたりとかはありますね。(『徹子』、小栗旬)
- (266) (加藤浩次) タモリさんマラソンされてるでしょう？(『テレフォン』、加藤浩次)
- (267) (安倍晋三) お酒飲まれますか。(『テレフォン』、安倍晋三)
- (268) (本田翼) (ラジオ体操) されてます？(『テレフォン』、本田翼)
- (269) (タモリ) (マツコさんが) 今、渋谷の開発を研究されてんですよ。(『テレフォン』、マツコ・デラックス)
- (270) (三上博史) で、19の時かな、初めて海を、海外に出るんですけど、それが『戦場のメリークリスマス』と大島渚さんの監督された映画の時に、…(『徹子』、三上博史)
- (271) (安倍晋三) 麻生さんのお宅はうちのすぐそばでね、何回かうちにも来られたことありますし、私も行ったことありますから、結構長い話してますよ。(『テレフォン』、安倍晋三)

この集中には、番組の性格あるいは司会者の特徴が大いに関わっている。表 6-10 における番組別の統計データを見ると、二つのトーク番組に出てくる敬語表現の数に大差がついていることが分かる。合計時間で言うと、それぞれ 2 時間と 3 時間程で、『テレフォン』のほうが 1 時間長くなっているが、数は逆である。そのうち、特に「オ／ゴ～ニナル」と「～テクダサル」の両形式に開きが大きく、『徹子』のほうの多さがかなり目立ち、しかもその主要使用者はともに徹子である。「オ／ゴ～ニナル」の 22 例のうち、21 例も徹子の発話で、「～テクダサル」も 28 例のうち、22 例も徹子の発話である。

発話者による統計データを示した表 6-11 を見ると、二つのトーク番組の違いはさらに明らかになる。つまり、『徹子』は司会者の徹子が高い敬度の敬語使用を好み、相手がいくら年下でもそれをしきりに口にするが、ゲストは敬語を使い慣れていないためか、話の内容に集中していて形式にまで気が回らないためか、逆に敬語を多く使っておらず、また

使ったとしても敬度が低いけれど使いやすい（ラ）レル形式が選ばれやすい（ゲストの敬語表現 13 例のうち、5 例も（ラ）レル形式である）傾向がみられる。

一方、『テレフォン』はよりくだけた雰囲気、全体的に敬語の出現頻度も敬度もさほど高くはない。司会者タモリの 17 例のうち、10 例も「お掛けください」という、トークが始まる前にゲストに席に座ってもらうための言葉で、その敬語使用の少なさが一目で分かる。

表 6-10 番組別の各敬語表現形式の統計データ

形式 敬語対象	尊敬語						謙讓語			合計
	低敬度 (ラ) レル	高敬度				依頼 オ/ゴ〜 クダサイ	恩恵			
		オ/ゴ〜 ニナル	オ/ゴ〜 ナサル	〜ナサル	オ/ゴ〜ダ (デス)		〜テ クダサル	オ/ゴ〜 イタダク	〜テ イタダク	
『徹子』	4 (5)	18 (22)	2 (2)	5 (6)	1 (1)	2 (2)	23 (28)	2 (3)	8 (10)	64 (79)
		25 (31)					33 (41)			
『テレフォン』	10 (12)	2 (2)	0	1 (1)	0	8 (10)	7 (8)	0	9 (11)	36 (44)
		3 (3)					9 (11)			
							15 (19)			
小計	14 (17)	20 (24)	2 (2)	6 (7)	1 (1)	10 (12)	29 (36)	2 (3)	17 (21)	100 (123)
		28 (34)					20 (24)			
							49 (60)			

表 6-11 番組別の発話者による統計データ

トーク番組	司会者	ゲスト	ほか <sup>115</sup>	合計	
『徹子』	53 (65)	11 (13)	1 (1)	64 (79)	100 (123)
『テレフォン』	14 (17)	21 (26)	1 (1)	36 (44)	

そして面白いことに、『テレフォン』は今回 10 回の放送を資料に使っているが、普遍的に敬語使用が少ない（1 例が 4 回、3 例が 3 回、2 例、4 例、5 例がそれぞれ 1 回）中、ある 2 回は 10 例も敬語が出現している。黒柳徹子と安倍晋三がゲストの回である。しかしこの 2 回もまた性質が異なり、徹子の回は 10 例のうち、8 例が徹子、2 例がタモリの発話であり、やはり徹子の言語習慣の影響が強い。一方、安倍の回は 10 回のうち、安倍とタモリが 5 例ずつ使っている。いくらバラエティー番組といっても、現役の首相が出演するとなると、司会者もやはり気を使わずにいられないのではないだろうか。

前述した「聞き手側の領域の第三者」（15 例）および「その場にいる第三者」（11 例）に対する敬語表現について検討してみる。まず「聞き手側の領域の第三者」に対する敬語

<sup>115</sup> 「ほか」というのは、司会者かゲストが引用した他人の発話に現れた敬語のことである。

15例はすべて徹子の発話で、(272)から(274)のように「～テクダサル」形式を用いて、ゲストの家族がその本人にしてくれることを、ゲストの身になって語っているものである。菊地(1997:202)によると、「クダサル」は「尊敬語の中でもいわば特別な一語」で、「一般の尊敬語は、主語を高めるだけで、文中に「……を」「……に」などの人物があっても、主語をそれらの人物より高く位置づけるという含みは、本来ない」が、「クダサル」の場合、「主語を高めるという〈機能〉に加え、主語(与え手)Xを受益者(受け手)Yよりも高く位置づけるという〈機能〉もあわせもっている」わけである。この例で言うと、つまりゲストの家族をその本人より高く位置づけること、逆に言えばゲスト本人を低めることになり、いかにも不適切な表現である。しかし、菊地(2010:171)における社内敬語の「ルール2」<sup>116</sup>を借用し類推すれば、ゲストの家族を高める結果、その本人をも高めることになる面があるので、納得できる使い方とも言えよう。

そして「その場にいる第三者」に対する敬語は、大体(275)と(276)のような視聴者に向けてゲストを紹介する発話か、(277)および前例(269)のような現場の観客に向けて隣に座っている相手のことについての発話である。話の直接相手ではないが、聞こえているので、「準聞き手」とでも呼べるような存在であり、「二人称並み」に配慮し敬語で待遇するのはもっともであろう。

(272) (徹子) でもなんか奥様がわりときしってくださる方で? (小栗旬)

(273) (徹子) お祖母様とても可愛がってくださるんですって? (佐々木希)

(274) (徹子) でもお父様はお台所で、ご飯作ってくださるたりもしたんだけど、その時いつも大きい声で歌を歌っていらしたんですって? (篠原涼子)

(275) (徹子) 篠原涼子さん、今日のお客様です。初めて出ていただきました。

(『徹子』、篠原涼子)

(276) (徹子) それからなんとご結婚、お二人のお嬢さまをお産みになって、上のお嬢様もう3歳になるという、木村佳乃さん、今日のお客様です。(木村佳乃)

(277) (徹子) あたしがお茶室みたいなところでお食事させていただくんでしょ、タモリさん運んでくださるんですけど、そのところ入ってくるんですけど、…

<sup>116</sup> 菊地(2010:171)における社内敬語の「ルール2」は、「聞き手よりは下の人物でも、その人物を立てることで聞き手のことをも立てる結果になる場合は、問題の人物を高めてよい(高めるべきである)」というものである。

(黒柳徹子)

以上のデータと分析から、「トーク番組」については次のことが結論として言えよう。

①全体的に敬語の量が多いが、その使用は番組の性格という「場」の性質や司会者個人の言語習慣に大きく左右され、『テレフォン』より『徹子』のほうが敬語の頻度も敬度も高い。

②「テレビドラマ」と同様にⅡ人称敬語が主流をなしているが、「聞き手側の領域の第三者」および「その場にいる第三者」の場合が多く、ゲストを中心に話を展開させる「トーク番組」の特徴と言える。

③「オ／ゴ～クダサル」は1例以外はすべて命令形をとっており、主にトークが始まる前にゲストに席に座ってもらうために使われている依頼表現である。

④それを除いた他の諸形式では、「文学（地の文）」や「ブログ」、「テレビドラマ」と同様に、恩恵敬語が依然として比重が大きく、あわせて全体の半分近く（49%、60例）を占めている。

⑤丁寧な言い方を好む黒柳徹子は「オ／ゴ～ニナル」と「～テクダサル」などをしきりに口にするが、（ラ）レル形式は一度も使っておらず、全体的に敬度の高い敬語のほうが多い。一方、ゲストやタモリはそれほど敬語を意識していないようにみえて、ほかの形式とあわせて、軽い敬度の（ラ）レル形式も使ったりしている。

### 6.3 本章のまとめ

上でみてきた六つのジャンルにおける敬語表現の特徴をまとめると、次のようになる。

①敬語の使用には「場」が影響し、客観的事実報道が中核をなす「新聞記事」および「テレビニュース」の「場」と、「表出文」と「言い立て文」にまたがっている「文学（地の文）」の「場」においては、敬語の使用はきわめて少なく、形式の種類も非常に限られる。一方、自己アピールや注目集めなどを目的とする「ブログ」の「場」、「テレビドラマ」における職場や日常生活の「場」、および「トーク番組」におけるゲストを中心に話題を展開させる対談の「場」は、ジャンル自体の性質という制限がなくなり、自由に表現できるため、敬語使用が前三者より大幅に多い。

②敬語対象の面では、「新聞記事」「文学（地の文）」「ブログ」ではⅡ人称敬語とⅢ人称敬語がほぼ半々であり、「テレビニュース」ではⅢ人称敬語が主流であるが、「テレビドラマ」と「トーク番組」ではⅡ人称敬語が中核となっている。「テレビドラマ」と「トーク番組」は対話をする直接相手があるため、主にⅡ人称敬語が使われるのはもつともであり、「テレビニュース」も報道文のみなので当然登場人物に対する敬語が用いられる。

しかし、他の3つのジャンルでは、その結果を導いた原因はそれぞれ違う。「新聞記事」と「文学（地の文）」はその性質上、読み手を意識しないのが普通であるが、「新聞記事」では新聞社から読者への呼び掛け、読者の質問への回答や、「文学（地の文）」では発話や手紙からの直接引用、読み手への訴えなどがあるため、Ⅱ人称敬語の存在の場を作っている。一方、「ブログ」はもともと読み手を意識した内容が多いため、Ⅱ人称敬語が多い。

③今回の資料に出ている「オ／ゴ〜クダサル」形式（全部で55例）は、「トーク番組」における1例以外はすべて命令形の「オ／ゴ〜クダサイ」をとっており、丁寧な依頼表現として使われている。使い方の単一化が認められる。

④それを除いた他の諸形式では、「新聞記事」と「テレビニュース」以外のジャンルにおいて、いずれも恩恵敬語の占める割合が第一位となっている。このことは、他人の行為を恩恵的に捉えることを好むという日本語の特徴を端的に表している。一方、（ラ）レル敬語の使用の少なさの一因にもなっている。

⑤全体的に、（ラ）レル敬語は様々な場面や人間関係に用いられているが、総じて言えば、軽い敬度の敬語がふさわしい場合に使われている。たとえば「新聞記事」のようにジャンルの性質の制限がある場合、手紙文の引用におけるⅢ人称者に対するもので敬度がそれほど要求されない場合、くだけたスタイルの文章において読み手に親近感を抱かせるための場合、職場でも日常生活において軽い敬度の敬語がふさわしい場合、それに話し手がそれほど敬語を使い慣れていないか意識していない場合などである。ただ一つ特殊な用法がある。「テレビニュース」における敬語はほとんどすべて皇室敬語であり、そして皇室敬語は9割以上が（ラ）レル形式となっている。しかし、ここは敬度の問題ではなく、ニュース報道の中立性、客観性および簡潔さを求める性格によるところが大きいと考えられる。

⑥「オ／ゴ〜ニナル」、「オ／ゴ〜イタダク」と「オ／ゴ〜ダ（デス）」形式では皮肉・軽蔑や威厳に使われる特殊な敬語用法も観察されたが、わずか数例しかなかった。また、「オ／ゴ〜ニナル」形式では動物や物に使われる異例な表現も現れ、ユーモアを感じさせる敬語のもう一つの特殊用法となっている。

## 第7章 終章

本章では、六つのジャンルについて総合的考察を行った上で、本研究の成果に基づいて日本語教育への提言をまとめ、今後の課題について述べる。

### 7.1 本研究の総合的考察

第3章から第6章において、助動詞（ラ）レルの四つの用法—受身・可能・自発・尊敬—が六つのジャンルにおいてどのように使われているのかを考察してきた。各用法における六つのジャンルの類似点および相違点を各章の結論に従いまとめて示すと、表7-1から表7-4のようになる（表7-1から表7-4における「>」「<」「=」は前項と後項の数の関係を表す）。

表7-1は、受身における六つのジャンル間の類似点と相違点を示したものである。本論文で考察した項目をみると、六つのジャンルはその多くで類似性を示しており、相違点が認められるのは「主語の有生性」と「受身文の型」のみである。その「主語の有生性」も、主語が顕在か非顕在かという点からみると、各ジャンルは同様な傾向にあると言える。

表 7-1 受身における六つのジャンル間の類似点と相違点

受身		説明	特殊なジャンル
類似点	節	主節と接続節に現れる受身文：ほぼ半々	なし
	直接・間接	直接受身>間接受身	なし
	受身動詞	他動詞による受身>自動詞による受身	なし
	迷惑性	中立的な受身>迷惑性をもつ受身	テレビドラマ： 迷惑性をもつ受身>中立的な受身
	動作主の有生性	有情物動作主>非情物動作主	なし
	主語の有生性	主語が有情物の場合：非顕在が多い 主語が非情物の場合：顕在が多い	なし
相違点	主語の有生性	新聞記事、テレビニュース：非情物主語>有情物主語 テレビドラマ、トーク番組：有情物主語>非情物主語 文学（地の文）、ブログ：中間的	
	受身文の型	新聞記事、文学（地の文）、ブログ、テレビニュース： 「非情物主語顕在・有情物動作主非顕在」型受身が第一位 テレビドラマ、トーク番組： 「有情物主語・有情物動作主」型受身が8割以上を占めており、主語も動作主も非顕在のほうがはるかに多い	

表 7-2 は、可能における六つのジャンル間の類似点と相違点を示したものである。本論文で考察した項目をみると、受身と同様に、六つのジャンルの間には類似性が認められる。特殊なジャンルが多いように見えるが、それは「テレビドラマ」と「文学（地の文）」に集中している。また、「テレビニュース」に実現可能がないことと、「新聞記事」と「トーク番組」に実現可能が少ないことも、ジャンル間の相違点をもたらず一因になっている。

表 7-2 可能における六つのジャンル間の類似点と相違点

可能	説明	特殊なジャンル	
類似点	四つの可能表現形式	全体的に、可能の意味においても、可能の条件においても、各形式はほぼ同様な傾向を見せている。	<u>文学（地の文）</u> ： 形式間でずれが出たが、似ている部分は多い
	可能の意味（ラレル）	潜在可能＞実現可能 非過去テンス＞過去テンス 肯定形＞否定形	<u>テレビドラマ</u> ： 否定形＞肯定形 <u>文学（地の文）</u> ： 実現可能＞潜在可能 否定形＞肯定形 過去テンスも大幅に増えている
	可能の条件（ラレル）	状況可能：ほかより多い	<u>文学（地の文）</u> ： 心情可能＞状況可能
	相関性（ラレル）	潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンス：強い相関性が見られる	<u>テレビニュース</u> ： 実現可能がない <u>トーク番組</u> ： 非過去テンスの実現可能＝過去テンスの実現可能
	パターン（ラレル）	潜在可能：「非過去＋肯定」のパターンが主流 実現可能：「過去＋否定」のパターンが主流	<u>テレビドラマ</u> ： 潜在可能：「非過去＋否定」のパターンが主流 <u>テレビニュース</u> ： 実現可能がない <u>新聞記事、トーク番組</u> ： 実現可能の数が少ないため、特に目立ったパターンはない

表 7-3 は、自発における六つのジャンル間の類似点と相違点を示したものである。本論文で考察した項目をみると、六つのジャンルはここでも多くの点で類似性を示している。可能と同様に、ここでも「文学（地の文）」に特異性が集中している。なお、音声言語の三つのジャンルにおいては、自発表現の数や異なり動詞の数がきわめて少ないため、相違が生じる一要因にはなっている。

表 7-3 自発における六つのジャンル間の類似点と相違点<sup>117</sup>

	自発	説明	特殊なジャンル
類似点	節	主節>接続節	なし
	動作主体	一人称>三人称	文学（地の文）： 三人称>一人称
	動作主マーカー	稀にしかない	なし
	テンス	非過去テンス>過去テンス	文学（地の文）： 過去テンス>非過去テンス
	構文	典型構文「Yガ（モ） V-(r)areru」のほか、判断型自発に多用される「Yト V-(r)areru」構文もたくさん使われている。	テレビドラマ、トーク番組： 典型構文「Yガ（モ） V-(r)areru」がない
	自発の型	判断型の自発：主流	文学（地の文）： （ラ）レル形式：感情生起型>想起型 >判断型
	根拠提示の仕方	根拠示唆のタイプII：優位	文学（地の文）： 可能動詞形式：根拠提示を伴わないタイプIIIが多い
	肯定・否定	（ラ）レル形式：すべて肯定形 可能動詞形式：否定形も用いられている	なし

表 7-4 は、敬語における六つのジャンル間の類似点と相違点を示したものである。敬語について、本論文では各表現形式の数を集計することと、敬語対象に絞って考察した。そのため、相違点が二つしかないように見えるが、大きな違いがある。敬語表現は「場」と「人間関係」によって決定されるものであり、この二つはともにジャンル自体の性質、即ち内容や表現上の規範があるのかどうか、またどれほど読み手や聞き手を意識しているのかに関わっている。そのため、六つのジャンルの間に顕著な差異が現れるのは当然なことである。

<sup>117</sup> 「テレビニュース」の自発表現はゼロなので、この表には記していない。

表 7-4 敬語における六つのジャンル間の類似点と相違点

敬語		説明	特殊なジャンル
類似点	「オ／ゴ〜クダサル」形式	1例以外はすべて命令形の「オ／ゴ〜クダサイ」をとっており、丁寧な依頼表現として使われている。	<u>テレビニュース</u> ： 「オ／ゴ〜クダサル」形式がない
	「オ／ゴ〜クダサル」を除いた他の諸形式	恩恵敬語の占める割合：一番多い	<u>新聞記事</u> ： (ラ) レル敬語 > 恩恵敬語 <u>テレビニュース</u> ： 恩恵敬語がない
	(ラ) レル敬語	軽い敬度の敬語がふさわしい場合に使われている	<u>テレビニュース</u> ： 皇室敬語に使われた (ラ) レル形式は敬度の問題ではなく、ニュース報道の中立性、客観性および簡潔さを求める性格によるところが大きいと考えられる。
相違点	場	<u>新聞記事、テレビニュース、文学（地の文）</u> ： 敬語の使用はきわめて少なく、形式の種類も非常に限られる。 <u>ブログ、テレビドラマ、トーク番組</u> ： ジャンル自体の性質という制限がなくなり、自由に表現できるため、敬語使用が前三者より大幅に多い。	
	敬語対象	<u>新聞記事、文学（地の文）、ブログ</u> ：Ⅱ人称敬語とⅢ人称敬語がほぼ半々 <u>テレビニュース</u> ：Ⅲ人称敬語 > Ⅱ人称敬語 <u>テレビドラマ、トーク番組</u> ：Ⅱ人称敬語 > Ⅲ人称敬語	

表 7-1 から表 7-4 をみると分かるように、用法をとわず、六つのジャンルの間には相違点よりも、類似点のほうが多い。この点については、類似点はその用法自体の特徴を示しているが、相違点はジャンルの性格によるところが大きいと言ってよい。たとえば、ほかのジャンルに比べ相違点の多い「文学（地の文）」の場合、その要因は、主に物語を過去の出来事として描く作法や、登場人物の心理・感情などの内面描写を重視すること、三人称小説という特殊な表現技法などといったジャンル自体の性質に求めることができる。

次は助動詞（ラ）レルだけを対象に考察する。1.3 節の表 1-4 と表 1-5 を、表 7-5 と表 7-6 として再掲する。この二つの表に示された各ジャンルの使用率から、まず第一に、「ブログ」は非常に話し言葉に近い性質を見せており、「テレビニュース」は非常に書き言葉に近い性質を見せているという結論が導き出せるだろう。

表 7-5 六つのジャンルにおける助動詞（ラ）レルの四用法の使用率

ジャンル 用法	文字言語						音声言語						合計	
	新聞記事		文学（地の文）		ブログ		テレビニュース		テレビドラマ		トーク番組			
受身	92%	1322	92%	1338	82%	357	96%	215	78%	197	80%	132	90%	3561
可能	5%	77	6%	87	11%	47	3%	7	16%	41	10%	16	7%	275
自発	2%	28	2%	30	2%	10	0%	0	0%	0	0%	0	2%	68
尊敬	1%	9	0%	1	5%	21	1%	3	6%	16	10%	17	2%	67
合計	100%	1436	100%	1456	100%	435	100%	225	100%	254	100%	165	100%	3971

表 7-6 可能・自発・敬語のほかの形式も含めた場合の統計データ

ジャンル 用法	文字言語						音声言語						合計	
	新聞記事		文学（地の文）		ブログ		テレビニュース		テレビドラマ		トーク番組			
受身	72%	1322	64%	1338	41%	357	84%	215	37%	197	35%	132	60%	3561
可能	25%	447	32%	674	48%	414	15%	38	48%	256	33%	125	33%	1954
自発	2%	34	3%	62	1%	12	0%	0	1%	4	1%	2	2%	114
敬語	1%	21	1%	18	10%	84	1%	3	15%	78	32%	123	5%	327
合計	100%	1824	100%	2092	100%	867	100%	256	100%	535	100%	382	100%	5956

助動詞（ラ）レルの分布のみを示した表 7-5 を検討する。（ラ）レルの四つの用法の使用率はジャンルをとわず似たような傾向を示しており、大きな差はない。受身の用法はいずれのジャンルにおいても主流をなしており、最も割合の低い「テレビドラマ」でも8割近くを占めている。そのなかでも「テレビニュース」はもっとも極端であり、受身用法が96%と高い。助動詞（ラ）レルはジャンルをとわず受身用法を中心に使われていることが分かる。

可能用法の（ラ）レルは受身に次いで二番目に高い使用率を示している。しかし、最も割合の高い「テレビドラマ」でも16%に過ぎず、「テレビニュース」にいたってはわずか3%に過ぎず、受身との間にきわめて大きな差が認められる。受身に比べると、可能に用いられる助動詞（ラ）レルは大幅に少ないことが分かる。そして、日常の話し言葉に最も近い「トーク番組」に出現した（ラ）レルの可能表現は、その半分以上が「見レル」「食ベレル」のようないわゆる「ら抜き言葉」である。図 7-1 に見られるように、話し言葉は常に書き言葉に先立って変化していると言われるが、こうした「ら抜き言葉」の可能表現の使用が広がっていくにつれて、それが文法的に正しい表現と認定される可能性がある。そうすると、「ら抜き言葉」の可能表現は助動詞「ラレル」による活用ではなく、「書ケル」「飲メル」のような可能動詞として変更を成し遂げ、（ラ）レルの可能用法もそれで終末を迎えてしまう可能性も考えられよう。

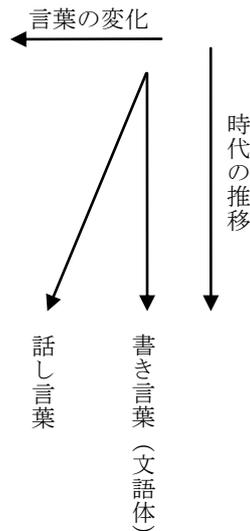


図 7-1 野村 (2011:7) における「話し言葉の時代的变化」

尊敬用法の(ラ)レルと自発用法の(ラ)レルは、六つのジャンルにおいて順番が前後することがあるが、使用率からすれば、全体的に尊敬のほうがやや多い。自発の(ラ)レルに使われる動詞はきわめて限られており、使用範囲が非常に狭いが、尊敬の(ラ)レルにそういった語彙面での制限はなく、幅広い表現に使える。同じ数が少ないといっても、尊敬のほうがより使われていると考えられる。

一方、可能・自発・敬語<sup>118</sup>表現のほかの形式を加えた表 7-6 をみると、一目で、どのジャンルにも用法間の割合に大きな変化が起きていることが分かる。自発は依然として動詞の制限によって数に目立った違いはないが、可能と敬語は著しく増えており、特に「ブログ」と「テレビドラマ」では受身と可能の順位に逆転が起きている。

また「トーク番組」では、敬語の増加が際立ち、受身や可能とほぼ同じ割合となっている。本論文が考察対象にしている敬語形式は尊敬語の添加形式(謙讓語の添加形式も2つ含まれているが)に限定されており、まだほかの敬語分類の添加形式や交替形式が含まれていないことを考慮に入れると、実際の使用においては、敬語の割合はこれよりもまだまだ高いと推測できる。

同じ表現における他の形式の存在が、可能・尊敬の(ラ)レルの使用の少なさにつながり、さらに(ラ)レル形式における用法間の偏りという結果をもたらしていると考えられる。

<sup>118</sup> 前述したように、比較のために謙讓語の2形式も含めているため、ここは「尊敬」ではなく「敬語」という用語になっている。詳しくは第6章を参照されたい。

## 7.2 本研究から日本語教育への橋渡し

本研究は助動詞（ラ）レルを中心に、現代日本語における受身・可能・自発・尊敬という四つの表現について、文字言語と音声言語の両面から考察を行った。その結果、助動詞（ラ）レルの使用実態と、（ラ）レル形式を含めた受身・可能・自発・敬語表現の使用実態が明らかになり、その背後に潜んでいる原因も若干判明した。

そこで、本論文の最初で提示した中国語を母語とする日本語学習者を対象とした日本語教育におけるいくつかの問題点との関係を考えると、参考になりうると思われることは以下であろう。

①受身表現については、中国語を母語とする日本語学習者向けの教科書をみると、本論文の最初でも述べたように、受身の各下位分類が重要さの区別もなく同一に扱われ、しかも集中的に学習者に投げかけられる傾向が見られる。本論文の統計から、いずれのジャンルにおいても、直接受身と他動詞による受身が大多数を占め、部分・所有・第三者受身の使用は非常に少ないことが分かった。特に間接受身の典型例としてよく使われる「雨ニ降ラレル」文は、今回、1回しか現れなかった。したがって、受身の学習においては、最初から全分類を一斉に取り上げるのではなく、まず直接対象受身を導入し、間接受身にはさほど力を入れなくてもよいのではないだろうか。

また、筆者本人の経験からすれば、日本語の授業では受身が迷惑の意味を表すと教わった印象が強い。しかし本論文の統計をみれば、迷惑性について中立的な受身もたくさん用いられていることが分かる。それゆえ、日本語の受身文は、動詞の意味によって迷惑・被害を表す場合もあれば、そうでない場合もあると教えた方が、より受身の使用実態に合致すると思われる。さらに迷惑・被害を表す受身文の指導にあたっては、それが「恩恵」を表す「～テモラウ」構文と意味・構文上において対比をなしている点を盛り込むと有益であろう<sup>119</sup>。

②可能表現については、現代日本語において、各活用型の動詞の可能形式がほぼ定着している現状を踏まえ、潜在可能と非過去テンス、実現可能と過去テンスの間の相関性を提示すれば有益であろう。また、可能の意味と可能の条件において、それぞれ潜在可能と状

<sup>119</sup> この点については、寺村（1982:251）、奥津（1983:70）、工藤（1990:53）、庵（2012:107）などが言及している。また、教授法の面から具体的に論述しているものとして、山下（1997）がある。

況可能が大きな比重を占めており、重点的に練習させるのも習得には有効であると思われる。なお、潜在可能と実現可能にはそれぞれ主流のパターンがあり、この点も習得の際には参考になるであろう。

③自発表現については、その使用が現代日本語において非常に限られるという現状が判明した。それを踏まえれば、代表的な思考・感情・感覚動詞を中心に、一人称・非過去テンスの文を教えるのが有益であろう。また、動詞によって慣用の構文に偏りがみられるため、動詞とその慣用の構文をあわせて教えるのも有益となるであろう。

④敬語表現については、二大影響要素である「場」と「人間関係」のほかに、敬度という属性も重要である。また、「オ／ゴ〜クダサル」がほとんど依頼表現形「オ／ゴ〜クダサイ」で使われていることを提示するのも有益である。さらに、他人の行為を恩恵的に捉えるという日本語の特徴を強調し、尊敬・謙遜の意味あいのほか、恩恵的行為の授受を表す意味もあわせ持っている「オ／ゴ〜イタダク」「〜テクダサル／イタダク」の練習に力を入れれば、より自然な日本語表現へと繋がっていくと思われる。

### 7.3 今後の課題

今回の研究に使った六つのジャンルは、「書き言葉性・話し言葉性」および「改まりの度合」を考慮した点である程度代表的とはいえるが、今後はより一層ジャンルの幅を広げて、さらに広範囲に比較対照することも意義があると思われる。これに加え、また時代の幅も広げていけば、助動詞（ラ）レルの四用法の通時的変化も徐々に判明し、将来の成り行きを予測できる可能性がある。

受身表現については、今回の統計で、動作主マーカ―のデータもあったが、紙面の都合上それについて分析することができなかった。特に従来書き言葉に多用されると言われている「ニヨッテ」が、今回の文字言語ジャンルの統計であまり出てこなかったことは興味深く、更なる考察を要する。また、使役受身および被修飾語が受身構造の主語となっている連体修飾節も今回の処理から除いた。それは使役受身が受身の要素を含んでいるが、独自の構造・意味・用法をもっていることと、連体修飾節に現れる受身が迷惑性の点において特殊な性質をもっていることを考えたからである<sup>120</sup>。今後はこれらの課題も視野に入れ、研究を重ねていきたい。

<sup>120</sup> 詳しくは前田（1989）などを参照されたい。

可能表現については、今回の統計で、可能文の格パターン、主語の有生性や、語用論的意味などについてのデータも集計してあったが、分析までには及んでいない。今後の課題にしたいものである。

自発表現については、今回の資料に現れた用例数が少ないため、深く掘り下げることができなかった。今後はその代表的動詞を手掛かりに、より多くのジャンルからデータを集め、特徴を探り出すことが望まれる。

敬語表現については、今回音声言語の三つのジャンルでは、本論文で扱った以外の表現形式のデータも収集したが、焦点をぼかさないうために使用しなかった。今後は考察対象の敬語分類もジャンルも増やして、敬語の使用実態に対するより全面的な把握を目指していきたい。

## 参考文献

- 安達太郎（1995）「思エルと思ワレル—自発か可能か—」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版、pp.121-130
- 浅田秀子（2014）『敬語の原理及び発展の研究』東京堂出版
- 文化審議会（2007）「敬語の指針」文化庁ホームページ  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo\\_tosin.pdf](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf)  
 （最終アクセス日 2017年4月6日）
- 張麟声（1997）『現代日本語の受動文についての記述的研究』大阪大学大学院文学研究科博士論文
- 張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—』スリーエーネットワーク
- 橋本進吉（1969）『助詞・助動詞の研究（講義集三）』岩波書店
- 畠山真一（2014）「知覚動詞「見える」と「聞こえる」の語彙的意味について」『尚絅語文』第3号、pp. A16-24
- 早津恵美子（1987）「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』第6号、pp.79-109
- 許明子（2004）『日本語と韓国語の受身文の対照研究』ひつじ書房
- 日高水穂（1995）「オ・ゴ～スル類と～イタス類と～サセテイタダク—謙譲表現—」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下） 複文・連文編』くろしお出版、pp.676-684
- 堀川智也（1992）「現代日本語の自発について」『言語文化部紀要』（北海道大学）第22号、pp.171-183
- 藤井正（1971）「自発」松村明編『日本文法大辞典』明治書院、p.301
- 井島正博（1991）「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版、pp.149-189
- 石黒圭（2014）「指示語にみるニュースの話し言葉性」石黒圭、橋本行洋編『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房、pp.115-135
- 庵功雄（2012）『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える [第2版]』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著、松岡弘監修（2000）『初級を教える人のた

- めの日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘著、白川博之監修（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 岩淵匡、桜井光昭、武部良明、森田良行共編（1989）『日本文法用語辞典』三省堂
- Jacobsen, W.M. (1992) *The Transitive Structure of Events in Japanese*, Kuroshio Publishers
- 神田寿美子（1961）「現代東京語の可能表現について」『日本文学』第16巻、pp.70-84
- 金子尚一（1980）「可能表現の形式と意味（Ⅰ）——“ちからの可能”と“認識の可能”——」『共立女子短期大学（文科）紀要』第23号、pp.62-76
- 加藤彰彦、佐治圭三、森田良行編（1989）『日本語概説』おうふう
- 川村大（2004）「受身・自発・可能・尊敬——動詞ラレル形の世界——」尾上圭介編『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店、pp.105-127
- 川村大（2014）「自発」日本語文法学会編『日本語文法事典』大修館書店、pp.258-259
- 菊池康人（1997）『敬語』講談社学術文庫
- 菊池康人（2010）『敬語再入門』講談社学術文庫
- 小池清治、小林賢次、細川英雄、山口佳也編集（2002）『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 国文学編集部編（1977）『あなたも敬語が正しく使える』学燈社
- 国語審議会（1952）「これからの敬語」文化庁ホームページ  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/01/tosin06/index.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/01/tosin06/index.html)  
 ml（最終アクセス日2017年4月6日）
- 国語審議会（2000）「現代社会における敬意表現」文化庁ホームページ  
[http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/22/tosin02/index.html](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/22/tosin02/index.html)  
 ml（最終アクセス日2017年4月6日）
- 高恩淑（2011）「現代日本語における可能表現の意味分類について—実現可能性の在り処を基準に—」『京都大学言語学研究』第30号、pp.51-70
- 小矢野哲夫（1980）「現代日本語可能表現の意味と用法（Ⅱ）」『大阪外国語大学学報』第48号、pp.19-33
- 工藤真由美（1990）「現代日本語の受動文」『ことばの科学』第4集、むぎ書房、pp.47-102
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』

ひつじ書房

- 久野暲（1983）『新日本文法研究』大修館書店
- 林青樺（2007）「現代日本語における実現可能文の意味機能—無標の動詞文との対比を通して—」『日本語の研究』第3巻第2号、pp.31-46
- 前田直子（1989）「使役受動態」の意味と用法『言語・文化研究』第7巻、pp.25-32
- 益岡隆志（1991）「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版、pp.105-121
- 益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 益岡隆志（2014）「受身<sup>1)</sup>」『日本語文法事典』大修館書店、pp.47-49
- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』明治書院（藤井正「自発」p.301、吉田金彦「自発の助動詞」pp.301-302）
- 松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』勉誠社
- 三上章（1953）『現代語法序説：シンタクスの試み』刀江書院
- 南不二男（1974）「敬語」『現代日本語の構造』大修館書店、pp.221-283
- 望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析—中国語との対照から—」『東京外国語大学論集』第78号、pp.85-106
- 森田良行（1977）『基礎日本語——意味と使い方——』角川書店
- 森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』東京堂
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎（2003）『コミュニケーション力をみがく 日本語表現の戦略』日本放送出版協会
- 森山卓郎・渋谷勝己（1988）「いわゆる自発について——山形市方言を中心に——」『国語学』第152集、pp.92-80
- 守屋三千代（1992）「小説の中の視点と文法—時制と相を中心に—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』第4号、pp.98-120
- 村田年、山崎誠（2011）「手」の慣用句を指標とした文章ジャンルの判別——現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて」『日本語と日本語教育』第39号、pp.75-88
- 中井政喜、呂雷寧（2014）「日本語における可能の意味について」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第47号、pp.1-12
- 中島悦子（2007）『日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—』

おうふう

- 日本語記述文法研究会（編）（2009）『現代日本語文法 2 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版
- 西田直敏（1977）「知っておかなければならない敬語のルールは」国文学編集部編『あなたも敬語が正しく使える』学燈社、pp.28-49
- 仁田義雄（1991）「ヴォイス的表現と自己制御性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版、pp.31-57
- 仁田義雄（1992）「持ち主の受身をめぐって」藤森ことばの会編『藤森ことば論集』清文堂、pp.1-34
- 野村剛史（2011）『話し言葉の日本史』吉川弘文館
- 小川美由紀（1995）「「れる」「られる」の表現と阿部公房『砂の女』について」『佐賀大國文』第23号、pp.229-231
- おぎそ としのぶ・小木曾智信（2009）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における可能表現のバリエーション」『日本語学会 2009 年度秋季大会予稿集』、p.190
- 大場美穂子（2012）「実現可能文の用法について」『日本語と日本語教育』第40号、pp.1-17
- 大石初太郎（1975）『敬語』筑摩書房
- 大石初太郎（1976）「待遇語の体系」『佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集』表現社、pp.881-903
- 奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」言語学研究会編『ことばの科学』第1巻、むぎ書房、pp.181-212
- 奥津敬一郎（1983）「何故受身か？——〈視点〉からのケース・スタディ——」『国語学』第132集、pp.65-80
- 奥山益朗（1976）『現代敬語読本：人間関係のエチケット』ぎょうせい
- 尾上圭介（1998a）「文法を考える 5 出来文（1）」『日本語学』第17巻7号、pp.76-83
- 尾上圭介（1998b）「文法を考える 6 出来文（2）」『日本語学』第17巻10号、pp.90-97
- 尾上圭介（1999）「文法を考える 7 出来文（3）」『日本語学』第18巻1号、pp.86-93
- 尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『言語』第32巻第4号、pp.34-41
- 王辰寧（2017）「中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用分析—作文コーパスをデータとして—」『ありあけ 熊本大学言語学論集』第16巻、pp.67-90
- 佐藤勢起子・仁科浩美（1997）「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」『日本

- 語教育』第 93 号、pp.61-71
- 佐藤利行、李均洋、高永茂（2009）『日語敬語新説』外語教学与研究出版社
- 澤田治美（2006）「日本語の自発文について」上田功・野田尚史編『言外と言内の交流分野 小泉保博士傘寿記念論文集』大学書林、pp.265-274
- 志波彩子（2009）「認識動詞の非情主語受身文—「見られる」「思われる」「言われる」「呼ばれる」を中心に—」『東京外国語大学日本研究教育年報』第 13 号、pp.1-24
- 志波彩子（2013）「「ト見ラレル」の推定性をめぐって—ラシイ、ヨウダ、（シ）ソウダ、ダロウとの比較も含め—」『日本語文法』13 卷 2 号、pp.122-138
- 渋谷勝己（1993a）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第 33 卷第 1 号、pp.i-262
- 渋谷勝己（1993b）「意味の縮小と文体差—可能の補助動詞エルをめぐって—」近代語学会編『近代語研究 第九集』武蔵野書院、pp.409-431
- 渋谷勝己（1995）「可能動詞とスルコトガデキル—可能の表現—」宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版、pp.111-120
- 渋谷勝己（2002）「自発」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』東京：大西拓一郎、pp.29-35（初版 2 刷り：2002 年 12 月）
- [http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG\\_index.htm](http://www2.ninjal.ac.jp/takoni/DGG/DGG_index.htm)（最終アクセス日 2017 年 4 月 6 日）
- 渋谷勝己（2005）「日本語可能形式にみる文法化の諸相」『日本語の研究』第 1 卷 3 号、pp.32-46
- 渋谷勝己（2006）「自発・可能」『シリーズ方言学 2 方言の文法』岩波書店、pp.47-92
- 杉本和之（1988）「現代語における「自発」の位相」『日本語教育』第 66 号、pp.217-228
- 鈴木重幸（1972a）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木重幸（1972b）『文法と文法指導』むぎ書房
- 鈴木泰（2011）「日本語の史的変化」『中日理論言語学研究会第 26 回研究会発表論文集』、pp.65-68
- 高田博行（2007）「歴史語用論の可能性——甦るかつての言語的日常」『言語』第 36 巻第 12 号、pp.68-75
- 滝浦真人（2005）『日本の敬語論——ポライトネス理論からの再検討』大修館書店
- 田中祐司（1997）「日本語受動文の被害性について」『日本言語学会第 115 回大会予稿集』、

pp.59-64

- 谷守正寛（2000）「間接受身文に対応する文についての一考察」『日本語教育』第107号、pp.45-54
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 第I巻』くろしお出版
- 時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店
- 徳永美暁（1998）「日本語受身文の解釈：「被害」の受身は存在するのか？」『先端的言語理論の構築とその多角的な実証 2-B』pp.447-464
- 富阪容子（1999）「新聞記事に見られる断定保留表現」『言語と文化』第3巻、pp.137-147
- 内田万里子（2002）「「～と思われる」と「～と思う」をめぐって」『日本語・日本文化研究』（京都外国語大学留学生別科）第9号、pp. 32-40
- 于康（2009）「日漢所有関係被動句与所有物共現的語義条件」『日語学習与研究』2009年第4期、総143号、pp.2-9
- 熊仁芳（2013）「中国語母語話者の日本語受身文の誤用実態—誤用コーパスの調査に基づき—」『北研学刊』第九号、pp.5-17
- 山田孝雄（1924）『敬語法の研究』宝文館
- 山岡政紀（2003）「可能動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』13号、pp.1-36
- 山下好孝（2001）「迷惑受け身のプロトタイプ」『北海道大学留学生センター紀要』第5号、pp.1-15
- 山内博之（1997）「日本語の受身文における「持ち主の受身」の位置づけについて」『日本語教育』第92号、pp.119-130
- 四方田千恵（1991）「中国人学習者における可能表現の誤用分析」『言語文化と日本語教育』第2号、pp.1-10
- 吉田金彦（1971）「自発の助動詞」松村明編『日本文法大辞典』明治書院、pp.301-302
- 吉田金彦（2010）『吉田金彦著作選 7 現代語の助動詞』明治書院

## 謝 辞

本研究を遂行するにあたり、多くの方々にご指導およびご協力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

私は修士課程において日本文化を研究分野としており、博士課程で日本語言語学の課題を始め、ほとんどゼロからのスタートでした。要領を得ず、何をどうすればいいのか分からなかった私に、指導教員である佐藤暢治先生は多大な理解と寛容をもって、焦らず迫らず、終始穏やかに懇切丁寧なご指導を賜りました。テーマの決定、研究の進め方や論文の書き方から、研究に対してとるべき姿勢まで、いろいろと貴重なご教示をいただきました。心より深謝の意を申し上げます。

副指導教員の深見兼孝先生と高永茂先生には、本論文の作成にあたり、たいへん有益かつ的確なご意見をいただきました。また、堀田泰司先生と関西学院大学の于康先生には、本論文の審査に際してたいへん示唆に富んだコメントとアドバイスをいただきました。厚く御礼申し上げます。

国立国語研究所コーパス開発センターによって構築された『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の貴重なデータを使わせていただき、はじめて本論文を完成させることができました。コーパスの構築に力を添えた方々に心よりお礼を申し上げます。

資料に使う日本語コーパスを探すとき、先輩の裴麗さん、関承さんにはいろいろと相談にのっていただき、お世話になりました。同じゼミの李正政さんと唐彬さんには、研究面においても生活面においても様々のご協力をいただきました。深く感謝の意を表します。

研究室の各位には、いつも仲良く親切につき合ってください、また国際協力研究科の事務室の方々にも、多大なご支援をいただいたおかげで、居心地の良い雰囲気の中で滑らかに研究生活を送ることができました。誠にありがとうございました。

生活費を顧慮せず研究に専念できたのは、三年間の奨学金を提供してくださった中国国家留学基金管理委員会および日本電通育英会のおかげです。厚く謝意を申し上げます。

私が広島大学に留学することができたのは、中国中山大学の徐愛紅先生に指導教員の佐藤先生にご紹介いただいたのがきっかけでした。おかげさまで、三年間の留学体験を人生の貴重な財産の一つとして収めることができました。徐先生には、感謝の念に堪えません。

その他、ご援助いただいた多くの方々に心より感謝しております。

最後に、傍らでいつも暖かく支えてくれた家族に感謝します。